

英領馬來	一三二・二	五、三四七
英領ボルネオ	二一一・六	七四三
比律賓	二九六・三	一五、九八四
(I) 計	三、〇〇四・〇	二二一、一二〇
濠洲	七、七〇三・九	六、八六七
新西蘭	二六七・八	一、五九二
(II) 其他共計	八、六〇〇・〇	一〇、六〇〇
ビルマ	六〇四・七	一五、六〇〇
印度・セイロン	四、五七一・一	三六五、六四八
(IV) 計	五、一七五・八	三八一、二四八

しかも此等の地域が各種の工業原料資源として、或る場合は殆ど絶對的資源（ゴム、錫、キニ）として、或ひは食糧資源としていよ／＼豊富なもの期待される以上、戰勝せる獨伊のヨーロッパ生活圏が有力な發言を留保すべき理由の十分に存在することを考へておかねばならぬ。アメリカに至つては益々深く介入し來る勢ひにある。ハヴァナ汎米會議に於ける活動、對カナダとの常設共同防衛委員會、熱狂的軍備大擴張は勿論、ヨーロッパ諸國の在米資産四十三億ドル（和蘭十億七千萬ドル、佛の六億ドル）但し他のイヤマーク金を合算すれば二十億ドル、白耳義の三億ドル等）を獨、伊、ソの手に渡らぬ様に封鎖し對歐投資及未決濟輸出代金の回收が不能な時一方的にこれを接收せんとすると共に、南中北アメリカに於けるヨーロッパ諸國植民地の接收の

意志を表明し、アメリカの新たな帝國主義化が開始されてゐる。この事は同時に、極東に於ては比律賓獨立の延期、英、蘭の遺産繼承の積極的要求となつて現れてゐる。ハル國務長官が「合衆國はゴム、錫、キニ、ネ及びコブラの様な最も重要な原料を蘭印に依存してゐるのであるから、如何なる意味に於ても同島の現状を變更することに對し無關心たり得ない。」と聲明したのも實に自然の勢ひであつた。そして既にゴム、錫、マンガンの獲得貯蔵を目標として、資本金各五百萬ドルのゴム貯蔵會社、金屬貯蔵會社を設置し、前者は十五萬噸（封度十八乃至二十仙）の買付資金として一億三千万ドル、錫その他の買入資金一億ドル（錫七千五百噸）の計畫を進めてゐる。この事を國際カルテルとして絶對力を有つ國際ゴム管理委員會及び國際錫委員會との協定によつて行はれることと思ひ合せる時、蘭印、馬來、結局、南洋の米洲カルテル化の進行を表明するものと言はねばならない。これに對し他方、蘭印、馬來、或ひは濠洲等が大戦の影響の下に益々對米依存關係を經濟的に強めざるを得ないばかりでなく、政治的軍事的にもアメリカに益々傾く外には植民地的南洋を日獨伊に對しそれぞれに維持することが出來ないといふことがアメリカの以上の如き意圖をかき立て、それを根據あるものたらしめつゝある。この事は、未だ微弱ではあるが、ソ聯がイラン、アフガニスタンを通ずる對インド南下、國民會議派その他のインド獨立運動、抗日支那に於ける進出、等と共にインドネシア民族運動に對する政治的影響力を通じて介入し來る可能性と對照を形成しつゝ、南太平洋問題を實に多角的なものたらしめてゐる。



### 商業主義の歴史的限界

次に、然らばかゝる國際關係下にある南洋地域を日滿支と東亞的單位により密接に一體化し得る可能性と合理性とは何處に存在するであらうか。我々は茲に東亞經濟圏の存立如何に關する重大問題に逢着する。この場合、勿論、日本の軍事的或ひは政治的勢力が他の生活圏に對抗して東亞的に結合せしめる、少くとも結合を防衛する要因となることは可能であらうし、これも一段と強化され得るかも知れないが、前述の如く南洋問題がそのまゝ、世界の大事業であることはそのみに頼り、或ひはそれを最後の據點とすることは決して確乎たるものではあり得ない。然るに政治的には南洋を歐米諸國の植民地として存続せしめながら、これを經濟的に結合せしめんとするならば更に困難なものがあらう。勿論、日本は今後の重工業能力の發展を期し、或ひは今日南洋諸地域が必要とする生活必需品(輕工業)の輸出増進を通じて貿易的結合を擴大することが出来るが、それとても歐米諸國を壓倒し得る程のものを直ちに期待し得ないであらう。また資本投下を通じて南洋地域經濟を方向づけることも、勿論、次第に可能であらうが、既に今日起つてゐる列強の進入とその大きさを見ただけでも、それを切開して東亞的結合の基礎を築くことは決して容易なことではないのである。南洋地域に對する列國の投資に關しては殆ど信頼すべき資料が無いが、断片的なものを綜合して見ても、日本の投資が歐米諸國のそれに對して著しく懸隔して居り單なる投資競争を以て東亞生活圏の結成の基礎と考へることは今後如何に日本が發展するとして

も、一方的なる幻覺に過ぎないと斷定しても不當ではないであらう。

しかも投資とは單なる金額や資材の問題ではなく、その土地の經濟機構との結合、限らない連鎖を形成する人的連繫の上のみ築かれ、そのためには幾變遷せる年月を要して始めて培はれるものであることは、事變下の支那に於ける經濟工作を通じて我々が遺憾なく體驗したところであるが、新たな南方地域の場合は一層の困難を感じなければならぬであらう。

かくて第三に南方開發と東亞經濟圏の形成とはこれまでの商業主義的觀念を以てしては不可能であり、舊い方式から離脱しない限り決して歐米諸國に優越することが出来ないことは勿論、單に英佛蘭米に日本が代るといふのであつては、道義的にも日本南進の根據が成り立たず南方の諸民族をひきつけることも出来ない。そして亞細亞は永久に分裂し、それぞれの植民地國家の方へより強く牽引せられるのみであらう。南方地域は諸種の點から見て、あまりに植民地的に開發され、國際資本の機構の中にその自立性を失つてゐる。支那にして既にさうであつたが、南方に於ては遙かに著しいのである。換言すれば東亞經濟圏は日本が他の諸民族の自立性の援助、東亞を一大單位とするそれらとの民族的、政治的結合の建設を通じて、南方經濟の開發と方向づけとの爲に戦ふ場合にのみ可能である。この事は人道主義的な理想論ではない。支那事變が我々に與へた體驗による數々の實際政策的要諦であつて、日本の南進は初めから一貫せる計畫と方式との下に行はれなければならぬ。



### 東亞生活圏の基礎としての民族的結合

然るにこの東亞諸民族の政治的、民族的結合こそは植民地化の條件の下に正に經濟的關聯以上に分散し稀薄化されてゐる。商業主義の精神は諸民族を腐敗せしめ、無氣力化せしめる。日本も亦、南方諸民族に對して政治的影響と指導とを及ぼさうとは殆ど考へてゐなかつた。だが今は日本の方からもその他の東亞諸民族の側からも隣接し地理的歴史的に或ひは民族的に交渉の深い諸國家民族がより大なる單位、圈に結合する外に存立と開放の道は開かれないことを明白に意識しつつあるのである。

ところで東亞に於ける民族的結合はそれぞれの民族内に於て東亞を一體として觀念し且つそれを最も前進的に實現し得る指導者層の存在を第一の要件とし、他方、民衆、國民に生活的に深い關聯を有つ經濟活動に於て、これまでの和蘭的或ひは佛國の原始的植民政策を敢然と廢棄し、新たな國家的民族的目的と協同の方式とを例へば日本の南方經濟工作そのものの中に遺憾なく實現することを同時的な要件とする。この場合、日本側の指導的用意と計畫性と獻身とは支那國民に對するよりも遙かに必要でもあらう。この事はわが日本をしてこれらの諸民族に開放の原理を體現するものとして行動によつて映せしめることの緊切さを物語るものである。これに關聯して歴史は教へる。明治維新はアジアの諸民族をもまた國內革新により近代國家を形成し得ることの逞しい實證として期せずしてその影響は大きかつた。殊に日露戰爭による日本の快勝はアジア

諸民族に確信を與へた。今日の中國國民黨の創設者たる孫文も、この感激の中に日本に於て革命黨を結成したし、ヒトラも亦、國家主義者として熱烈に日本を支持したと自傳に書き、インド山間の住民さへ夢のやうに喜んだことをハンス・コーンが記述してゐる。また、比律賓の民族運動の指導者達が連署して歐米の羈絆にあるよりも、寧ろ日本の合邦を要請し來つた事實さへ存在してゐる。日本は今、再び新たな國際的環境の下に東亞諸民族開放の目標となる爲に偉大な革新を遂げることを要請されてゐるものと言はねばならない。そしてかゝる大業を成就し得る日本の政治勢力を中心として諸民族中の指導的要素を選抜せる東亞的なる一大政治勢力が結集せられ、歐米諸國の植民的支配を内部から一掃することを期待する外には有力な東亞生活圏の結成の道は存在し得ないであらう。かく日本の南進は單なる膨脹論によるものではなく以上の如き深い歴史的要請に基くものでなければならぬが、これまで遠隔視されて來た南方諸民族が血液、生活、歴史、地理、その他に於て交流深き近親的諸民族であることを再發見することによつて、日本の南進は十八九世紀的帝國主義や功利主義を遙かに越えた深い民族的契合から發足するに至るであらうことが豫想され、そこまでに徹した民族開放の原理と熱情とに貫かれない限り、經濟的發展の一定の目標すらも達成するところが困難となるであらう。

ところで最後に興味ある事は多くの立遅れた諸民族、それだけとしては恐らく容易に自立し得ないであらう諸民族を指導するに當り、或ひは東亞經濟圏の建設に當つて有力なる協力者たる素



質を有する活力ある民族は日本を外にして支那民族であることである。南方に於ける民族的政治的勢力としての支那民族、特に經濟に於ける華僑の勢力とその地位の積極性、日支兩大民族の深い結合こそは南方開放の唯一の前提でもあることが一段と明白になつて來るのである。實に深刻なる一大暗合であると言ふべきである。

華僑の分布		對全住民%
蘭領東印度	一、一九〇	二・〇
佛領印度支那	三二六	一・四
英領馬來	二、二二〇	四一・五
比律賓	七六・五	〇・五
泰	二、五〇〇	一七・三
合計	六、三一三	五・二

これを要するに日本の南進は東亞諸民族の開放の過程となり、何よりもこれらの民族的要請に基く民族的國民的運動を育成しつゝ、これを東亞的結合に強力に導くことを目標としなければ、經濟的開發も東亞經濟圏の形成も言ふべくして不可能であることを痛切に覺悟しておかねばならない。嘗て東亞協同體の思想に客觀化された新たな東亞の精神は、一層、果敢な民族再興と民族協同の方式に一層高く力強い指導者原理が結合されてその昂揚されることが必要であらう。しかし此の事は心から日本を愛し、支那を愛し、東亞諸民族を愛し、それ故に最もよく東亞を知る

ことによつてのみ生れ得るのである。(一五・九)

## 第二節 南洋外國貿易の構成

### 貿易の東亞的再編成への志向

第二次歐洲大戰の諸影響は周知の如く實に廣汎且つ深刻な性格を有つものであることが日に増し明かになりつゝあるが、就中海外貿易、又それを通じて全經濟體系に及ぼしてゐる歴史的變更の波紋は客觀的なものであるだけに極めて鮮明である。一般的に言つて東亞諸國の貿易は歐洲圏から切斷乃至遠心的状態に陥り、その爲に對米轉換の傾向が加速度化したが、殊に注目すべき事實は已むを得ざる結果に過ぎなかつたとは言へ、非交戰的な近接東亞諸地域間の相互貿易が著増し、それへの貿易の轉換が今後續いて行くであらう事である。日本の全アジア及び大洋洲に對する十五年五月間累計貿易は輸出十一億三千二百八十六萬圓、輸入七億八十四萬圓に上り前年に比しそれぞれ四〇・三%、三三・七%の著しい増加振りを示して居るが、一方支那に於ても例へば上海の對南洋諸國貿易(蘭印、佛印、比律賓、泰、馬來、英領ボルネオ、ビルマ)に於ける同年半期輸入は約二千四百萬金單位で前年の二・三倍、輸出は約八千八百萬元で四・七倍といふ驚異的な「南進」を遂げつゝある。勿論、これには佛印、ビルマルートの如き對英米への仲繼貿易的性質の



ものも少からず存在するが、それを含めて東亞が東亞に餘儀なく密集せしめられつゝある方向をも見逃すことは出来ない。或ひはこれを指して單に戦時の變則的傾向と見る者もあるかも知れないが、しかし第一次世界大戦の經驗を基礎として考へても、これは戦後に残り發展すべき本質的方向を内在してゐることを發見せざるを得ない。それは他方英帝國の瓦解と自治領の遠心的傾向或ひは計畫的な自立化(濠洲、新西蘭の單位國家化、印度獨立乃至自治領化、タイ國の自立傾向)佛國崩壊と植民地の自立化、更にかく自立化し行く諸民族、諸國家が舊來の單位のみではその自立を實現し得ざる爲に必然、東亞的乃至諸民族聯合的な政治動向を次第に強化し來ることによつて、東亞諸國の貿易的結合の一段の緊密化延いて東亞生活圏の形成が豫想される。勿論、その實現を見るまでには多くの歳月と戦ひとを要するとしても、それは新に展開されつゝある力強い一傾向として注目される。

#### 南方諸國の對外貿易量

ところでこの東亞生活圏は諸民族國家の政治的結合の發展段階に應じて種々の形式と段階とを辿り、理想的な體系化は必ずしも直ちに望まれないが、にも拘らず經濟的には先づ貿易的結合を條件として發展し來るであらうことは言ふまでもない。従つて第一に東亞新生活圏の經濟的基礎は何よりも先づ東亞圏内部諸國間の相互通商量を最大限度にまで優先的に擴大せしめることによらねばならない。この場合、東亞生活圏の新方向たる南太平洋諸國が如何なる地位を占めるか具

體的に考察して見よう。正金建値年平均を以て圓に換算せるものは次表の如く十四年度輸出三十八億三千百萬圓(判明分のみ)に付全體では四十二、三億圓(輸入二十八億八千二百萬圓(全體では三十一、二億圓)同年の日本外國貿易總額に略近い。一九三四年より八年に至る五ヶ年平均では輸出三十六億七千三百萬圓(日本帝國より約三二、四%大)、輸入二十六億三千二百萬圓(日本帝國より一〇、六%小)である。

南方諸國の對外貿易量 (單位 百萬圓)

輸 出	一九三九年	一九三八年	一九三七年	一九三四—八年の五ヶ年平均
蘭領東印度	一、五三〇・〇	一、二七〇・〇	一、八三一・〇	一、二八八・六
英領馬來	一、四九四・四	一、一四〇・〇	一、八一〇・〇	一、三〇九・七
比 律 賓	四六七・五	四〇六・〇	五三一・一	四二二・五
泰 國	—	三一八・七	二六四・一	二七七・一
佛領印度支那	三三八・七	二八八・九	三六三・〇	三〇八・一
サラワク王國	—	五二・三	六五・四	五〇・四
英領ボルネオ	—	一〇・三	一四・一	一六・〇
葡領チモール島	—	〇・三	〇・八	〇・六
合 計	三、八三一・六	三、四八七・〇	四、八八〇・〇	三、六七二・九
輸 入	一九三九年	一九三八年	一九三七年	一九三四—八年の五ヶ年平均
蘭領東印度	九三一・一	九二四・〇	九六〇・九	七六三・七



英領馬來	一、二四六・九	一、〇九四・八	一、三七二・一	一、〇八一・一
比律賓	四七三・四	四六五・〇	三八七・二	三五四・八
泰國	—	二〇二・〇	一七四・三	一七四・六
佛領印度支那	二三〇・九	一九四・七	二一八・六	二〇九・六
サラワク王國	—	四四・七	四五・八	三七・六
英領ボルネオ	—	六・五	六・三	八・六
葡領チモール島	—	一・〇	一・〇	〇・八
合計	二、八八二・三	二、九三二・七	三、一六六・一	二、六三二・五

この新たな南方領域が日滿支に協同し結合し来るならば、該年度に於て輸出入共に百億圓前後の大貿易圏となるし、一九三八年までの過去五ヶ年平均をとれば輸出約八十二億圓、輸入八十億四千五百萬圓となる。更に濠洲、新西蘭、印度、ビルマ等が参加し来るとすれば東亞大經濟圏は該年度はざつと輸出百六十二億圓前後、輸入百四十九億圓前後の世界貿易に於ける大出超圏を形成し、過去五ヶ年平均に於ては輸出百三十七億二千七百萬圓、輸入百二十二億八千二百萬圓、出超十四億四千四、五百萬圓の大貿易圏となるのである。

東亞大經濟圏の對外貿易 (單位 百萬圓)

輸出	一九三九年	一九三八年	一九三七年	一九三四—八年平均
日本	三、九三二・九	二、八九六・七	三、三一八・八	二、七七四・九
滿洲	八三四・七	七二五・五	六五四・三	五六八・六

支那	四五三・八	五二七・八	八五七・五	七〇五・六
香港	五六七・六	五五〇・七	五〇一・四	四七三・六
合計	五、七八九・一	四、七四五・七	五、三三三・〇	四、五二二・七
南方諸國	三、八一三・六	三、四八七・〇	四、八八〇・〇	三、六七二・九
以上計	九、六二〇・七	八、二三二・七	一〇、二〇三・〇	八、一九五・六
濠洲・新西蘭	二、四三二・五	二、六一二・七	二、九四四・一	二、四四六・八
印度・ビルマ・セイロン	三、一四九・八	三、一〇五・五	三、五四三・七	三、〇八四・七
總計	一五、二〇三・〇	一三、九五〇・九	一六、六九〇・八	一三、七二七・一
輸入	一九三九年	一九三八年	一九三七年	一九三四—八年平均
日本	三、一二七・五	二、八三六・二	三、九五四・七	二、九四七・五
滿洲	一、八一六・一	一、二七四・七	八八七・四	八一〇・三
支那	一、四〇四・九	九一七・二	九七六・五	一、〇五四・九
香港	六三二・三	六六五・〇	六六一・〇	五九九・八
合計	六、九八〇・九	五、六九三・二	六、四七九・六	五、四一二・五
南方諸國	二、八八二・三	二、九三二・七	三、一六六・一	二、六三二・五
以上計	九、八六三・二	八、六二五・九	九、六四五・六	八、〇四五・〇
濠洲・新西蘭	一、九八〇・〇	二、二一二・九	二、一四六・二	一、八〇〇・三
印度・ビルマ・セイロン	二、四二二・〇	二、五三〇・三	二、八八二・二	二、四三七・三
總計	一四、二六五・二	一三、三六九・一	一四、六七四・一	一二、二八二・六

註 一九三九年分南方諸國とは前記四ヶ國のみ、印度の項はビルマ不明につき未加算



國別貿易對と米依存強化

第二に南方諸國の對外貿易は次表の如く歐洲圏へ判明分だけでも九億七千六百萬圓、(輸出總額の二八・五%)の食料、原料を輸出し、その反面、少くとも九億三千萬圓(二八・八%)の輕工業品、重工業品を輸入しその市場となつて來た。殊に合衆國に對しては原料供給地として八億八千九百萬(約二六%)を輸出し、また四億八千七百萬圓、(二〇%)の商品市場となつてゐたのである。そしてかく過半が東亞地域外との貿易である事は南方諸國の自立と東亞的結合への参加が多きの困難を藏してゐることを示す一方、一旦東亞生活圏への動きが進行する場合には東亞諸國の自立的繁榮の可能性を約束するものでもある。他方、南方諸國相互間の貿易は約七億圓(輸出では總額の五分の一、輸入は四分の一)これに日滿支、濠洲、印度を含む大東亞圏は輸出十二億一千萬圓即ち總額の三五・三%、輸入十二億九千萬圓、四四・八%に達する。

南方諸國の國別貿易 (一九三八年、單位 百萬圓)

輸出先	蘭	印海峽植民地	佛	印	泰	國	比律賓	計	%
英	六七・九	一六三・二	六〇・二	四・五	一〇・五	三六三・一	三六三・一	一〇・六	
和	二五九・一	三三〇	—	—	八〇	九〇	二八・一	八・四	
佛	二二六	八七〇	一〇六・六	〇・三	—	—	三三三・一	六・五	
獨逸	四四・九	—	—	九・六	—	—	九七・二	二・八	
歐洲圏計	四七四・六	—	—	—	—	—	九六・一	二・八	
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—

輸入先	蘭	印海峽植民地	佛	印	泰	國	比律賓	計	%
米	一七三・五	—	—	—	—	—	—	一七三・五	二六・〇
日	—	—	—	—	—	—	—	—	—
日・滿・支	—	—	—	—	—	—	—	—	—
南方諸國	—	—	—	—	—	—	—	—	—
以上東亞計	—	—	—	—	—	—	—	—	—
歐洲・新西蘭	—	—	—	—	—	—	—	—	—
英	—	—	—	—	—	—	—	—	—
印・ビルマ	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	一、七三〇	一、一四三	二八・九	三八・七	四〇・〇	三、四三〇	三、四三〇	一〇〇・〇	
歐洲圏計	—	—	—	—	—	—	—	—	—
獨逸	—	—	—	—	—	—	—	—	—
佛	—	—	—	—	—	—	—	—	—
和	—	—	—	—	—	—	—	—	—
英	—	—	—	—	—	—	—	—	—
日	—	—	—	—	—	—	—	—	—
日・滿・支	—	—	—	—	—	—	—	—	—
南方諸國	—	—	—	—	—	—	—	—	—
以上東亞計	—	—	—	—	—	—	—	—	—
歐洲・新西蘭	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—



英印・ビルマ	三・三	八・三	一六・〇	四・四
合計	九四・三	一〇四・八	二〇二・〇	四二・〇

第三に、日滿支を通じて十四年十一億九千萬圓の入超で、十三年までの五年平均に於て八億九千萬圓の入超であるが、南方地域は著しい出超で夫々九億四千九百萬圓、十億四千萬圓であつたから、合計十四年は二億四千二百萬圓の入超でも、十三年までの五年平均は全體では一億六千萬圓の出超となり、商品貿易外を別とすれば經濟的安定や自立性が得られる。之に濠洲、印度が加はるならば、逆に十四年度も九億三千八百萬圓、十三年迄の五年平均では十四億五千四、五百萬圓の出超となるのである。そしてこの國際收支に於ける南方諸國の役割をもつと具體的に見ると英印、濠洲を含む對東亞内貿易に於ては判明分だけでは出入差引八千萬圓の入超であつて、出超は東亞圏外の諸國、(その中米國に對しては四億圓以上の出超)との貿易、即ち輸出二十二億一千萬圓、輸入十五億九千百萬圓、差引六億一千九百萬圓から生じて居ることは日本の對第三國貿易と對蹠的に興味深い。そしてこの傾向は十四年度に一層著しく例へば蘭印、海峽植民地、佛印、比律賓等の判明せる部分をとつて見ると英印、濠洲を含む東亞に對する南方諸國の輸出が十二億百萬圓、輸入十四億二千四百萬圓で入超二億二千二百萬圓に對し、それ以外の圏への輸出は二十六億二千八百萬圓、輸入十四億七千六百萬圓で出超實に十一億五千二百萬圓であり、特に對米貿易は輸出は總額の三四・六%に當る十三億二千七百萬圓、輸入は總額の一八・四%に當る四億

九千六百萬圓で八億三千萬圓の出超先となり、南方諸國の對米轉換は輸出入の絶對額によつて出超尻に於て實に急激なものが感ぜられる。米國の南方問題への鋭い關心は決して偶然ではない。

**貿易から見た東亞圈建設の物的基礎**

けれども東亞生活圏の貿易的再編成は單に金額的に表現されたものだけから、その可能性や安定性、發展性を豫測することは出来ない。こゝに物の側面から深い検討を要する。この事は東亞諸國間の相互貿易量の擴大と再編成とが農、鑛、工業に互る生産力の擴大と再編成とを同時的に促進し或ひは前提とすることを示してゐる。統計の不統一その他の爲に正確な綜合的概觀を得ることは困難であるが、次表の如く石油、錫を初めマンガン、銅、金、クロム、鐵その他の鑛産資源に恵まれ、前二表は輸出の基幹をなし、錫の如きは世界市場に於ける壓倒的に獨占的商品である。その他の鑛産物は現在の輸出货量は兎に角今後の開發を期待し得るものである。従つてこれが東亞の工業化に寄與する可能性は著しく大きい。統計は舊いが昭和十年の國際聯盟統計によると日滿支の石炭純輸入量百萬噸に對し南方五國(蘭印、佛印、泰、馬來、比律賓)の錫の純輸出力は十七萬噸であり、ガソリン、重油、燈油、機械油の要輸入量六十二萬噸に對し四百六十五萬噸の輸出力なる一方、原油要輸入量三百十七萬噸に對し二十四萬三千噸の輸出力を残り、結局石油會社としては需要を充した上で百十萬噸以上の餘力を有つことになる。鐵鑛の輸出力は今のところ百六十八萬噸で三百四十萬噸に及ぶ要輸入量に比較すれば不足するが、未開發資源は豊富である



ことが傳へられるだけに東亞の自給自足を豫想することが出来よう。錫の輸出力は日滿支の今日の需要を遙かに越えて四千五百吨の消費に對し十萬五千吨であり、アルミニウム（ボーキサイト純分）一萬吨（需要九千四百吨）その反面、銅百吨（五萬二千二百吨）マンガンを三萬七千五百吨（需要二十萬吨）鉛三百吨（九萬吨）亜鉛三千百吨（四萬二千吨）は不足してゐるが、印度、ビルマ、大洋洲との交流を通じて銅以外はカバーし得るであらう。合金用に重要なニッケルもニューカレドニアの東亞團結によつて補足され得るであらう。磷酸鹽の如きも輸出力十四萬八千吨に對し需要は七十五萬八千吨であるから補足し得ないが、今後の開發に期待し得る。

南方諸國商品別輸出入（一九三八年 單位 百萬圓）

輸 出	蘭	印海峽植民地	佛	印	比律賓	泰	其 他	合 計
石 油	三三三	一〇六					二八四	四一三
錫 及 鐵	六四六	一五七				四七六		三〇四九
石 炭	四七			二五				一七二
マンガン、銅、金	〇九			一〇二				二六七
クロム、鐵其他	三二五			三三				八〇〇
鐵産以上計	三二六			三〇				九六六
ゴ ム	三二					四〇〇		九六六
麻 類								六七九
木 材				二〇				二七六
規那皮、キニーネ	三九				一〇〇			三三九

以上原料計	コ プ ラ	檳 榔 子	その他油實種子	植 物 油 類	米	タビオカ	茶 草	魚 類	珈 琲	胡椒、香料	果 實	以上飲食料計	玉 蜀 黍	油 粕
三五六	七三八	二一六	四一	三〇七	一四	一七八	一〇八七	七五	一六四	三三九	一一	二七〇九	六一	七七
三六〇	二〇〇	二〇九	二二三	二〇二	二六七	五二	二二		一四九	三二	一四二	六四	一〇	
六〇〇					一〇三六				八二		二七	二六八		
四八八	四三〇	一三四		九〇〇				一七四				一七四		九七
五〇三					一五〇六							二五〇六		
二二六														
一、〇四三〇	一四〇九	四四九	四一	七五二	二六六〇	三三九	二二〇	九一五	三九六	二七〇	一八三	六〇〇〇	七一	一七四

次に錫をも凌ぐ獨占的國際商品の輸出は周知の如くゴムである。またマニラ麻、カボックその他の硬質纖維も、規那皮もチーク材その他の南洋材もゴムと同様に獨占的な商品であるが、これだけでも十億圓の輸出を突破する。同じく前述の聯盟統計によると昭和十年の日滿支の要純輸入



量であるゴム輸入量約六萬噸に對し、南洋五ヶ國の輸出力は七十六萬五千噸、麻八萬七千噸に對し輸出力は三十萬噸に及ぶ。棉花、黃麻、羊毛は満たされないが、印度、濠洲との密接な結合によれば、東亞圏は原料に於ては過剩部分を多くの點に有つ豊庫である。

更に熱帯特有なコブラ、ココ椰子の如き植物油原料及び植物油はこれまた獨占的な特殊商品である。日滿支は例へば滿洲大豆、支那の落花生その他の如く、採油原料及び植物油に於ては既に豊富であるが、南洋の参加はこれを壓倒的なものにする。この種の産物は高級食料品(油脂)その他に利用され、その粕は飼料又は肥料として、間接にまた食料品に轉化する。日滿支との關係に於ては、前述の統計はコブラ一萬五千六百噸の需要に對し八十九萬三千七百噸の輸出力、棉實、胡麻、蓖麻子、落花生は需要十五萬四千噸に對し二萬九千噸に止つてゐる。問題の飼料玉蜀黍は十萬六千噸の再輸入量に對し四十九萬七千噸の輸出力を有し有望である。

また南洋は飲食料品資源として言ふまでもなく富源である。米はアジアの主食品で東亞を結合する紐帶であるが、茶、煙草、珈琲、胡椒、香料、果實等南方特有の輸出商品で歐米の需要に對應してゐるものが多い。米は三百十一萬噸、珈琲八萬一千七百噸、ココア一千六百噸、砂糖は百五十四萬九千噸の輸出力を今日でさへ有つてゐる。南方を特に濠洲を含めてのその結合によつて初めて日滿支の食料、人口問題の根本解決が可能であることがアリ／＼と知られる。

次に参考にまで南方諸國の世界生産に於ける地位を列記する (英國々際問題研究所の報告「原料」)

による。一九三七・八年の生産、一部は輸出)

品名	世界實生産(千噸)	南洋諸國	印度・ビルマ・濠洲	計
アンチモニー(純分)	四一・六	—	一・五	一・五
鐵 礬 土	四、〇〇〇・〇	五・五	〇・六	六・一
ク ロ ー ム	五九〇・〇	四・八	九・四	一四・二
銅	二、三四八・〇	—	一・五	一・五
鐵	九八、〇〇〇・〇	—	三・二	四・六
鉛	一、七〇五・〇	—	二〇・一	二〇・一
マ ン ガ ン	二、九七〇・〇	〇・七	一七・九	一八・六
水 銀	四・九	—	—	—
ニ ッ ケ ル	一一四・〇	—	五・四	五・四
錫	一五八・〇	五二・二	五・一	五七・三
タ ン タ ー	二一・八	六・六	一七・七	二四・三
鉛	一、八五六・〇	〇・三	一四・三	一四・六
石 炭	一、三〇七・四	一・三	二・九	四・二
石 油	二七二、〇四四・〇	三・〇	〇・一	三・一
マ グ ネ シ ャ ム	一、七七三	—	—	—
加 磷	一四、五〇〇・〇	一・四	一・九	三・三
黄 鐵 礦	三、二〇〇・〇	—	〇・一	〇・一
鐵	一〇、六二〇	—	〇・一	〇・一











産物は極めて多種多様であつて、主要農産品としては護謨、砂糖、米、コブラ、椰子油、珈琲、茶、煙草、規那皮、硬質繊維、カボック棉、タバコカ、胡椒等であり、就中護謨の世界總産額に占める割合は一九三五年度に於て九一%、同じく米二二%、椰子油(輸出高)四一%、コブラ(輸出高)七五%、茶二〇%、規那皮九八%、硬質繊維(輸出高)五五%、カボック(輸出高)八七%、タバコカ八一%であつた。尙ほ砂糖産額は世界産額の六%乃至一五%内外を占めてゐるに過ぎないが爪哇はキューバに次ぐ世界第二の輸出市場である。いま一九三八年年度の南洋主要農産物數量を國際聯盟統計年鑑より作成し、世界に於ける地位を示せば左の如くである。(單位千噸、△印一九三七年、×印三ヶ年平均)

(一) 南洋主要農産物數量 (一九三八年)

	佛印	蘭印	英領馬來	比律賓	英領ボルネオ	泰	合計	世界	對世界%
米	△六、三〇九	△五、九六一	△七、〇	△三、三九六	△一、八六	△四、三五六	△二九、八八八	△三、九四〇	三・一
玉蜀黍	△六、三〇九	△五、九六一	△七、〇	△三、三九六	△一、八六	△四、三五六	△二九、八八八	△三、九四〇	三・一
珈琲	△三、九四〇	△一、九四〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△三、〇八八	△二、七、〇〇〇	二・六
甘蔗	△一、五〇〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	一・〇
茶	△二、二	△一、五〇〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	一・〇
大豆	△二、二	△一、五〇〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	一・〇
コブラ	△二、二	△一、五〇〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	△一、〇	一・〇

	一九三一年	一九三五年	一九三八年
椰子油(輸出)	〇	〇	〇
落花	△二、二	△一、〇	△一、〇
護謨	△三、〇	△三、〇	△三、〇
煙草	△三、〇	△三、〇	△三、〇
ニラ麻	△三、〇	△三、〇	△三、〇

(二) 主要農産原料及び食糧品生産に於ける世界的地位 (單位千噸)

	一九三一年	一九三五年	一九三八年
護謨	七二三	七三九	八八
砂糖	三、五六八	一、六二二	一〇
椰子油(輸出)	六二八	一、六八	六三
コブラ(ク)	九三〇	一一、一九一	七三
珈琲	一〇九	一一、一五	五・八
茶	八六	八三	二二
規那皮(輸出)	一四九	一〇四	五
硬質繊維(ク)	二〇九	二九六	一
カボック(ク)	二二	二八	一
カツサバ(ク)	二二	二八	一
米	一七、九六四	一八、五八四	二一(一九三七年)



註 臺灣總督府「南洋年鑑第三回版」、一九三八年は別の資料から採る。

このやうに豊富な農産資源を擁する南洋は、その世界的植民地の地位の故に、資源獲得鬭争を繞る本國並びに列強の政治的繫縛に十重二十重に圍まれ、その結果民度低き住民によつて營まれてゐる原始的な零細農的經營形態が存在する一方、他方に於ては護謨、砂糖等に於けるエステート農業に見られる如き資本主義的農業經營形態が並存してゐる。日支事變勃發以來の一大變革期に際會して戰時食糧品としての米、軍需品としての護謨、醫療品としての規那皮、工業用原料としての硬質纖維、コブラ、椰子油等の世界的需要は益々強まりつゝあるが、特に歐洲大戰再開以來、農産市場としての南洋の地位は愈々重大となつた。以下主要農産品につき概述すれば――

(1) 米――一九三七年に於ける米穀世界生産額は九三、九四〇千噸にして、うち亞細亞の生産は八七、七三〇千噸(九二・九%)を占め、世界に於ける米穀の生産を亞細亞が獨占してゐることを示してゐるが、このことは他面に於て、亞細亞經濟が米穀經濟と緊密な關係に在り、米穀經濟を通ずる共通の生活形態を形成し、歐米の小麥經濟のそれとは極めて對照的である。ところで同年に於ける南洋の米穀生産は一九、八五八千噸にして世界および亞細亞に占める比率は二一・一%、二二・六%と何れも大きくはないが、しかも世界に於ける三大米産國たる支那、英領印度および日本は自國の生産を以て消費を賄ふに足りないか乃至は殆ど輸出餘力を有たず、國際米穀輸出市場としては泰、佛領印度支那および英領緬甸が獨占的である。正金週報によれば一九三八年―九年

度亞細亞に於ける主要米穀輸出國としての緬甸および泰の輸出總量に對する百分比は四七% (三百五十五萬噸) および二二% (百六十九萬噸) であり一九三九―四〇年度輸出餘力は前者三百二十萬噸、後者百五十七萬四千噸と推定された。佛印に於ける一九三七年度米の生産額六百三十萬噸のうち百五十五萬噸(約四分の一)、泰に於ては同じく生産額四百五十六萬噸の約三分の一を占める百五十二萬噸の米が輸出され、米穀輸出の輸出總金額に占める比率は、泰國に於ては三八年、六七%、三八年四月―三九年一月累計六一%と何れも過半を占め、又佛印に於ては一九三五年約五割、一九三六年約四割と輸出貿易品中最重要な地位を占めてゐる。いま南洋に於ける米穀の南洋地域外への輸出能力を推定するに、極めて大ざつばな數字として百五十萬噸乃至二百五十萬噸が得られる。即ち次の如し。(單位千噸)

輸 出 國	一九三七年	一九三八年	一九三九年
佛 印	二、五四六・八	二、五八三・三	三、五五二・二
泰 國	一、五四六・八	一、〇六四・四	一、六九二・〇
緬 甸	九七七・七	一、五一八・九	一、八六〇・二
輸 入 國	一、〇五三・七	一、一一四・一	一、一一四・一
蘭 印	一七七・七	一七七・七	一七七・七
比 島	七四・〇	九・四	九・四
馬 來	七六七・〇	七六七・〇	七六七・〇
ホ ル ネ オ	一三九・〇	一六〇・〇	一六〇・〇



輸出超過

一、四六〇・八

一、四六九・二

二、四三八・一

註 蘭印輸入は一九三七年実績、比島は三七、八年実績、馬來は三七年消費量から輸入量を推定、ホ  
ルネオは三七、八年実績。ビルマを除く。

これ等亞細亞米の南洋外輸出市場としては佛印輸出額の四割前後を占めてゐる支那を除いては最近年亞細亞よりも寧ろフランス、ドイツ、ベルギー等の歐洲市場が重要であつて、一九二九年乃至一九三八年スエズ運河を経由して歐洲に輸入された米およびその副産物だけでも毎年百萬噸乃至百五十萬噸に上つてゐる。此の場合注目すべきはフランス植民地としての佛印の歐洲向輸出であつて、佛印米輸出に占めるフランスの割合は一九二八—三〇年平均二四%、三一年三三%、三二年三七%と年々増加し、また、一九三一年—三二年に於て西貢から歐洲に向け輸出された米穀總量は一、一三一千噸、即ち同年西貢よりの輸出總額の殆ど全部を占めてゐた。更に泰米の輸出先國別を見るに左の如くである。(單位千石)

	昭和十一年	十二年	十三年
馬來	三、八八九	三、一八九	四、三二二
香港	二、三三一	一、二九一	二、二五七
英印	八五七	二五一	二二
日本	三三三	二一一	一五六
滿洲	—	一四	一二四
支那	一六二	二七	二八

計	和蘭	英	獨逸
計	七、五六四	四、九八三	六、九〇九
	四一八	八三	三四二
	二四二	一〇三	一七一
	九〇	五一	三五五
	七五〇	二三七	八六八

上表によれば亞細亞地域に對する輸出が絶對的に優勢ではあるが、馬來に輸出されるうち歐洲に再輸出される部分が相當にある。一九三九年中歐洲大戰勃發氣構へによる英、獨、佛等の食糧貯藏よりする輸入引合は特に旺盛となり、それに日本および英印の買付も進み、ために泰米の歐洲向輸出も俄然増加した。かくして一九三八年に比し三九年は略々百萬噸の輸出増加となつた。然るに歐洲戰爭の深化による地中海航路の遮斷、船腹の不足等の原因から主要仕向地たる歐洲への輸出は極めて困難となつたが、他方に於て日本を始めとして支那、滿洲等、亞細亞諸國に於ける米穀不足乃至消費増加により、米穀經濟を通して強力に歐洲地域に制約されつゝ、あつた佛印、泰は茲に良き購買者を發見することによつて東亞經濟圏の一環としての自己を再發見せんとしてある。

これを日本内地との關係に就て見るに、わが國の米輸入は明治初年に始まり、日清戰爭を境として急激に増加し、年々十五萬噸から二十萬噸(一噸六石八斗として換算)前後に及び、更に第一次歐洲大戰中には躍進して昭和八年の如きは八十萬噸の多きに及んだ。これが主要輸入地は佛印



泰であつた。然るに昭和九年外米の輸入を制限してより次第に減少、特に佛印よりの輸入は殆ど跡を絶つに至り、昭和十三年度の輸入は僅かに泰よりの二萬二千噸を算するに過ぎなかつた。昭和九年以降昭和十三年に至る五ヶ年平均米穀輸入數量は三萬一千七百噸であるがその國別比率は泰九三・二二%、佛印三・〇八%、英印三・三八%、その他〇・三三%であつた。かくて日本の外米輸入制限令と對抗する佛印の對日輸入品報復關稅の設定となつて日、佛印貿易關係は極めて悪化しつゝあつたのであるが、今や蘭印と共にその歸屬が宙に浮きつゝある佛印および泰を米穀經濟を通じて東亞經濟圏に結合せしめる絶好の機會が到來せりと言はねばならぬ。固より日本に於ける食糧需給の不圓滑それ自身は不幸なる災ひには相違ないが、この禍を打開する方向が東亞生活圏建設の方向に合致する天の配劑たることに想ひを致し、これに對する高き指導原理が確立されるならば、これが爲に數億の國帑を費しても何等惜しむに足りないのである。

(ロ) 砂糖——南洋に於ける甘蔗糖生産は爪哇を主とする蘭印および比律賓が殆ど獨占し、世界甘蔗生産總額に占める比率は一九三七年一割五分前後である。従つて蘭印および比島の經濟は砂糖經濟の影響を強く受け、特に比島に在つては米國の砂糖資源開發方針に拍車せられて砂糖輸出の同島輸出總額に占める割合は一九三七年三八%(三億二百萬比中一億一千五百萬比)、一九三八年四三%(二億三千百萬比中一億比)、一九三九年四二%(二億四千二百萬比中九千九百萬比)と略四割を占めてゐる。又蘭印に於ては石油、錫、護謨と共に重要輸出品であつて、輸出總額に占

める割合は一九三七年の五・三%、一九三八年の六・七%、一九三九年の一〇・四%と漸次重要さを増しつゝある。

翻つて比島および爪哇糖の仕向先を見るに、比島に於ては一九三七年輸出總額八七一千噸の中九九・八%、一九三八年八九五千噸中九九・九%と殆ど全部が米國に輸出され、蘭印に在つては所謂スエズ以西の歐洲向は全體の三分の一以上乃至過半數を占め、之に對し東亞圏は漸次凋落しつゝある。即ち次表の如し。尙ほ其他亞細亞中には東亞圏に屬する滿洲國の分が含まれてゐるが、それは彼南、新嘉坡よりの歐洲向再輸出によつて相殺されるので、以上の比率にさしたる變化を與へない。

仕向國別爪哇糖輸出量 (單位 千噸 nett)		一九三七年	一九三八年	一九三九年
スエズ以西		三九一・九(三五・六%)	五七四・九(五三・七%)	五〇五・四(三七・二%)
英 國		二四・六	三九・八	三六・四
和 蘭		一一九・六	一六四・〇	一二四・三
スエズ地方		二四七・七	三七四・七	三四四・七
東亞圏内		四七一・六(四一・八%)	二四四・七(二二・八%)	二四三・九(一七・九%)
香 港		一一八・一	一〇一・七	一一四・三
支 那		四四・九	二三・〇	一六・〇
日 本		一七六・三	一四・七	〇・五



彼南、新嘉坡	九四・七	八一・六	九三・一
泰	二七・六	二三・七	二〇・〇
其他亞細亞	一九五・八(一七・四)	一五〇・三(一四・〇%)	五四七・五(四〇・三%)
ニュージールランド	六一・三	七三・七	四一・四
其他	八・二	二四・四	一九・五
計	一、一二八・八(二〇〇%)	一、〇七一・六(二〇〇%)	一、三五七・七(二〇〇%)

ところで東亞圏に於ける輸入減少は支那に於ける連年の戦亂による疲弊の結果としての消費減と臺灣に於ける砂糖生産の保護政策とに基くものである。即ち、一九三三年に於ける支那の砂糖輸入四千二百萬元は一九三八年二千萬元足らずと價格にして五割以上の激減を示してゐるが、此の間に於ける法幣の下落を考慮すれば數量的には甚しい減退振りであり、他方、日本に於ては昭和一年―四年の平均に於て毎年四十一萬九千餘の輸入を見つゝ、あつたものが、昭和十一年―十四年平均に於ては十二萬六千餘と三分の一以下に激落し、昭和十四年の如きは八百餘と殆ど輸入皆無に歸してゐる。此の間に於ける日本の砂糖生産額は七十八萬三千餘から百三十七萬三千餘と六十萬餘近くの増加となつてゐるが、同じ期間に於ける内地一人當り消費量が二一・三二斤より二一・九五斤(昭和九年より日支事變勃發年度たる昭和十二年平均)と約三%の増加を來し、他面に於て、膨脹する内地人口と急激なる工業化を辿りつゝ、ある滿洲國の消費増及び尨大なる支那人の消費を賄ふ途は、結局に於て日本の能力乃至は領導力に俟たなければならぬのであり、

かくて我々は現在見るが如き砂糖不足は當然忍ばねばならぬとするも、東亞生活圏建設百年の大計を見透すならば、南洋に比して生産條件が劣悪なる臺灣の糖業保護に汲々たるよりも、東亞生活圏に於ける國土計畫と脱み合せ、より廣汎な視野に立つて問題を解決すべきであらう。

(ハ) 茶、珈琲、煙草、その他の特産品——南洋茶生産額の世界産額に占める割合は二割前後であるが重要輸出市場としては蘭印に指を屈する。蘭印の茶輸出は一九三八年七萬二千餘、三十九年七萬四千餘であり、佛印には一萬五千餘前後の輸出がある。珈琲の生産も蘭印に殆ど集中され三八年の生産量は十萬四千餘、三七年、三八年、三九年の輸出量は十萬一千餘、七萬餘、六萬七千餘であつた。規那皮は南洋の獨占的特産物として廣く世界に販路を有ち、主要産地たる蘭印の産額は三七年一萬四百餘、三八年一萬一千餘、三九年一萬二千四百餘であつた。此の外胡椒、タバコカその他幾多の食糧品、嗜好品の産出があるが、殆ど何れも特産品としての世界市場を有してゐる。

(ニ) 護謨——周知の如く護謨は自動車、航空機等の車輛タイヤ、その他の軍需用原料、護謨靴、玩具その他の原料として廣く使用されてゐるがその生産地は殆ど南洋に限られ、主要生産地たる英領馬來、蘭印、佛印、英領ボルネオの世界總生産額に占める比率は九割近くに達してゐる。然るに、他方に於てはこれと對蹠的に、その消費地は米、英、獨、佛、日等の非生産地域が世界消費額の九割近くの壓倒的部分を占めてゐる。



世界主要國國民生産(積出)高 (單位 千英噸)

平均	一九三〇—三三年	一九三四—三七年	一九三八年	一九三九年
(A) 東亞圈	一九三〇—三三年 平均 七〇二・九	一九三四—三七年 平均 八五四・七	一九三八年 七二八・九	一九三九年 七四七・四
英領馬來	四三一・七	四二七・一	三七〇・八	三七五・四
蘭印	二四三・八	三四四・六	二九八・七	三七五・四
佛印	一三一・一	三三三・二	五九・四	
英領ホルネオ	一四・三	二九・八		
(B) 英印・錫蘭	六九・九	七八・三		
(C) 其他共計	七九三・六	九六五・四	八九〇・七	一、〇〇一・九
A-C	八八・六%	八八・七%	八一・八%	七四・六%

註 南洋栽培協會々報より作成。其他中には東亞圈に屬すべき比律賓、泰の産額が含まれ、一九三八年以降は英領ホルネオ、一九三九年は佛印の産額をも含む。別の統計によれば一九三九年の佛印輸出額は六八・五千噸。

世界主要國消費高 (單位 千英噸)

平均	一九三二—三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
(A) 米	一九三二—三六年 平均 五七五・八	一九三七年 六九七・一	一九三八年 五五一・八	一九三九年 七五〇・八
英	四五一・二	五四三・一	四一一・三	五七七・四
米	八八・六	一一二・〇	一〇三・〇	一二五・四
加	二四・三	二四・〇	二五・〇	三二・〇

洲	一九三二—三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
(B) 新歐洲圈	一一・七	一八・〇	一二・五	一六・〇
獨逸	一三一・六	一八〇・〇	一七一・〇	一五六・〇
佛蘭西	五五・六	九六・五	八七・〇	七二・〇
伊太利	五七・八	六一・〇	五九・〇	六二・〇
(C) 東亞圈	一八・二	二三・〇	二五・〇	二二・〇
(D) 以上累計	六〇・四	六〇・〇	四六・〇	四四・〇
(E) 世界	七六七・八	九三七・一	七六八・八	九五〇・八
A-E	八七四・五	一、〇八三・二	九一一・三	一、〇七八・七
B-E	六五・八%	六四・四%	六〇・五%	六九・五%
C-E	一五・〇%	一六・六%	一八・七%	一四・五%
D-E	六・九%	五・五%	五・〇%	四・一%
E	八七・七%	八六・五%	八四・二%	八八・二%

かくの如く生産地たる南洋が主要消費地たる米英本國及び新歐洲經濟圏から茫洋たる大洋を以て隔離されてゐる一方東亞生活圏の範疇に屬すべき諸國は日本を除いては、現在、言ふに足る需要國でないことは必然的に、従來、南洋をして歐米帝國主義に跪拜せしむる有力の條件を提供するものであつた。と言ふよりも、寧ろ、近代工業の發展に伴れ、國際的な原料獲得競争の過程に於て、戰鬪的な歐米帝國主義資本は茲に好個の投資對象物を發見し、エステート經營(大規模栽植型經營)形態を導入することによつて原始的な農業經營者たる原住民をその齒車の下に捲き



込みつ、彼等を資本主義の毒素に麻痺せしめ、生木を裂くが如く血の繋り、即ち民族的連繋を切斷してこれを白人の祭壇に供物として捧げしめた。試みに二、三の例を採らう。

一九三七年および三八年に於ける馬來の主として歐洲人經營に繋るエステート農園による生産額は夫々全體の六二・五%、六七・九%と三分の二前後を占めてゐる。

英領馬來の護謨栽培に於ける大園の地位 (單位 噸)

年	エステート生産量		小園生産量		合計
	生産量	(%)	生産量	(%)	
一九三七年	三一四、六五八	(六二・五%)	一八八、四六九	(三七・五%)	五〇三、一二七
一九三八年	二四五、二二〇	(六七・九%)	一一四、六七八	(三二・一%)	三六〇、八九八
内					
馬來聯邦州	一二九、七二八	(六九・四%)	五四、三三〇	(三〇・六%)	一八四、〇五八
海峽植民地	一九、一九三	(六六・〇%)	九、九〇六	(三三・〇%)	二九、〇九九
馬來非聯邦州	九七、二九九	(六六・五%)	五〇、四四二	(三三・五%)	一四七、七四七

佛印護謨栽培面積は三十一萬五千エーカーに達するがその三分の一は大部分歐人の經營になるエステート農園である。一九三六年—三九年平均の蘭印に於ける護謨輸出額は一億八千五百七十

七萬六千盾であつたが、そのうちエステート農園よりの輸出は九千八百六十一萬四千盾と全體の五三・一%を占めた。これを一般的に言ふならば、冒頭に於て述べたる如く、南洋農業形態は主として歐人經營のエステート農業經營と傳來的な住民農業の小規模(零細農)經營に分れ、前者は市場生産を目的とする作物、就中多年性作物栽培に集中する資本主義的經營であつて、一九三五年蘭印に於ける輸出農産物約三億盾中その三分の二、金額にして一億九千五百萬盾がこのエステート農業の所産であつた等々。

ところで全生産額の過半數を占めるこのエステート農業型體が支配的である護謨産業の南洋經濟に於ける地位を見るに、英領馬來に於ては一九三六—三九年平均輸出總額七億千八百九十餘萬弗のうち、護謨は三億五千八百七十餘萬弗と四九・九%、即ち輸出總額の半數を占め、蘭印に於ては同じ期間に平均輸出總額七億二千五百餘萬盾なるに對して、護謨輸出額は一億八千五百七十餘萬盾と二五・八%を占め、英領北ボルネオに於ては同じく輸出總額千五百五十餘萬弗中、護謨は六百四十餘萬弗、五五・八%を占めてゐる。佛印は馬來、蘭印に次ぐ世界第三の護謨輸出國であつて、近來生産の躍進に従つてその地位も漸次進みつゝある。泰に於てはその地位はさ程大きくはなく、一九三七年一三・四%に止つた。

かくして國際商品たる護謨生産は歐米資本主義の現地派遣部隊たるエステート經營によつて完全に支配され、住民小農園生産はこれに隷屬を餘儀なくせられつゝある。特に一九二九年に始ま







伊太利	二・四	一七・八	
和蘭	三・九	三・八	
白耳義	四・九	四・七	
諸威	二・〇	二・三	
東亞園(日本)	四・七(三七%)	五・一(三三%)	
其他共計	一五・三	一六・一	一五・九
註 南洋經濟研究所發行「研究資料」その他より作成。			

以上の外に山林資源、水産資源があるが、前者は所謂熱帯の多雨林に生ずるチーク材を始めとして竹、籐、ダマル等を海外に輸出し、後者は眞珠、高瀬貝その他の有用貝類に見る可きものがある。併し南洋の水産資源は、海棚狭き上に珊瑚礁多く、その他の自然的環境のために、廣大なる海域に比しては稍貧弱である。これ等に就ては後の機會に検討することによさう。

**わが貿易に於ける重要農産物の地位**

わが國內貿易に於て重要農林水産物の占める割合は、一九三六年輸出二四・五%、輸入五四・六%、一九三七年輸出二二・五%、輸入四四・二%、一九三八年輸出二四・八%、輸入三五・〇%と輸出は略々四分の一弱、輸入は二分の一強から三分の一強の間を往來してゐる。此の農産物貿易に於ける南洋の地位如何を少しく検討してみよう(此の中にはニウカレドニア、ギルバート、エリスおよびフィジー島をも含めてある)

(4) 輸出——日支事變勃發年度たる一九三七年の内地對南洋重要農産物輸出は七百五十八萬餘圓にして對南洋重要品輸出總額二億五千三百餘萬圓に占める割合は二・九%に過ぎず、更に同年内地農産物輸出總額七億二千八百餘萬圓に對比すれば僅々一%と物の數でなかつた。これによつて、南洋は農産物輸出市場としては殆ど價値なきことが知られるが、それは南洋が元來農業地帯であることの反面でもある。一九三九年に於ては此の傾向は更に昂進し、重要品輸出總額の一・二%となり農産物輸出總額に占める割合は〇・二%前後に激落したと推定すべき理由がある。

**内地對南洋農産物輸出貿易 (單位 千圓)**

小麦粉	一九三九年 〇・五	一九三八年 三	一九三七年 九九八
水産物	二五〇	三八二	二、八六六
寒天	五四七	三八九	八一九
魚油	一五	一七	一七三
魚油	一	一二	四一
樟腦	五七	五八	五三
薄荷	一一	一一	三一七
木材	一、〇五三	一、八四二	二、三一四
(A) 計	一、九三四・五	二、七一四	七、五八一



(B) 重要品輸出總額  
 A-B 一六二、七四三・五 一三九、〇五七・五 二五三、〇八四・七  
 一・二% 一九九% 二・九%

註 南洋經濟研究所「研究資料」より作成。

(口) 輸入——對南洋農産物貿易に於て、重要なるは輸入であることは言を俟たないが、しかもその輸入額は案外に少く、内地主要農産物輸入總額中に占める割合は一九三七年八・七%、一九三八年七・三%に過ぎない。然るに農産品の内地對南洋重要品輸入貿易に對する比重は歴倒的に大きく、一九三七年七七・四%、一九三八年七五・五%、一九三九年八六・四%と逐年割合を増加しつゝある。特に十五年度に於ては南洋米の買付が大量に行はれつゝあつたから、輸入總額の増加と共にその中に占める農産物の比重は更に増加した筈である。尤もこれは統計表に現はれざる金屬類、石油類等の輸入を考慮してゐないから、事實と可成り喰違つてゐるが、一應の目安を得るために敢て次表を掲げて大體の趨勢を知るに便ならしめ、他は別の項目に譲ることによ。

日本内地對南洋農産輸入貿易 (單位 數量十萬斤、金額千圓)

佛 及 印	一九三九年		一九三八年		一九三七年	
	數量	金額	數量	金額	數量	金額
米	七元	六、二六六	三、八	二、八〇八	三、八	四、〇三三
豆 類	一三、七七七	三三、五七六	一三、八八五	一〇、一七六	一三、三三三	九、四四七
蘭 類	一、七	二、六	九	三、三	三、六	三、〇
採油用原料	二、六六一	三、九六三	三、二六七	二、七九〇	四、七三	四、六二
英領馬來	三	二、六	一〇	二、四	四、四	六、六
佛 印	一、八	一、〇八	二、七	二、三六	六、四	五、〇六
計	一、二	一、三三	二、九	二、九一	六、八	五、七七
砂 糖	七、二	三、八	九、四	八、三	一、三、九	一、三、五
蘭 印	一、四	一、四〇	六、四〇	五、二四一	二、八四	一、八、八六
皮 類	九、三九	九、四三	六、三	五、一八九	二、六九	一、七、七四
英領馬來	三、〇七	三、〇七三	四、八	二、七、八六	九、四、八	九、四、二
計	一、一	一、八	二	九、四	一〇	四、八
生 絲	七、七	五、七、四九〇	七、八	五、一、三、七四	一、〇、六三	九、九、三、八
英領馬來	三、三	一、八、九、九	三、六	二、一、八、四	四、三、四	四、一、五、六







一方、これらの地域は産業の發達が世界的水準から遙かに低く、殆ど全部が輸出される状態にあるために、世界的要求の對象として錯雜せる列國の力關係を現出してゐる。未だその資源調査も不充分で、概して未開發のままに置かれてゐるが、今後のその發展は刮目すべきであつて、南洋が經濟的に我が日本にとつて死活的意義を有する今日、重要資源の對日供給の確保を計ると共に進んで資源開發に資本、勞力、技術を導入しなければならないであらう。

以下南洋諸國の重工業資源の内容、その世界的地位について概観しよう。

錫 錫鑛は主として英領馬來、蘭印、タイ等より産出し、それ／＼世界錫産國の第一位、第二位、第四位にあつて、これらの國だけで世界錫生産の過半を占めてゐる。

南洋諸國錫鑛産額 (一九三八年)

佛	印	一、六〇〇	九
英	領馬來	四三、二〇〇	二七
蘭	印	二七、七〇〇	一八
世界合計		一五八、〇〇〇	一〇〇

馬來の錫鑛業はゴム産業と並んで同國經濟の支柱をなしてゐるもので、一九三七年の同國錫鑛生産は七萬九千噸に達して世界生産の三八%まで占めてゐた。第一次歐洲大戰前までは全採鑛高の七割程度を支那華僑による非近代的經營によつてゐたが、近年では歐米諸國特に英國の老大な

資本の壓力、生産の合理化、新技術の導入によつてその地位は顛倒し一九三五年には既に歐米諸國が全採鑛高の六六%を占め、華僑は三四%に低下してしまつてゐる。蘭印の錫鑛業も石油に次いで相當の開發が行はれ、世界錫生産の二〇%近くに達してゐる。それへの投資は蘭印政府千九百萬盾、和蘭本國千七百萬盾である。一九二九年の世界恐慌は米國を始めとする錫消費國の消費量の大減少を招來したため、英國錫生産業者の發意によつて馬來、蘭印、ポリビア、タイ等世界錫生産の九〇%を占める諸國によつて國際錫生産業者協會を創設し生産比率を協定したが、歐米諸國就中英國が大部分の錫生産資本を所有してゐるために、こゝに事實上世界の錫生産は完全に英國によつて支配されるに到つてゐる。

精鍊錫も一九三八年世界生産高十六萬五千餘噸のうち南洋諸國は四四%を占めてゐる。就中馬來は六萬三千八百噸、三九%の比重で斷然優位にある。同國は自國錫鑛のみならず、タイ、ビルマ、佛印、アフリカ等よりも輸入精鍊してゐる。蘭印は約七千五百噸で世界生産の約五%に當る。

錫輸出も亦大部分を米國を筆頭に歐米諸國に向けられてゐる。馬來の錫輸出は一九三八年に約九千六百萬海峽弗に達し、同國全輸出額の一七%を占めゴムに次ぐ重要輸出品である。そのうち約五五%が米國へ送られ、日、英は之に次いで夫々一五%、七%弱を占めてゐる。特に對日輸出は近年激増を見てゐる一方、對米輸出は米國の不況のため三七年の一億三千二百萬海峽弗に比し



半減以下となつた。世界の錫市場は従來錫消費の四割以上を占めてゐる米國經濟の消長に左右されて來たのであつたが、最近に於ては、米國は錫貯藏會社を設立し、南洋からの錫買付確保に異常の關心を示してゐる。蘭印の錫及錫鑛輸出も同國全輸出貿易の約七%強を占める重要輸出品で和蘭本國に三萬六千餘噸を供給し、錫鑛全輸出量の殆ど全部であつた。粗錫輸出は一萬三千六百餘噸のうち和蘭本國、英國に各三割前後、米國に二割、其他を獨佛伊に向けてゐる。タイ國の錫輸出も累年増加し、米に次ぐ重要輸出品である。一九三九年に於ては三千一萬ベートに達し、全輸出貿易の一五%強に當る。佛印も年々輸出し、タイと共にその鑛石の殆んど全部を英領馬來に送り、精鍊の上歐米に輸出されてゐる。

**石油** 石油資源としては蘭印、英領北ボルネオ等にして、その産油額は世界の三%弱に過ぎないが、東亞圈に於ける當面の必要量を賄ふには充分であり、又我が國にとつては最も注目すべき資源である。一九三八年の世界産油量二億七千二百餘萬噸のうち蘭印は七百三十九萬八千噸、英領北ボルネオは九十二萬四千噸にして連年増産の傾向にあり、本年は一千萬噸の産油を豫想されてゐる。蘭印の埋藏量は三十億一千五百萬ベールと稱されてゐるが、その生産は英米資本によつて支配されてゐる。

いま一九三八年に於ける南洋油田の産額を表示すれば次表の如くであつて、合計八百三十二萬噸のうち英領ボルネオは一一%、蘭印は八九%であつた。

1、ボルネオ島合計	二、六三三、七八三
タラカン島油田	七三五、〇九八
サンガ・サンガ油田	九八四、六八五
ミリー油田	二〇七、〇〇〇
セリア油田	七〇七、〇〇〇
2、ジャバ島合計	九三三、五九五
スラバヤ油田	七五、一七一
中部ジャバ油田	八五八、四二四
3、スマトラ島合計	四、六六二、八三六
パレンバン油田	二、七四七、〇二三
ザヤムビー油田	一、〇一〇、七一三
北部スマトラ油田	九〇五、一〇〇
4、セラム島	八一、五六〇
プーラ油田	八一、五六〇
合計	八、三一、七七四

蘭印油田採掘は英國と和蘭の共同資本であるロイヤル・ダッチ・シエル系のB・P・M會社、B・P・Mと和蘭政府資本が半々のN・I・A・M會社及び米國スタンダード系のコロニアル會社によつて占められ、その産油量は三八年に夫々五百二十萬七千噸、百十一萬四千噸、百九十九萬一千噸であつた。その投下資本は一九三〇年末現在の發表であるが、總計三億九千七百萬盾であ



つて、和蘭二億四千八百萬盾、英國一億二千三百萬盾、米國二千五百萬盾、蘭印五百萬盾、日本は僅か十八萬盾であつた。B・P・M社は資本金三億盾、うち和蘭六割、英國四割、N・I・A・M社は一千萬盾のうち政府とB・P・M社が折半出資である。これら産油量の八割は例年輸出に向けられ、日本へは僅かな數量しか入らない。一九三九年の輸出額四千八百三十餘萬バーレルのうちシンガポールは約二四%、濠洲及新西蘭一六%、比律賓、支那、埃及は夫々約三%づつとなつてゐる。この東洋市場を主要仕向地とする海外輸出は英國資本によつて牛耳られており、國內配給は和蘭資本に託されてゐる。従つてこのことから日本の對米石油依存を南洋に振り替へねばならぬとすれば、直ちに對米英との關係にまで行くであらうし、結局は米英資本によく對抗し得るに足る資本、技術を備へた石油事業進出が行はねばならないであらう。

次に蘭印石油の製品別を一九三七年蘭印政府發表の數字によつて見るならば、原油七百二十六萬二千噸から製精した製品六百十三萬二千餘噸のうち輕油及ディーゼル油類四四%、ガソリン三六%、燈油類一八%、機械油〇・六%、其他であつて、たゞに量的に豊富であるばかりでなく質的にもガソリン分を多量に有し注目すべきであらう。

**石炭** 石炭は佛印、蘭印、馬來、比律賓等に互つて産出するが、一九三八年に於て、夫々二百三十五萬噸、百四十六萬噸、四十九萬噸、四萬噸の出炭で世界出炭量十二億二千五百萬噸の約〇・三%にしか當らぬ僅かなものである。而して佛印のアロン灣附近から産出するホンゲイ炭は無煙

炭として世界有数の良質のものであり、佛印全産額の約七割を占め、その埋藏量はホンゲイ炭會社鑛區のみでも百二十億噸、この地方の炭田全部としては二百億噸と稱せられてゐる。佛印の他の地方は交通、運輸の不便のため調査不充分且つ未開發の状態に置かれてゐる。佛印を除いてはさして注目すべき石炭資源はない。蘭印はスマトラ、ボルネオ二島のみで、埋藏量七億七千五百萬噸と言はれてゐる。經營は官營炭坑と民間炭坑に分れ、前者は一九三七年に八十九萬噸、後者は四十七萬噸の出炭であるが、炭坑が海岸から遠隔にあること、品質の粗悪のために石炭業の發展は阻害されてゐる。石炭投資は四千二百萬盾で、そのうち蘭印政府は三千五百萬盾、和蘭本國千百萬盾であつて政府の自給化の方針の下に統制せられ、出炭高の約二割を輸出に向けてゐる。馬來ではバト・アランに於て採炭されるのみで、現在約一千萬噸が採炭可能と言はれ將來性は誠に少く、出炭は全部國內消費に充てられてゐる。比律賓も數萬噸の年産といふ甚だしい貧弱な状態で、需要の大部分は逆に年々三十萬噸からの輸入になつてゐるが、埋藏量は約六千萬噸であると推定されてゐる。

従つて南洋からの石炭輸出と言つても重要なのは佛印の無煙炭のみである。一九三七年に同國出炭量の約六割七分、即ち百五十四萬噸を輸出し、その主要仕向國は佛國への二十五萬噸を除いては東洋向のみで日本への八十一萬噸を筆頭に支那二十六萬噸、香港十一萬噸等である。蘭印の同年石炭輸出は二十九萬噸、うちシンガポール十八萬噸、香港五萬噸、其他であるが、一方瓦斯



並にコークス用炭を年約六萬噸づゝ濠洲其他より輸入してゐる。

**鐵鑛石** 馬來、比律賓、佛印等より産出するが、世界鐵鑛生産の約三%程度に過ぎない。埋藏量も諸説があつて正確を期し難いが、馬來十億噸、比律賓五億噸と推定されてゐる。馬來の一九三七年に於ける鐵鑛産出額は馬來聯邦州鑛山局統計によれば約二百四十三萬噸となつており、比律賓は一九三八年鐵鑛輸出高から推定して九十萬噸以上と考へられるが、國際聯盟の統計では馬來百三萬噸、比律賓三十七萬噸、佛印七萬噸で、これは著るしく過少であらう。

これらの諸國は各地に相當豊富な埋藏量を有すると言はれてゐるが、未だ工業化の程度が低く、且つ製鐵用石炭に乏しいこと、生産費、運賃等の諸事情から比較的に小規模に開發されてゐるに過ぎない。而も馬來、比律賓等に於ける鐵鑛輸出は、海運の便のよい日本に採掘量の殆ど全部が向けられてゐる。注目すべきは馬來の鐵鑛生産は全く邦人企業の獨占によるもので、トレンガヌ州のズングン、ケママン、ジョホール州のスリメダン、ケランタン州のテンマンガン等より採掘を見ており、品位も六五%と言はれる良質で重要性を有してゐる。比律賓、ニューカレドニア、佛印からも輸入があり、若干の資本進出も行はれつゝある。更に佛印の採掘擴張、蘭印への未開發資源の開發はわが國の鐵鋼業にとつて極めて重要視されるべきであらう。

**金 銀** 一九三七年に於ける世界金生産百八萬噸のうち比律賓は二萬七百五十三噸にして約二%弱を占めてゐる。次いで蘭印千七百三十噸、馬來千六十八噸、英領ボルネオ五百九十八噸、佛

印百十二噸で、これらを含めて南洋は世界金生産の約二・二%を占めてゐる。特に埋藏豊富な比律賓の金鑛業の將來は刮目に値するものであつて、産金額も累年躍増し、一九三八年には二萬八千三百八十六噸に達し、對前年比三七%の増加を示してゐる。この大部分は精鍊のため米國造幣局に船積されてゐる。蘭印の産金状況は最近減産の傾向にあり、馬來ではバハン州のラウブ鑛山が同國の約七、八割の産金を占めており、その大部分は輸出されてゐる。

一九三七年世界銀生産八百三十萬噸のうち比律賓より二萬五百噸、蘭印より一萬五千六百噸を産出し、その占める割合は約〇・四%強に過ぎない。三八年には比島銀産額は約三萬七千二百噸に増加を見てゐる。

**其 他** タングステン鑛は中南支に於て、世界産額の約七割を占めてゐるが、南洋に於ては一九三七年の數字について見れば、馬來七百九十一噸、佛印三百八十九噸、タイ二百三十三噸であつて、世界産額二萬一千六百二十一噸の約七%を占めており、東亞のみで殆んど全世界の需要を充すに足りる状態にある。

マンガン鑛は一九三七年の數字(マンガン含有量)によれば馬來七千七百噸、蘭印六千噸、佛印二千五百噸で世界生産二百九十萬噸の約〇・五%といふ極めて低い地位にある。馬來では馬來非聯邦から邦人企業によつて産出され、その大部分は日本に輸出されてゐる。蘭印は爪哇が最大の主産地で、佛印は安南のヴェイン地方から主として採掘される。この他比律賓から良質の鑛量が



採掘されその大部分が對日供給に向けられてゐる。

佛印からの亞鉛鑛は同國鑛産資源の第三位を占めてゐるが、一九三〇年以來市價の急落によつて生産は著るしく減少し、一九三八年には約五千二百噸の産出に過ぎず、大部分佛本國に輸出されてゐる。

ボーキサイトは蘭印のリオウ島、ビンタン島を主産地として蘭印ボーキサイト開發會社により採掘されてゐる。一九三五年には一萬六千七百噸の採掘であつたのが三八年には二十五萬噸を超へ原鑛のまま、和蘭、獨逸、日本へ輸出された。現在では歐洲戦争のため對日輸出が第一位にある。一九三七年に於ける原鑛輸出二十萬二千七百噸のうち日本へは四萬五千噸が向けられてゐる。埋藏量は未だ詳細にされないが、相當有望であり、我が國アルミニウム工業の基礎として重要性が大きい。其他馬來ジョホール及びトレンガヌにも埋藏地が発見され、邦人企業によつて採掘され、一九三七年よりわが國へ輸出されてゐる。その他比律賓のクロム鑛、銅鑛、佛印のアンチモニー鑛、ニューカレドニア、蘭印のニッケル等南洋の鑛産資源は多種多様にわたつて存在しそれらは殆ど歐米資本によつて採掘されて、海外に輸出してゐる。

以上の様に、錫は世界生産に於て斷然優位を占め、タングステン鑛は之に次いでゐる。石油、鐵鑛、石炭、金、銀、マンガン鑛、ボーキサイト、銅、鉛、亞鉛等の生産は世界的水準に遙かに及ばない状態にある。とは言へ最近に於ける産出額から言つて特に馬來、蘭印の錫、蘭印の石油、

佛印、蘭印の石炭、比律賓、馬來の鐵鑛等は世界に於ける有數の産地として重要な基礎資源をなすものである。以つてこれらの資源はわが國にとつて如何に重要性を有するか、更にこれが供給確保が如何に緊要であるか、窺はれよう。

次にこれら資源とわが國との關係について貿易、企業進出の面より見よう。

#### わが國との關係から見た鑛産資源

周知の通り、わが國の重工業資源は、その生産に於て殆ど自足し得ざる現状にある。石炭、鐵鑛、金等は朝鮮或ひは滿洲、北支の資源開發によつて若干の増産を見てゐるが、未だ急速な需要を充たすには足りない。自給率の比較的高い石炭の如きも佛印から年々供給を仰ぎ、鐵鑛も馬來比律賓等より輸入しており、世界的産額を有する銅に於てさへ需要量の七割程度を海外に依存する事情にある。其他でも例へば硫黃、マグネシウム、タングステン等二、三を除いてはニッケル、マンガン、水銀、鉛等は大部分、亞鉛、アルミニウム等は其の過半を輸入に俟たねばならない。

昭和十二年以降大藏省貿易局發表の貿易統計に於ける「鑛及び金屬」輸入額の内容は發表されないうが、その總額によればこれらの重工業資材は連年著るしい輸入増加の一途を辿つており、南洋からの輸入の占める割合も連年ほぼ二二%から上つて、我が國との貿易上に於ける緊密性を示してゐる。



鑛及び金屬輸入額 (單位 百萬圓)

	昭和十一年		十二年		十三年		十四年	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	%
滿洲・支那	四九八	一三・四	六三〇	七・〇	八四・四	二・七	七・五	九・一
南洋	八二七	三・二	一四三・二	一五・九	一四七・三	三・三	一七九・五	三・三
南北アメリカ	一六八	四・五	五七四	六・七	三三・五	五〇・二	四九五・〇	五八・三
其他共合計	三三九	一〇・〇	九〇・一	一〇・〇	六六・九	一〇・〇	八四八・五	一〇・〇

即ち南洋諸國からの輸入は昭和十四年度に於ては十一年に比して八千三百萬圓、一〇五%の激増となつてゐる。その内容は十一年の貿易統計品目から推して鐵鑛、マンガン鑛、ボーキサイト、錫、鉛、銑鐵、屑鐵等の増加と考へられる。

わが國の鐵鑛石輸入は昭和十一年の統計によれば鐵鑛需要の二七%は支那から、五〇%は馬來及び比律賓からの輸入であつて、そのうち馬來は壓倒的部分を占めてゐるが、今日に於ても、その比率には左程の變化はないものと考へられる。南洋諸國の一九三八年に於ける鐵鑛輸出額は馬來來百五十六萬噸、比律賓九十一萬噸、濠洲十七萬噸であつたが、事變前より馬來、比律賓ともその輸出額の殆ど全部を對日供給に向けており、濠洲ではその五、六割程度であつた。現在馬來に十億噸、比律賓に五億噸、濠洲に三億五千萬噸の埋藏量を有すると言はれるが、銑鋼一貫作業確立の過程にあるわが國鐵鋼業にとつて南洋鐵鑛石の重要性は益々大きくなつた。

現在馬來に於ける鐵鑛業は全く邦人企業の獨占する所であつて、石原産業のスリメダン鑛山はジョホール州の西海岸に位して埋藏量一千萬噸と稱せられる品位六〇%の赤鐵鑛である。トレンガヌ州のケママン鑛山も品位六〇%の赤鐵鑛を有するが主としてマンガン鑛で、マンガン約一六%、鐵三五%である。その附近のカンピン鑛山やマワイ鑛山も石原産業の經營である。日本鑛業經營のヅングン鑛山はトレンガヌ州のヅングン河口にあり赤鐵鑛に三〇%の磁鐵鑛を含有する品位六〇%以上の良質で、昭和四年にトレンガヌ州から五十年間の地券を下附されて本格的な採鑛に従ひ、十一年には百四萬噸を我が國に積出してゐる。ケランタン州にあるタマンガン鑛山は南洋鐵鑛によつて開發され五三%位の褐鐵鑛であるが埋藏量は一千萬噸乃至一千五百萬噸と見られ十二年の出鑛は二、三十萬噸であつた。飯塚鐵鑛のジョホール州の鑛山は褐鐵鑛を主とする平均五五%位の鐵含有量で、埋藏量は七百萬噸乃至九百萬噸と推定され、三八年には十數萬噸を積出した。更に比律賓の開發にもルソン島の石原産業の鑛山、日本鑛業の進出があり、佛印へは東京に印度支那産業會社の鐵鑛及滿俺鑛山が小規模ではあるが開發を行つてゐる。ニューカレドニアに於ける一九三八年創立の日佛合辦のヌベル・カレドニア鑛業も邦人の支配下にあり、その埋藏量は二千萬噸、品位五二%の良質で、設備完成の上は年産五十萬噸以上と言はれ、既に十四年中に對日輸出が行はれてゐる。邦人の鐵鑛採掘状態は以上の如くであるが、今後はこれらの擴充と共に更に蘭印等の未開發鐵鑛資源にも開發の歩を進めねばならない。



マンガン鑛輸出は一九三八年に於て、英印四十六萬噸、馬來三萬四千噸、比律賓四萬九千噸であつた。馬來、比律賓とも鐵鑛と同じく、その輸出の殆ど大部分を對日輸出に向けてゐる。英印は年産百萬噸を超え世界第二のマンガン鑛生産國であるが對日供給は全輸出高の二割前後に過ぎない。馬來には石原産業のケマン鑛山と共に日本鑛山のタンドウ滿庵鑛山があり、ケランタン州にあつて品位五三%前後で昭和八年より採掘に着手してゐる。最近の出鑛量はケマン鑛山一萬五千噸、タンドウ鑛山一萬二千噸で將來を期待されてゐる。比島では日比鑛業のパラワン島のマンガン鑛山がある。

クローム鑛の比律賓の輸出高は約六萬七千噸に達するが、日本へはその三、四割程度の供給が行はれてゐる。

英領馬來のボーキサイト輸出も約六萬七千噸であつたが、わが國へはその過半を送つてゐる。ジョホール州にもボーキサイト鑛が発見されて日沙商會が開發に當つてゐる。更にニューカレドニアからはニツケル鑛の供給がある。埋藏量は二千萬噸と言はれ、一九三八年の粗鑛輸出は三萬二千噸であるが、カナダ、ノールウエー等からの輸入杜絶の現在特殊鋼材料としての重要性は極めて大きい。近年大洋鑛業がニツケル鑛山の開發に當つて粗鑛のみ、日本に積出してゐる。蘭印の爪哇、ボルネオにボーキサイト鑛、セレベス島にニツケル鑛の埋藏が発見されたと言はれるがこれらの種々の新資源の開發をわが國として積極化しその供給を確保せねばならない。

現在わが國鐵鋼業にとつて最大の問題となつてゐる屑鐵類も蘭印、英印、濠洲、馬來、比律賓からわが國屑鐵全輸入量の一割位を入手してゐる。その各國輸出は夫々六萬一千噸、六萬噸、四萬七千噸、四千五百噸、四千噸の少額であるが、何れもその大部分を對日輸出に向けてゐる。英印の鉄鑛輸出は五十二萬噸であるが、そのうち五、六割位をわが國に向けてゐる。最近では對日輸出を一ヶ月一萬噸に制限したと傳へられるが鉄鑛増産設備の整備しつゝある今日ではさして問題ではない。

非鐵金屬としては比律賓の銅鑛及び屑銅輸出が二萬四千噸であるが、全部が對日輸出である。蘭印にも各地に銅鑛があり、昭和七年石原産業が資本金五十萬盾をもつて設立した石原鑛業がソロ銅山で採掘を行つてゐるが數量は未だ僅少である。

錫は馬來が六萬二千噸、蘭印が約七千噸輸出してゐるが何れもその對日供給は輸出量の一割見當に過ぎない。從來わが國の錫の自給率は約三割程度であつて、輸入量の約七割は馬來及び蘭印からの供給であつた。わが國としては石原産業の天滿錫鑛山とカンビン鑛山があり、採掘面積は前者五百九十二英反、後者千五百四十九英反であるが錫生産制限法の實施中は採掘を中止してゐる。タイ國には三菱鑛業がベンナの錫山を昭和十五年から採掘を開始したのであるが、錫七三%を含有する良質のものと言はれてゐる。其他邦人企業としては比律賓にトレードマインニングコンパニーのセブ島の金、銀鑛の採掘がある。以上わが國が直接採掘してゐる重要資源の外にも鉛



亜鉛、ウオルフラム、水銀等の産出を見ており、日本の経済に絶対に必要とするものを多く含んでゐる。

これ等金屬資源にも増して南洋からの輸入に重要性を有するものは石油である。即ち貿易統計表の「其他の油脂臘及同製品」の輸入額は十一年の一億八千四百三十萬圓（うち礦油一億八千一百八十萬圓）より十三年には三億一千九百七十萬圓、十四年には二億五千七百九十萬圓と激増を見られた點からも石油の海外依存性の如何に大であるかは自ら明らかである。わが國の石油自給率は従來一割餘であつて、全輸入量のうち米國が六五%、蘭印及び英領ボルネオが三〇%餘を占め、そのうち八割は蘭印であつた。蘭印の對日供給は全輸出額の一割乃至六分強程度に過ぎず、今後の對日輸出餘力は充分に考へられる。同國原油産出量は、一九三九年に於て七百九十五萬噸に達するもので、石油資源に乏しいわが國にとつてその重要性は極めて大きいものである。日本は一九二九年にボルネオ東海岸サンクリラン灣附近に鑛區を得て、三井物産、日本石油とオースト・ボルネオ會社が合辦しボルネオ石油會社を設立、試掘を始めたが、昭和十五年漸く少量の噴油を見たと言ふ。資本金二百萬盾のうち日本側は百九十八萬盾を所有し經營は全く邦人側が當つてゐるが、大量の産油を得るには莫大な資材を必要とするであらう。更に今後の未開發石油資源の大規模な開發を行ふには英米石油資本との摩擦も不可避であらうが、これによく對應し得る資本、技術と政治力とが問題である。

昨年度に於けるわが國の石炭輸入は約三百八十萬噸であつたが、そのうち約一割五分を佛印からの供給に俟つてゐる。同國の年産は約三百萬噸であるが、輸出炭量は出炭量の六、七割であつて對日輸出は全輸出の約四割であつた。

日本の石炭輸入（大藏省貿易統計による）

	昭和十三年		昭和十四年	
	數量(噸)	金額(千圓)	數量(噸)	金額(千圓)
佛印	六〇七、六三三	一一、一〇八	六〇三、六九八	一一、三〇七
滿洲	一、四三九、八〇五	二七、九五一	七五二、〇四三	一六、三九三
支那	一、六二〇、九三七	二六、八七七	二、四三三、九三七	四八、五三三
關東州	一〇、八一六	二三〇	七〇〇	一六〇
其他共合計	三、六八二、五三一	六七、二一七	三、七九四、七一〇	七八、三六三

磷酸肥料原料たる磷礦石の自給率は微々たる率に過ぎないが、全輸入量の三割内外を馬來その他南洋から仰いでゐる。石墨も亦七割をセイロンからの供給によつてゐる。

一九三八年輸入高

	數量(千噸)	金額(千圓)
磷礦石		
馬來	九四・五	四、一四八
ソサイエチー諸島	二五・六	八五九



ギルバートエリス諸島	四六・〇	一、九八一
其他 共 合 計	六五四・二	一九、二八一
石 墨		
セ イ ロ ン	五一・六	一、一三八
其 他 南 洋	六・〇	一一五
其 他 共 合 計	八八・〇	一、五七〇

その他佛印には三井物産及び三菱によつて硝子原料たる硅砂を採掘し佛印硅砂輸出の八割近くを日本に輸出してゐる。硅砂の對日輸出は石炭に次ぐ第二位を占めてゐる。蘭印のセレベスの雲母採掘にも石原産業が當つてゐる。

以上の様にわが國の南洋鐵産資源に對する關係は貿易を通して結ばれてゐるのみならず、更に進んで各地域に互つて企業開發が試みられてゐる。その主要な産業を要約すれば馬來を中心として同國の鐵、マンガ、錫、蘭印の銅、雲母、石油、比律賓の鐵、ニューカレドニアの鐵、ニツケル、佛印の石炭、マンガ、タイの錫企業等であるが、未だ同地域鐵業全投資額の一%にも及ばない低位にある。既に歐米諸國は金融投資或ひは企業投資を以つて廣汎なる支配網を張繞らしており、この上に緊密な貿易關係を營みつゝあるが、これら地域の歐米植民地的性格の深さは益々我國南方政策の立遅れを感じしめるものがある。先づ何よりも南洋に占める我が國の經濟の國際的地位の貧弱さを冷靜に検討し、そこから最も合理的にして可能なる途を積極的に求めねばならぬ。

らない。

而もたとへこれらの多種且つ豊富なる資源が容易に得られるとしてもこれによつて直ちに東亞が資源的に自給し得るものではない。即ち南洋資源の全輸出がそのまゝ、日滿支に切り換へられるとしても、現在のところアルミニウム、錫、石炭、ガソリン、燈油、重油等は需要を充たし得るが、銅、鐵礦、マンガ、鉛、亞鉛、原油等々は到底需要を充たし得べくもなく、今後の開發に俟つか或ひは資源的に自給不可能のものもあらう。結局はわが國の必要とする資源を可能な限り高度に自給化しつゝ、資源の開發を積極化して餘剩資源は他の經濟圈へ供給し、その代償として不足資源の供給を受けることが最も可能な途であらう。而も開發を如何に合理的に構成するかを綜合性ある計畫的經濟自給の見地から検討しなければならぬであらう。かくして南洋を加へることによつて今までの甚だ狹隘な、跛行的な自給化の目標が初めて資源的にも東亞的規模にまで發展するものと言へよう。(一五・一〇)

## 二 大東亞圈に於ける鐵礦資源

### 屑鐵禁輸と鐵礦確保の緊急性

周知のやうにわが國の鐵鋼業は基礎的資源としての鐵礦石に不足し乍らも急激な發展を迫まれて來たのであつた。従つて製鉄原料としての鐵礦石はその大部分を海外に仰ぐ一方、輸入鐵石



による鉄鋼一貫作業によるよりも、低廉な屑鐵を原料とする所謂屑鐵製鋼法が経済的にも技術的にも容易であつたがために、飛躍的な鐵鋼需要に追はれて、屑鐵製鋼設備のみが一方的に擴充されたのであつた。そのために製鋼原料としての屑鐵、更に鉄鐵までも亦海外からの輸入に依存するといふ状態を餘儀なくせしめられたのであつた。このやうに原料の基礎の確立が爲されぬまゝに、製鋼設備のみが跛行的に擴大されたといふ根本的な缺陷は、鑛石或ひは屑鐵の輸入難に逢着する毎に直ちにわが鐵鋼業に大きな打撃を與へて、鐵鋼生産の減退を不可避の問題たらしめるのであつた。

從來からわが國の鐵鋼業は原料としての屑鐵消費量を極めて高率ならしめて來たのであつた。昭和十一年の製鋼額五百二十二萬噸に對して屑鐵使用額は三百二十一萬噸、その割合は六割二分であつた。而も製鋼噸當り屑鐵配合は鉄鐵四割二分に對して五割八分に上つてゐた。最近に於ては、配合率は更に高まつて屑鐵六割以上、場合によつては八割乃至九割にも達してゐる。フランスの二割八分、ドイツの三割五分、アメリカの五割に對比してもわが國の屑鐵使用率は非常に高いことが窺はれる。屑鐵自給率を見ても從來國內の回收屑三割、循環屑三割五分、輸入屑三割五分程度であつて、輸入屑のうち米國からは約八割を占め、近年に於ては更に増加を來してゐた。其の他は蘭印、英印、濠洲、比律賓、馬來等である。これらの諸國の屑鐵輸出は一九三八年に夫々六萬噸、六萬一千噸、四萬七千噸、四千噸、四千五百噸、合計十七萬八千噸で、何れもその殆

ど大部分は對日供給であつた。勿論、今後、輸出は繼續されようが、何分わが國輸入屑の僅かにしか達せず且つ未だ工業化されてゐないこれらの諸國からの供給増加は差し當つて望み難い。

こゝに米國の屑鐵禁輸のわが國鐵鋼業に及ぼした影響は誠に大きい。既に昭和十五年一月二十五日の日米通商航海條約廢棄から、七月二十五日には米國の輸出許可品目が追加指定されて、屑鐵は銃砲製造に必要な第一級品にまで適用範圍が擴大されたのであつたが、事態は更に三轉して十月十六日から屑鐵、屑鋼全般七十五品目に及ぶ對日禁輸の斷行となつたのであつた。禁輸期日迄の終りには所要の手段も講じたし、又買溜めによる國內ストックも相當用意されてはゐるが、それで充分と言へないことは固よりである。

之が緊急對策として國內屑鐵の回收強化、不急不用製造品の強制回收の斷行も準備されてゐる。更に屑鐵消費規正を強化して同年第三四半期には屑鐵配合率を前期の四七%から四二%へ引下げ、第四半期には一層引下げが見られることとなつた。この屑鐵配合率の引下による出鋼能率の必然的低下は技術的改善によつて當初憂慮されてゐた程ではないとされてゐるが、それにしても鐵鋼生産三割の減退は争はれない事實であらうと見られてゐた。

かゝる事は既に事變勃發以來の國際環境の變化から當然豫期されて來たものであり、これに對して極力鐵鑛資源の開發確保、鉄鋼一貫作業體制の確立へ轉換しつゝあつたのであるが、今日これを急速に押し進めることこそ最も緊急且つ唯一の活路となつたのである。既に十五年度に於て



も高爐新設は進捗し完成豫定のもので廣畑、輪西、日本鋼管、中山製鋼、尼崎製鋼、小倉製鋼、大谷製鋼等の八基に及び、銑鐵生産能力は昨年比して約三、四割の増加となり、十六年には現在建設中のものも殆んど完成の豫定とされてゐる。今後とも鐵鋼自給の下に及急的に高爐の建設が必死に追求されなければならないが、それには先づ鐵鑛石の自給確保が不可欠の前提條件である。極く大難把な言ひ方ではあるが、約二百萬噸の輸入屑鐵を補ふにも鐵鑛石四百萬噸が必要であり、更に鐵鋼自給一千百萬噸が實現されるためには鐵鑛石は二千萬噸を必要とする。以下か、る見地からわが鐵鋼業の大東亞圈内に於ける資源状態とその自給可能性如何を許された範圍内で再検討しよう。

#### 内地朝鮮の鐵鑛資源

わが國內地の鐵鑛石生産は昭和十一年の需要額四百六十四萬噸に對して僅かに六十二萬噸に過ぎず、その自給率は誠に乏しい。朝鮮からの移入は二十四萬噸であり、残りの三百七十八萬噸は支那からの百二十五萬、馬來及び比律賓からの百六十九萬噸、濠洲其他からの八十四萬噸弱となつて、鐵鑛石供給の八割は輸入によつて賄はれて來た。國內生産と輸入との比率をとると内地一三%、朝鮮一三%、支那二七%、馬來及び比律賓四三%、濠洲其他四%であつて、支那からは全需要の四分の一以上、南洋からは約半分となり、悉く大東亞圈内からの供給である。

これら東亞圈内からの輸入は輸送距離、鑛石品位、その他の點から言つても我國鐵鋼業の擴張

と密接に結び付いてゐるものであり、而も、殆ど邦人企業による開發や船舶、港灣等輸送設備の發展によるもので、今後益々増加の一途を辿るであらうが、これは屑鐵の米國依存と同一に考ふべきではない。狹義の鐵鋼自給の原則に押し込めて鑛石輸入依存を指摘するよりも、寧ろ當面の問題は一に鐵鑛石輸送、延いては制海權確保如何にかゝつてゐることに歸着する。鑛石輸入杜絶はわが鐵鋼業の窒息を意味するし、寧ろ東亞的規模に於ける鐵鑛石資源の自給確立を遂げることこそわが鐵鋼業の東亞的宿縁とでも言ふべきであらうことを知らねばならない。

翻つて先づ内地、朝鮮の資源とその増産の可能性を見よう。内地の埋藏量は正確なことは不明であるが、日本地質學協會の調査によれば稼行に適するものは品位を五〇%乃至六〇%として四千二百萬噸であり、稼行に適せざるものが一千萬噸であつた。この鐵鑛石産地に北海道の倶知安、沖洞爺、虻田、幌前、月浦、岩手縣の釜石、新潟縣の赤谷、長野縣の諏訪等が數へられるが、主要なものは釜石と倶知安のみである。釜石は内地最大で品位六〇%乃至六五%のものが一千四、五百萬噸、二〇%乃至三〇%の貧鑛が三千萬噸、倶知安は品位五〇%の褐鐵鑛で、埋藏量五百萬噸程度と言はれてゐる。昭和十一年の内地産出額六十二萬噸のうち前者三十七萬噸、後者二十萬噸弱で、この二つが大部分を占めてゐる。仲洞爺、虻田、幌前、赤谷等は何れも年産一萬噸内外で今後の期待はかけられない。最近交通機關の發達や技術の進歩による貧鑛、粉鑛等の利用の結果、採掘可能として埋藏量約五千八百萬噸と計算されてゐるが、この限りに於ても増産は



期待出来ないであらう。かゝる資源から將來の出産量の増加は釜石の數十萬噸だけと見られよう。更に砂鐵は中國地方、東北の下北、久慈方面に多く、その他各地に廣汎に分布され、その埋藏量は一億噸に達すると稱せられてゐるが、數字自體正確を期し難いし、經濟的に利用し得る量は遙に少いものであらう。昭和十一年にはその産額が四千二百餘噸に過ぎなかつた。現在は電氣爐、ロータリーキルン等による屑鐵代用品たるルツベの生産に積極的に採掘され、日本ニツケル、日本特殊鋼管、川崎製鐵、日本砂鐵、日本高周波等一部特殊工場で利用されてゐるが、到底大規模の製鐵原料としては期待出來ず、當面の屑鐵對策としては言はゞ應急的補足的な役割を果すであらうが、寧ろ特殊原料としての活用に考慮さるべきものであらう。

内地に比すれば朝鮮は有望である。咸鏡北道の茂山鐵山は磁鐵礦五億噸の埋藏量を有すると言はれてゐるが、十四年三菱鑛業と日鐵とに依つて資本金五千萬圓の茂山鐵鑛開發會社が設立されて本格的な開發が行はれた。品位は四〇%内外の貧鑛であるがクルツプ式貧鑛處理によつて六〇%乃至六二%の精鑛となし得る段階に到達し近く數百萬噸の鐵鑛石供給が期待されてゐる。この精鑛は清津の日鐵と三菱のルツベ工場に送られるが、その一部は内地へも移出されるであらう。

茂山以外には价川(日鐵鑛業)、段栗、載寧(日鐵)、下聖、銀龍、兼二浦(三菱鑛業)、利原(利原鐵山)、黃州(麻生鑛業)の八鐵山があり、利原の赤鐵鑛を除けば他は褐鐵鑛で且つ何れも鑛量

が少い。利原は埋藏量二千萬噸にして釜石に次ぐ大鐵山で昭和十一年には三十萬噸以上の産出に上つた。これらの諸鐵山の十一年の出産量は六十三萬噸で、うち二十四萬噸は内地へ、三十九萬噸は兼二浦へ送鑛されたが、今後ともこれ以上に多くの出産は望めない。以上の他内地を通じて各地に散在する鑛石の開發を極力行ひつゝあるが、將來を期待し得る鐵山は茂山の數百萬噸、釜山の數十萬噸等僅かであつて老大な需要を充すには内外地資源は餘りにも小さく、如何にしても滿支、南洋に求めざるを得ない。

### 滿洲の鐵鑛資源

滿洲の鐵鑛資源は最近に於ても弓張嶺の富鑛、東邊道の大鑛脈發見等が相次いだため、埋藏量は約二十億噸に達すると言はれてゐる。而も鞍山、弓張嶺、廟兒溝、東邊道等に數億噸の鑛量が集中されてゐることはその開發上極めて注目すべきである。かく資源は豊富だが貧鑛が壓倒的に多く大部分は品位三〇%乃至三五%程度のもので、品位五〇%以上の富鑛は一億三千三百萬噸に過ぎない。しかしこれらを純鐵分含有量から見れば總計約七億一千餘萬噸となり今後の開發は刮目すべきものがある。

### 滿洲の主要鐵鑛山埋藏量

鞍山赤、磁鐵鑛	平均品位(%)	埋藏量(千噸)	所有會社
	五三・〇〇	一、〇〇〇	昭和製鋼所
	三一・五二	六八〇、四四〇	



弓張嶺	赤、磁鐵礦	平均	六五・〇〇	三七九、〇〇〇	同
廟兒溝	磁鐵礦		三四・二一	二、四〇〇	本溪湖煤鐵公司
歪頭山	同		六三・九〇	二二九、五六〇	
牛心臺	赤、褐鐵礦		三六・六〇	一五〇、〇〇〇	同
大栗子	赤鐵礦		三一・四〇	推定五〇〇、〇〇〇	大華冶金公司
七道溝	同		四六・五〇	約一〇〇、〇〇〇	東邊道開發會社
合計			五一・八〇		
			五一・九〇		
				二、〇七二、六六〇 (うち五〇%以上)	
				一三三、四〇〇	

註 品位二五%以上の表面に露出せるもののみ。

鞍山鐵山は十數鑛區からなつており、その埋藏量は六億八千百萬噸と言はれてゐるが、品位五〇%以上の富鑛は百萬噸に過ぎず、三〇%乃至三六%のもの三億四千三百萬噸、二五%乃至三〇%のもの三億三千七百萬噸である。赤鐵鑛は三億一千九百萬噸、褐鐵鑛は三億六千二百萬噸である。斯様に豊富に集中的な埋藏量を擁して、而も貧鑛處理が實現せられてゐる今日では貧鑛と雖も高く評價さるべきであり、既に東鞍山、西鞍山、大孤山、櫻桃園、王家堡子等の大鑛床が一齊に採掘を見つゝあり、昭和製鋼所に送られてゐる。

弓張嶺鐵山も昭和製鋼所に屬し、埋藏量四億九百萬噸の磁鐵鑛である。品位は六五%の富鑛が三千萬噸、平均三四・二二%の貧鑛が三億七千九百萬噸に達する。第一、第二鑛區は既に移行を

見つゝあり、昭和製鋼に送鑛されてゐる。同所の設備擴張は略々豫定通りの進捗を見てゐるが、製鐵用強粘結性炭の不足から實際の銑鐵生産高は之に伴はなかつた。製鐵能力の大規模擴充には立地條件から見てもコークス用炭確保が最大の問題であらう。

本溪湖で現在稼行中のものは廟兒溝と歪頭山である。前者は品位六三・九%の富鑛二百四十萬噸、三六・六%の貧鑛二億二千九百萬噸の埋藏量にして、後者は品位三一・四%の磁鐵鑛で一億五千萬噸の埋藏量を有す。更に牛心臺には品位四六・五%の赤、褐鐵鑛が約五億噸埋藏されてゐると推定されてゐる。本溪湖では從來富鑛を用ひて軍艦、大砲、飛行機器材等の軍需品製造に必要な獨特の低磷銑のみを製造して來たのであるが、手近かには確實埋藏量三億七千萬噸と言はれる粘結性石炭もあり、今後は積極的に貧鑛開發を押し進めて一般鐵鋼製造に向はねばなるまい。次に東邊道の鐵鑛資源を見よう。こゝ、數年來の調査によれば南東部には七道溝から大栗子溝附近に至る東西約五十軒、南北約十五軒の間は確實な鑛床地帯と言はれ、更に東北部にも調査が進捗すれば地質的に見て大鑛床があると期待されてゐる。

大栗子溝は平均品位六三%と言はれる世界的富鑛であつてその最大産地は都留山附近にある。埋藏量は赤鐵鑛七千二百萬噸と推定され、磁鐵鑛は埋藏百五十六萬噸、その品位は五〇%内外にして約五%の滿俺を含有してゐる。昭和十三年後半から本格的開發が行はれており、十六年末の豫定出鑛量は百二十萬噸を目標としてゐる。



七道溝鐵山は赤鐵鑛床の東山區域と磁鐵鑛床の西山區域に分たれるが平均品位は五二%の富鑛で約五%の滿俺を含有して滿洲に於ける滿俺鑛石の不足を補ひ得よう。特に高品位鑛石の滿俺含有量は八・一%に達しており、これに少量の滿俺鑛を混すれば高滿俺鋼の原料となり得べく特異なものとして注目に値する。埋藏量は九百七十四萬噸と推定されてゐるが、探鑛の結果更に増加するものと豫想されてゐる。現在は基礎設備の擴充に當つており、差し當り年産三十萬噸を目標としてゐる。

更に附近には五道江、煙筒溝、鐵廠子等のみでも一億噸を算する粘結性炭の埋藏を有してゐるために二道江には製鐵所を建設する豫定で目下基礎工事に着手しつゝある。昭和十四年の出鑛量は僅かではあつたが、兼二浦、昭和製鋼所及び内地へ供給された。

以上のやうに滿洲は現在判明されただけでも二十億噸を超える埋藏量を擁してあり乍ら、これらの資源から昭和十一年には百九十三萬噸の出鑛を見たに過ぎず、その對日供給は僅か六十六噸の餘力しかなかつた。しかし乍らその本格的な開發も漸く緒についたし、還元焙燒法やクルツプの直接製鋼法等による貧鑛處理も經濟的にも技術的にも實現され得る今日では滿洲國內の需要を充たしつゝ、相當程度の鑛石を内地へ供給することも必ずしも不可能とは言へない。だが一方昭和十六年末の滿洲國の銑鐵生産擴充目標五百萬噸が實現されるためには鑛石は恐らく千二、三萬噸を要する計算になり、かく激増する鑛石需要に應じて、内地へも輸出することは現實の問題と

して全く困難と見なければならぬ。輸送上から見ても滿洲鐵鑛產地から八幡に送られるよりも南洋から輸送される方が經濟的には有利であり、而も本溪湖、東邊道には粘結性石炭が豊富に存在してゐる。結局は滿洲を内地鐵鋼業の原料供給地とするよりも東亞經濟圏の一環として滿洲の鐵鑛資源は滿洲で製鐵することが最も現實的、合理的な生産計畫の基本であらう。

#### 北支の鐵鑛資源

かく現在のところ滿洲の鐵鑛資源は現地製鐵の發展につれ對日供給の餘力なく到底わが國の鐵鑛資源の不足を解決し得ないとすれば、當然これを支那、南洋からの供給に依らなければならぬ。

支那の鐵鑛石埋藏量は日本側諸機關によつて現地調査が行はれつゝあるが、いま第五次中國鑛業記要によると三億二千三百萬噸と推定されてゐる。北支はそのうち一億七千四百六十萬噸であつて全支の五四・一%を占めてゐる。中支は一億一千八十八萬噸であつて、その割合は三四・六%である。このやうに北支は中支に比して埋藏量が豊富であるにも拘らず開發が遅れてゐたのは中支の鐵山は揚子江流域にあつて輸送上の便がよいためわが國がその開發に關與してゐたが、北支は輸送設備を缺いてゐたことによる。

上記鑛業記要による北支の鐵鑛埋藏量は次表のやうである。



地名	省別	埋藏量(千吨)	地名	省別	埋藏量(千吨)
龍烟	察哈爾	九一、六四五	灤縣	河北	三二、四二四
金嶺鎮	山東	一三、七〇〇	紅山	河南	七四〇
利國驛	江蘇	三、〇〇〇	易縣	河北	一、五〇〇
信陽縣	河南	二、〇〇〇	井陘	河北	七、七五五
費縣	山東	六四〇	固陽	綏遠	七〇〇
撫寧・臨榆	河北	三五〇	白雲(綏遠)其他		二〇、〇〇〇
北支合計		一七四、六〇四			

これらのうち最も注目すべき資源は龍烟鐵山である。現在蒙疆政府と北支開發との折半出資による龍烟鐵礦會社によつて開發されてゐる。その鑛量は次のやうに五縣に亘る廣大な地域を占め一億二千二百萬吨に達するが、最近の調査によれば一億五千萬吨と言はれ、品位は五二%以上の富鑛である。

地名	省別	品位	埋藏量(千吨)	
烟筒山	宣化縣	一四、〇〇〇	宣化驛北北東	一〇千
龍家堡	宣化、龍關縣	六五、〇〇〇	北東	四二千
辛寨	龍關縣	一八、〇〇〇	東	七六千
涿鹿	赤城縣	一七、〇〇〇	北東東	八〇千
三叉口	懷來縣	四、〇〇〇	沙城驛北	一四千
麻峪口	涿鹿縣	四、〇〇〇	下花園驛南西	六〇千
合計		一二二、〇〇〇		

品位、埋藏量から見れば龍家堡が最も有望で、次いで辛寨、烟筒山の順であるが、事變勃發後京包線宣化驛に最も近い烟筒山を先づ開發し、漸次龍家堡その他の開發に着手する方針が立てられた。十二年末には宣化驛、烟筒山間の鐵道が建設されて貯鑛の内地向輸送が行はれたが、既に烟筒山の開發は機械掘によつて日産二千吨程度に達してゐた。一方龍家堡の採掘も着手され、龍烟鑛區では當時一年間には二百萬吨程度の出鑛が豫定されてゐた。このうちどの程度内地へ積送されるかは鐵道の改修建設から積出港として漕沽の築港も完成されねばならず、更に開鑛炭の開發利用による現地製鑛所がどの程度の規模をもつかによつて定まらう。十四年は出鑛三十一萬三千餘吨のうち十七萬八千吨が内地、十萬吨が石景山製鑛所へ送られた。北京西郊の石景山製鑛所は十三年末に二百五十吨爐の補修改造を終へ、更に十五年末までに五百吨爐一基を完成せしめ年産三十萬吨の計畫を急いでゐた。

山東省の金嶺鎮鐵山は品位六〇%程度の富鑛で殘存埋藏量は一千三百萬吨と言はれ、現在では日支合辦の魯大公司によつて年數十萬吨の出鑛を見てゐるが、それ以上の期待は出來ぬやうである。

冀東地區の灤縣は三千二百萬吨の鑛量を有するが、品位は二七・八%の磁鐵鑛を主とする貧鑛で、支那民營會社永平鐵鑛公司の所有であるが、未採掘にして現在開發の對象となつてゐない。山西省の鐵鑛資源は所謂「山西式鐵鑛」として知られ品位は製鐵原料として適するが、産地は晋



城、高平、孟縣、平定、昔陽、和順、長治、壺關、寧武、長子、陵川、陽城、太原、西山、隰縣その他の諸地方にあり、分布が極めて廣汎で、一定面積に對する鑛量が少いために近代的開發には餘り有利と言へず、その産額は年十八萬噸程度であつた。陽泉製鐵所は事變後與中公司及大倉鑛業の經營となり、二十噸爐は昨年七月操業、三十噸爐の基礎も完了を見た。太原製鐵所も大倉鑛業により四十噸爐は完成し、百二十噸爐も十五年から操業を見んとしてゐた。この二製鐵所は附近の土着住民の採鑛せるものを原料としてゐる。

徐州北方の利國驛鐵山は埋藏量三百萬噸、品位五〇乃至五六%の富鑛と言はれるが未だ採掘に至らない。以上のやうに北支には約二億噸の埋藏量を算するが何分奥地であつて開發、運搬に甚だ困難であり、龍烟鐵山のみは將來の開發を期待し得るが、さりとて當面内地への輸送は大きな期待は望まれない。かく北支も大量の輸送が現地製鍊、陸上輸送の困難によつて望まれないとすれば中支はどうであらうか。

#### 中支の鑛鑛資源

支那からの鑛石輸入は昭和十一年に於て百二十五萬噸に達してゐたが、これは全部中支からの供給であつた。

中支の鐵山は大冶を始め、桃沖、當塗等主として湖北省、安徽省の揚子江流域に廣汎に存在してゐる。その埋藏量は一億一千百萬噸に達し、主要なものはわが國の權益下にあつて水運の便が

よいため比較的容易に開發され、内地に搬出されてゐる。

わけでも日鐵の經營下にある大冶の鐵山(漢冶萍公司下の諸鐵山及び象鼻山を含む)は品位六〇%以上の赤、褐鐵鑛で、二千五百萬噸の埋藏量を有する。事變直前には出鑛量は全支の四割を占め七十餘萬噸が八幡へ供給されてゐた。事變によつて大きな破壊を受けたが、急速に採掘、輸送設備も復舊し、占領當時江岸にあつた三十萬噸、山元五萬噸の貯鑛も内地へ積出された。象鼻山は十四年六月より、獅子山、鐵門項も七月より採掘に着手、十四年末には以上三鐵山のみで日産三千噸に上る豫定であつたが更に鑿鑿六百餘萬噸、鄂城一千万噸の鐵山も開發を見んとしており、一、二年後には年産百萬噸は現實するものと言はれてゐる。

大冶を除く多くの諸鐵山は埋藏量五百萬噸程度のもので中支那振興、日鐵、日本鋼管、小倉製鋼、淺野造船、中日實業の出資による華中鑛業の傘下であり第一に採掘に着手されたのは安徽省當塗縣の太平鐵山であつた。太平鐵山は埋藏量六百三十萬噸、品位三〇乃至六三%である。南山、小姑山、凹山、大東山、蘿葡山、黃梅山の諸鐵山に分れ、事變前は福利民、寶興、益華等の諸公司によつて採掘され、主としてわが國へ輸出されてゐた。即ち南山からは日鐵及び淺野製鐵へ年約十五萬噸、小姑山から日鐵へ約五萬噸、凹山、大東山から日鐵へ十五萬噸、蘿葡山、黃梅山から淺野へ四、五萬噸であつた。十三年十月には南山、大凹山、黃梅山一帯の復舊、山元と積出港馬鞍山の鐵道修理も完成し同年末には兩鐵山の採掘量は日産二千噸程度、輸送力は一千三百噸に達した。



同省繁昌にある桃沖鐵山は埋藏量五百萬噸、品位五〇%であるが、事變前支那と三井物産合辦の裕繁公司の經營下に年二、三十萬噸を八幡へ送つてゐた。昭和十四年四月末復舊に着手し現在は採掘が進捗しつゝある。

江蘇省の鳳凰山は四百四十萬噸の埋藏量を有するが十四年秋以來開發に着手されてゐる。

安徽省銅陵の銅管山は五百萬噸、鷄冠山は四百萬噸の埋藏量を有し品位も五〇—六〇%の注目すべき資源である。

これら華中鐵業傘下の諸鐵山の復舊、開發により十五年度は百五十萬噸、次年度は桃沖、鳳凰山の各十萬噸の増産と銅管山の開發による三十萬噸とによつて年産二百萬噸、更に二年後には江西省城門山(埋藏量六百三十萬噸)、浙江省長興(五百萬噸)の開發各二十萬噸、其の他十萬噸で年産二百五十萬噸確保を目標にしてゐる。これに大冶の増産を加へれば數年後には四百萬噸の鐵鑛石を確保し得て、十一年の中支鐵鑛石生産高百三十四萬噸(大冶五十四萬二千噸、象鼻山二十萬噸、桃沖「裕繁公司」十四萬噸、當塗「寶興」十八萬一千噸、福利民二十三萬七千噸、益華四萬噸)、四十五萬八千噸)の數倍に達すると豫定されてゐるが、治安、資材の不足、輸送能力等の諸困難は大きくその實現には幾多の問題があらう。しかし乍ら勿論中支の鐵鑛石生産は今後相當程度の増産が期待され得るし、大冶熔鑛爐設備(四百五十萬噸爐二基)も従前の復舊程度に止められるとするならば専ら對日供給に向けられるであらう。資源は尙ほ相當の埋藏量が豫想され、現在の開發も

頗る低度にあるが、依然としてわが國鐵鑛石資源の老なる需要に對して滿洲、北支に加ふるに中支の資源を以つてしても應じ切れない。

地名	省名	中支主要鐵山埋藏量 (單位千噸)	埋藏量
銅管山	安徽(銅陵)		四、九二一
鷄冠山	(同)		四、〇〇〇
當塗山	(當塗)		六、二九八
長龍山	(繁昌)		四、六四五
大冶(漢冶萍公司)	湖北		一〇、五〇〇
大冶象鼻山	湖北		八、八〇〇
靈鄉	湖北		六、三四〇
鄂城	湖北		一〇、〇〇〇
宜都	湖北		四、〇〇〇
鳳凰山	江蘇		四、四三七
長興	浙江		五、一三〇
蓮花	浙江		六、二九九
城門	江西		六、三〇〇
壽門	江西		一一、八四〇
其他共合計	湖南		一一、一八〇〇



南洋諸國の鐵鑛資源

南洋鐵鑛資源埋藏量 (鐵鋼聯盟調査月報第二十二號より抄萃)

國名	鑛山名	場所名	品名	品位	埋藏量(千噸)	所有會社
佛領印度支那	モリナム	東京州	褐鐵鑛	52.6	不詳	印度支那産業鐵山
	イボンヌ	ク	赤鐵鑛	55.00	2,300	
英領馬來	フノムテツク	カンボヂヤ州	ク	58.00	4,500	
	スリメダン	ジョホール州	ク	67.5 69.5	10,000	石原産業鐵山
英領馬來	エンダウ	ク	ク	63.3 66.9	10,000以上	飯塚鐵鑛鐵山
	ケママン	トレンガヌ州	ク	66.9 68.0	5,000	石原産業鐵山
比律賓	ブンガン	ク	赤、磁鐵鑛	65.75	100,000	日本鐵業鐵山
	テマンガ	ケラタン州	褐鐵鑛	55.0	6,700	南洋鐵鑛鐵山
比律賓	タンプン	ペラ州	赤鐵鑛	66.70	6,500	
	ロンピン	パハン州	赤、褐鐵鑛	63.00	10,000	石原産業鐵山
比律賓	カラムパヤン	ルソン	赤鐵鑛	64.24	4,500	フィリピン鐵鑛鐵山
	アラガン	ク	ク	62.54	1,000	
比律賓	サマール	サマール	ク	60.00	1,800	サマール鐵山
	バラカレ	ルソン	ク	60.00	2,000	アグサン金鐵鐵山

國名	鑛山名	場所名	品名	品位	埋藏量(千噸)	所有會社
蘭領印度	マリンドケ	マリンドケ	赤鐵鑛	60.00	23,000	ゴールドスター
	スリガオ	ミンダナオ	褐鐵鑛	57.6	500,000	ファイリツピン
蘭領印度	バトランガル	スマトラ	赤、磁鐵鑛	68.25 67.25	10,000	ランボン開發鐵山
	ケテユ、パン	ジャバア	磁砂鐵	57.00	3,000	
蘭領印度	ユーマス	ボルネオ	褐鐵鑛	68.00	177,000	
	スングイドア	ク	ク	52.00	7,500	
蘭領印度	ダナロン	ク	ク	52.00	300,000	オーストホルネオ
	セザク	ク	ク	52.00	3,000	會社鐵山
蘭領印度	マタン、コタ	ク	赤、磁鐵鑛	68.00	3,000	
	ワリンギン	ク	褐鐵鑛	50.45	1,000,000	セレベス鐵業鐵山
蘭領印度	ダロナ	セレベス	褐鐵鑛	50.45	1,000,000	
	ライゲイ、フ	ニューギニア	ク	68.20	19,000	
蘭領印度	アフアク	ク	ク	57.80	25,000	
	オムピラ	モルツカ諸島	ク	57.70	25,000	
ニウカレドニア	ルイブ	ク	ク	55.30	50,000	
	ゴロ	ク	赤鐵鑛	66.00 67.30	20,000	ニウカレドニア
英領印度	ラニガニ	ベンガル州	粘土狀鐵鑛	66.00	400,000	鐵業鐵山
	ゴルミーン	ビハール、オリッサ州	赤鐵鑛	62.6	25,000	タタ鐵鑛會社鐵山



バダンプール	ノアムンガ	グアンシラ・アル	アランニ	ダリリー及ラ	グヤラ	ローハア	ゴンドマラ	カンダマラ	ババブーダン
ク	ク	ク	ク	中央州	ク	ク	マドラス州	磁鐵	マイソール州
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	磁鐵	赤鐵	赤鐵
六七・五	五七・六	三〇・九	六四・〇	六六・五	六二・〇	六二・〇	五二・〇	六四・五	三三・五
七〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	四〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	數十億	三三,〇〇〇	六〇,〇〇〇
ク	ク	印度製鐵會社鑛山	ク	パース會社鑛山	ク	ク	ク	ク	ク
				タタ鐵鋼鑛山					

南洋諸國はわが國への最大の鐵鑛石供給地である。各地には相當の埋藏量を有するが、その開發は印度及び濠洲に製鐵業があるのみで、殆ど未開發資源として残されてゐる。これらの諸國は未だ工業化の程度は低く鐵鋼消費が僅少であり、且つ就中製鐵用粘結性炭を缺いてゐるために製鐵業は起り得ず、従つて鐵鑛資源の開發は専ら輸出鑛石としてのみ採掘されて來たのであつた。だが南洋諸國を植民地とする歐米諸國は何れも手近に資源を有し、たとへ南洋鑛石に依存するとしても到底經濟的に利用し得ない。一方南洋鑛石を最も切實に要求するものはわが國のみであり、現に南洋鐵鑛は全くわが國の鐵鑛需要増加に追はれて開發、輸出されて來たのであつた。而も之

が開發をなし得る資本、技術を有するものも、又南洋諸民族の鋼材需要を充すに足るものもわが國を於て他にはなく、少くも南洋鐵鑛はわが國との技術的、經濟的協同なしには開發は不可能である。既に英領馬來に於ける鐵鑛開發は凡て邦人企業によるものであり、其の他の諸國に於ても多かれ少かれ技術的經濟的相互依存の下にある。以上のやうに南洋で採掘された鑛石はそのままわが國へ搬出さるのであるが各鑛山から八幡までの經濟距離を陸上輸送一杆が海上輸送十杆に當るものとして計算すれば次の如くに比律賓、佛印はもとより蘭印からの輸送さへ滿洲各鑛山に比して有利であつて、地理的條件からもわが國へ供給されるべき必然におかれてゐる。

東亞圈内各鑛山から八幡までの經濟距離 (單位杆)

産地名	經濟距離	産地名	經濟距離	産地名	經濟距離
利平原	八九	鞍山	四四一	東邊道	五六〇
大平	一五五	イボン	四五五	ヤンビーサンド	五七六
茂山	一八二	セア	四六八	本溪湖	五七六
大冶	二一五	グン	四七六	ニューカレドニア	七二二
カラバンヤンガ	二四五	グン	四七六	印度山	一、一〇〇
スリガオ	三〇六	ツヨ	五一三	ワイヤラ	一、一三〇
金嶺	三七九	龍烟	五四五		

英領馬來 英領馬來の鐵鑛資源は隨所に存在し現在發見されたものだけでもその埋藏量は一億



三、四千萬噸と言はれてゐる。大部分は赤鐵礦にして品位は六〇%程度である。採掘された鑛石は殆ど全部わが國に送られてゐるが、その開發が最近數年間に急激な發展を遂げたことは、輸出額の増加が昭和八年の七十六萬噸から十一年には百六十一萬噸に上つてゐることによつても窺はれる。最近では年産百九十萬噸に達した模様であるが、現在諸鐵山とも極力増産に努めてゐるので近い將來には年三百萬噸の輸出も實現されるであらうと見られてゐる。以下これら諸鐵山の開發狀況を見よう。

スリメダン鐵山はジョホール州にある。稼行以來二十年に達して、馬來に於て最も早く開發に着手されたもので、現在石原産業が採掘に當つてゐる。品位は六四・三七%の赤鐵礦にして、埋藏量は八百萬噸と言はれたが三分の二は採掘され現在は約三百萬噸とされてゐる。既に老境にあり、年六十萬噸を産出するが數年後には枯渴の運命を免がれまい。

エンダウ鐵山もジョホール州にあり、一九三六年以來飯塚鐵礦が採掘に着手してゐる。埋藏量は少くとも一千万噸以上の赤鐵礦床で、品位は六五%以上、現在採掘されてゐるものは品位は四五%であるけれども、三・二%の滿俺を含有してゐる。山元から積出港までは二十五哩に達するが極めて水運の便もよく、馬來に於て今後の出産増加が最も期待されてゐる。

更にジョーホール州コタチンギ地方にも邦人の試掘が行はれてゐる。ペレパ山には埋藏量百五十萬噸の赤、褐鐵礦が発見されたが品位は低い。その附近のス、ロタン、ロンボンの小鐵山も未

だ稼行に到つてゐない。

ケママン鐵山はトレンガヌ州南部にあつて、一九二九年以來石原産業が稼行してゐる。品位は二・四%の赤鐵礦であるが、埋藏量は既に百萬噸に過ぎない。年産十萬噸であるが今後の期待はかけられない。こゝに注目すべきものとして長さ十七町、幅二間半——三間に及ぶ滿俺鐵床があり、滿俺二二%、鐵三〇%を含有して、現在採掘されてゐる。

ツングン鐵山も同州にあり一九三〇年來日本鑛業によつて開發されてゐる。馬來最大の鐵山にして、産出額も最も多く、十一年には九十一萬噸、最近に於ては百萬噸に達してゐる。埋藏量は四千萬噸乃至一億噸と稱されてゐる。赤鐵礦が七、八割、磁鐵礦が二、三割であるが、品位は六五・七四%の富鐵である。

テマンガン鐵山はケランタン州にあり、一九三七年より南洋鐵礦が採掘してゐる。品位五五・一%の褐鐵礦にして埋藏量は六百七十二萬噸である。現在では十五萬噸程の出産であるが近々五十萬噸の産出があると見られてゐる。

タンブン鐵山はペラク州にあり、品位六八・七%の赤鐵礦で六百五十萬噸の埋藏量を有してゐる。邦人によつて試掘が行はれてゐるが年産約千噸に過ぎない。

スンゲイ・レロン鐵山もペラク州にあり、鑛量は豊富であるが搬出が困難なので現在大規模な開發は望まれない。



ロンピン鐵山はバハン州ロンピン川の上流四十哩の地點にあり、その輸送に困難を伴ふが、石原産業が一九三七年より試掘を行つた。品位は六二%の褐鐵礦及び赤鐵礦床である。埋藏量は二千萬噸以上に言はれ目下採掘、搬出を計畫中であるが將來を期待されてゐる。

更にケダ州には品位六三・六%の赤鐵礦床が発見されたと言はれてゐる。

以上の様に馬來の鐵礦資源は餘り豊富であると言へないにしろ、わが國は一手に開發し、年二百萬噸近くの鐵石を輸入しつゝある。この鐵石は粉鐵が多く、塊鐵と言はれるものでも粉鐵が六割を占め、製鐵能率に若干の低下を來してゐるが、今後は製鐵過程で技術的に處理し得ると言はれてゐる。諸鐵山が比較的海岸に近接してゐることは運賃を低廉ならしめて今後は益々輸入の増加を見るであらう。しかし現在これらの鐵石輸入に當つて最大の問題は輸送能力——船腹の充足、港灣設備の建設である。馬來の各積出港から八幡までの距離は平均二千五百哩に及ぶために一往復に三十八日を要するし、ツングン、エンダウ、ケマン等東海岸に積出港を有するものは冬期三、四ヶ月間は貿易風のため積出不能に陥り、一年のうち八、九ヶ月間に輸送しなければならぬ。更にこれらの資源は當面のわが國の對英政治的緊張によつてシンガポールの脅威下におかれてをり、その開發、輸送が何日杜絶に瀕するかといふ不安にあるが、要はわが制海權確保に歸着することであらう。

#### 比律賓

比島の鐵礦埋藏量は五億噸を超えと言はれ、近年より開發を見つゝある。わが國に

とつては馬來に次ぐ南洋の鐵礦供給地であるが、資源の開發は米國人と比島人のみに限られてゐる。だが今後の政治的折衝によつてはわが國の資本的、技術的連繫も必ずしも不可能とは言へないであらう。

カラバヤン鐵山はルソン島北海岸にあり、一九三四年來フィリピン鐵礦會社によつて稼行されてゐる。埋藏量四百五十萬噸、品位六四・一四%の赤鐵礦床であつて、その鐵石は昭和十一年來岩井商會によつてわが國に輸入されてゐる。

コーデイレラ鐵山はブラカン州にあり、品位六二・五四%の赤、磁鐵礦にして埋藏量は露頭部分から推して百萬噸と見られてゐるが、鐵脈が深部に延長してゐれば更に大きいだらうと言はれてゐる。何分海岸にまでの輸送距離が遠いので大規模の開發は行はれ難い。此處には比島隨一の小規模で原始的な土着製鐵業が起されてゐる。一日に二百噸乃至四百噸の製鐵能力に過ぎない煉瓦造りの爐によつて農具の生産に當つてゐる。

サンタ・イネツ、ラナチン等の赤鐵礦床はこのブラカン鐵床の連続であるが、産出額は極めて少い。

サマール島のサマール鐵山は一九三七年から比島資本のサマール鐵山會社によつて開發に着手された。埋藏量百八十萬噸、品位六〇%の赤鐵礦床にして、十四年から年産三十六萬噸を目標に採掘してゐるが、全部日本へ送られる豫定である。



マリンドケ鐵山はルソン島の南にあつて、埋藏量二、三百萬噸、品位六〇%の赤鐵礦である。現在ゴールド・スター鑛業が稼行してゐる。バラカール鐵山もこれと同じ品質で、埋藏量は二百萬噸、アグサン金鑛會社による開發である。兩者共比島資本であつて、わが國へ輸出してゐるが餘り將來は期待出來ないであらう。

こゝに最も注目されるものはミンダナオ島のダヒガン灣附近のスリガオ鐵山であらう。厚さは三米乃至十米の百平方杆に亘る鑛床で埋藏量は五億噸、採掘可能なものは四億三千萬噸と稱されてゐる。一九一二年に發見され、一四年には政府の保留鑛區となつたが、最近國立興發會社によつて採掘を計畫されてゐる。但し品質は紅土狀をなした褐鐵礦であり、品位も低く四七・七六%に過ぎず、このため從來から未開發のままにおかれて來たのであつた。同質鑛石は蘭印、キューベ島にも賦存してゐるが、キューベ鑛石は現在米國が輸入しつゝあり、既に經濟的にも技術的にも鑛鐵原料として使用され得る可能性を示してゐる。かくスリガオの紅土鐵礦が困難な問題を解決し得て現實に鑛鐵原料として使用されば、その資源は測り知れざる豊富なものとして期待される。

以上のやうに、比島の鐵鑛開發は最近に於て急激な發展を示したもので、輸出狀況から見ても一九三四年には七千餘噸に過ぎなかつたものが三六年には六十五萬噸、三八年には九十一萬噸へと増加してゐる。これは専らカラムバヤンガン、サマール、マリンドケ及びバラカレの鐵鑛がわ

が國へ向けられたものであるが、比島はこの鑛石輸出代金を以つて米國又はわが國から輸入する鋼材の代金支拂ひに當てる建前をとつてゐる。ことは注目に値しよう。この限りに於て、比島鑛石の輸入増加は約束されたものと言へるであらう。わが國への輸送距離にしても近いのであるが、スリガオ鐵鑛を除けば何分にも鑛量そのものが少ないのだから今後とて多少の供給増加が望まれる程度であらう。

**佛領印度支那** 佛印の鐵鑛資源は可成り調査が不充分で正確を期し難いが、埋藏量は三千萬噸と稱されてゐる。現在のところ採掘可能なものは七百萬噸程度であらうと見られ、惠まれた資源と云ふことは出來ない。こゝの鐵鑛輸出は全部わが國に向けられて一九三六年の一萬一千噸から三八年には約九萬噸に増加を見たが、同年九月の輸出禁止令によつて一時中絶を見た。最近の日佛關係の好轉に伴つて今後はわが國の資本、技術による積極的開發が期待されるが何れにしても鐵鑛供給國としては重要であり得ない。佛印の鐵鑛資源の分布は一般に東京州ソッコイ河流域地帯、安南州の鐵鑛地帯及びカンボヂヤ丘陵地帯の三つに分たれてゐる。

ソッコイ河流域地帯、この一帯には數十の鐵山が點在してをり、そのうちイヴォンヌ鐵山は最も著名にして、埋藏量は二千萬噸、品位六五%の赤鐵鑛床であるが、現在のところ採掘可能量は二百三十萬噸程度であらうと言はれてゐる。こゝのモリナム鐵山も品位五三・一六%の褐鐵鑛で約五%の滿俺を含有し品質は極めてよいが、鑛量は百萬噸に過ぎない。この地帯は一九二二年佛



印政府の保留鐵區となつたが、三七年に佛國と臺灣殖産合辦の印度支那産業會社が設立され、二鐵山の對日輸出年五十萬噸目標の下に開發に着手した。三八年には佛印側の對日輸出禁止で一時中絶されたが、最近の政治的好轉の結果今後の開發が期待されてゐる。ソノツ鐵山は諒山の南西三十軒の地點にあるが、これも印度支那産業に依て採鑛が行はれてゐる。更に老開から五十軒の下流にあるベオハ驛西方に品位七〇%の良鑛が豊富にあると言はれてゐる。

安南州の鐵鑛地帯、支那國境から安南の南端ランビヤン高原に到る二千軒の安南山脈と海岸線との間に分布されてゐる多數の鑛床で主として褐鐵鑛である。タンニア縣のヌイベンチャラア、チャンサの三鑛區、ヴィン縣の十數鑛區、ドンチン鑛區、ドンホン鑛區、フオンニヤ鑛區等は邦人企業によつて開發を見ており、更に順化附近、ツイラン附近にも鑛床が發見され、採鑛も簡單に行はれ且つ輸出に便であるが何れも鑛量少く大きな期待はもてない。

カムボヂヤ丘陵地帯、ブノムデツク鐵山が最大で品位五八%の赤鐵鑛にして採掘可能量は四百五十萬噸位と言はれる。一九二八年にカンボヂヤ鐵鑛會社が對日輸出を目的に開發を行つてゐるが港から百四十軒の地點にあつて交通不便のため充分な出鑛を見てゐない。

タイ 詳細は不明であるが餘り大した資源はない。既知鑛床としては馬來半島シンゴラ附近の褐鐵鑛、北シヤムのコーラット附近の相當大きな赤鐵鑛、スラート州バナサンンの二百萬噸の赤鐵鑛、南シヤム灣のタサラの七百萬噸の赤鐵鑛等がある。

### 蘭領印度

蘭印の鐵鑛資源は全島嶼に亘つて存在し、その埋藏量は十六億噸を超えると推定されてゐる。しかし乍らその大部分は紅土狀鐵鑛で品質も劣り、製鐵用石炭を缺き現地製鐵の可能性も薄く且つ輸出にしても市場が遠隔である等のため從來から開發が顧みられなかつた。他方同國に於ける採鑛權は極端に外國資本に對して閉鎖的であり、特に今日の蘭印内外の政治的情勢如何は鐵鑛開發の遲速を左右するところも大であらうが、結局はわが國との緊急な連繫に立たざる限り開發は不可能であらうことは明白であらう。

ランガル鐵山はスマトラ東南端ランボン地方に位する。埋藏量一千萬噸の赤、磁鐵鑛床にして品位も高く上層部は六七・二五%、下部でも四八・五%である。獨逸系ランボン開發會社の所有であるが未だ開發に至つてゐない。嘗つて十數年來わが國と鑛業權讓渡の交渉があつたが價格上不調に終つたと言はれる。

ジャヴァ島のケドウ、バンニューマス兩州の西海岸一帯には三千五百萬噸の磁砂鐵鑛が存する。蘭印鐵鑛區開發會社の所有にして、品位は五七%であるが、チタン含有量九乃至一五%にして且つ微粒のために未だ開發に着手されてゐない。

ボルネオ南東部のラウト海峽附近には約四億八千萬噸を算する紅土狀諸鐵鑛が存在する。

スンゲイドウア鐵鑛は埋藏量一億七千萬噸と言はれ、そのうち塊鑛一億萬噸、粉鑛七千萬噸である。海岸からは十五軒の近距離にあり搬出に便であるが、品位は四八%で水分一二%を含む



紅土狀である。一九一七年に同國政府はこゝに製鐵計畫を樹てたが中止を見、二三年來獨逸系ウ  
イルヘルム・ハーミユラー會社が現地調査を開始してゐるがそのまゝに終つてゐる。

スワンギ島鑛床も亦紅土鐵鑛で品位は四〇%以下、加ふるに鑛量二十五萬噸に過ぎず經濟價値  
は乏しい。

ダナワン島は全島鑛床にして北、西部は海中にまで鑛脈が連続しており、輸送には極めて好都  
合である。表面は塊狀の磁鐵鑛であるが下部は粘土狀をなし、塊狀のものは品位五〇・一%、鑛  
量三百六十五萬噸、粘土狀のものは品位四四・三%鑛量三百八十五萬噸にして鑛量は合計七百五  
十萬噸に達する。

セブク島鑛床も品位四六%の紅土鐵鑛であり、埋藏量は三億噸に達するが、そのうち品位六二  
%の赤鐵鑛が約六%を占めてゐる。現在オースト・ボルネオ會社が所有してゐるが未採行であ  
る。

ボルネオ島東南部にあるブレイアリ地方の鐵山は品位六〇%以上の磁、赤鐵鑛であるが、埋藏  
量は十八萬噸に過ぎず採行對象となり得ない。尙ほ附近には約一萬噸の少量ではあるが鐵四五%  
クローム五、六%のクローム鑛が存する。

同じくボルネオの西南部のマタン、コタワリンギン兩州にも品位六四%の赤、磁鐵鑛二、三百  
萬噸を有するが、海岸から數百杆を離れてゐるので開發の可能性は少い。

セレベス島の中央部にあるラロナ鑛床は埋藏量十億噸と稱せられる東亞に於ける最大のもので  
ある。紅土狀鐵鑛であり品位は五〇・四%であるが、水分を一四・八三%も含んでゐる。一九二  
二年蘭印政府の保留鑛區となつたが、三八年に和蘭資本によるセレベス鑛業が設立され採掘に着  
手した。同鑛床附近のトウタイ湖とラロナ河の落差を利用して電力による電氣精鍊法を行ふ計畫  
であると言はれるが蘭印の今日の運命を以つてしては不可能であらう。

ニューギニアの西北端にあるワイゲオ島のフアフアク灣附近には品位四八・一%の紅土鐵鑛千  
二百萬噸があり、その東北のマヌーラン島にも同質品のものが七百萬噸發見された。何れも搬出  
に容易な點は注目されてよい。

モルツカ島にはオピラに品位四五・八%から五七・七%の鑛床一千五百萬噸、フアウに四九・  
六%から五四・〇%のもの二百七十萬噸、ルイブに四五・三%乃至四六・九%のもの五千萬噸  
である。

更にフロレス島北海岸のガンタ鑛床は詳細は不明だが、品位五〇%乃至六〇%の鑛量豊富な赤  
鐵鑛床がある。滿庵含有量も多く搬出も好都合なので今後の開發を期待される。

以上のやうに豊富な蘭印の鐵鑛資源は依然として未開發のまゝに置かれてゐるが、今後これが  
積極的に開發され、ば東亞圏内での鐵鑛自給も優に確立が可能であらう。しかし乍ら開發の曉に  
は海上二千四百哩乃至二千八百哩の遠距離を経てわが國へ輸送されるであらうが、蘭印鐵鑛石の



大部分を占める粘土狀鐵鑛は多量の水分と一〇%以上の礬土を含むため選採にも製鐵作業にも技術的諸困難があり、これらの點を如何にして解決し得るか、第一の問題である。併し乍ら貧鑛處理の製造技術上の發展に伴つて、既に同品質のキューベ鑛石は米國に於て使用されており、比島のスリガオ鑛も亦採掘が着手されたことは、蘭印に於ても同様に粘土鐵鑛開發の可能を示すことに他ならないであらう。

**ニューカレドニア** 南端ゴロには品位五〇%乃至六〇%の赤鐵鑛床が存在し、埋藏量は二千萬噸以上と見られてゐる。一九三八年設立の日佛合辦ヌベル・カレドニア鑛業が開發に着手してゐるが、設備完成の上は年産五十萬噸以上の豫定である。昨年も十數萬噸が日本鋼管に對して輸送されたが、三八年以來濠洲の對日鐵鑛禁輸に代つて重視さるべきであらう。

かくの如く、東亞に於てはわが國を圍繞して南洋一帯に亘つて二十數億噸、更に日滿支を加へるならば實に五十億噸に達する鐵鑛資源が存するが、滿洲及び北支を除いては製鐵用粘結性炭を缺き、殆ど未開發と稱せられる状態に残されてゐる。これが開發は東亞に於ける鐵鑛業の中心たるわが國の技術、資本に依存する他になく、こゝにわが國は東亞圈内に於ける鐵の輸入國から輸出國へと轉じ得べき傾向を豫想し得る。換言すれば東亞圈内の鐵鑛開發の進行に伴つて我國は益々東亞への鐵鑛輸入の依存度を高めるが、それは同時にわが國の東亞圈内への鐵鋼製品輸出の飛躍的發展の潜在力であることも豫想される。更に言へば鐵は東亞圈内自體として相互に依存補給

し得ることが當面する課題でなければならない。かくしてのみ鐵鋼業の東亞的再編成は東亞諸國の歐米への根強い鐵製品依存關係から斷ち切つて實質的に成立し得るであらう。とは言へこれの實現には多くの歳月と苦難なる努力とが鐵鋼業に重く課せられてゐることを忘れてはならない。更に東亞に於ける鐵鑛資源並びに鐵鋼品供給國としての濠洲（鐵鑛埋藏量九億噸、鑛石年産二百萬噸、銑鐵年産九十萬噸）及び印度（埋藏量三十億噸、鑛石二百五十萬噸、銑鐵百五、六十萬噸）の二國が控へてゐることを見逃してはならない。（二六・一）

## 第五節 南太平洋の戰略線と軍需資源

### 包圍の南太平洋線

近衛首相のメツセージ以來、ルーズヴェルト大統領は日本のことについて言及しようとはしないが、にも拘らず九月十五日、武器貸與報告に於て米國は「英雄的な支那國民への武器物資輸送を促進するため、雲南ビルマ鐵道およびビルマ・ルートに對する裝備品を供給し、更にマラリヤと關ふため支那に藥品と技術的援助を與へ、また武器貸與供給に關して軍事使節を支那に派遣した」と述べてゐる。またハル國務長官は中立法適用に關するピツドル檢事總長の新解釋を發表しこれによつて香港、新嘉坡、馬來聯邦、ビルマ、英領ボルネオ、サラワク、フィヂーの太平洋圈



の英領、或ひはラングーンを通じての重慶援助にもアメリカ船により軍需資材を直接輸送し得ることを明かにしてゐる。これによつて米海軍による米商船護衛の行動圏は太平洋にも及び得ることになつたのであるが、この事實は言ふまでもなく對日ABCDS包圍線への補給強化の最高手段となるであらう。

ところでこの對日包圍線は、周知の如く北太平洋線、南太平洋中央線、南太平洋南方線の三つを以て、その主導國たるアメリカに接続してゐる。北太平洋線はコチヤツク島、グッチハーバー、シスカ島、ベトロバウローフスク、ウラジオストツク、ニコライエフスク等の戰略基地を経てソ聯に達するもの、或ひは最近のソ聯軍事使節が飛んだアルヘンゲリスク北極圏、ノームの直航空路であるが、茲では南太平洋包圍線形勢に就いて述べよう。

ハワイ 同島はサンフランシスコより三、八八九杆、横濱より六、二五八杆の航程にあるが、周知の通り米全艦隊を容るゝに足る眞珠軍港と共に同オアフ島の二、補助三、その他ハワイ島三、マウイ島一、モロカイ島一、カウアイ島一、計十一の飛行場が存在し海陸の一大戰略基地たるを誇つてゐる。これから西南一千三百杆のジョンストン珊瑚島は同じく南方二千杆のバルミラ島と共にハワイの衛星的飛行艇基地をなしてゐる。

ミッドウエイ、ウエーク兩島 何れも桑港から香港に至る定期空路(一萬四千杆)の中繼地であり、同じく空軍及び潜水艦基地である。

グアム島 この中央南太平洋線の次の基地であるが、我が南洋委任統治領のたゞ中に存在し、軍港及び空軍基地として施設さる。

マニラ フィリッピン陸海軍は既に米國大統領の指揮下に入り、包圍線のシンガポールと並ぶ策源地として重大化して來た。米比合體せる米國極東軍司令官にはマツカーサー將軍が任命されてゐる。陸軍力は米比合計二萬五千、義勇軍約十四萬。マニラ灣のカヴィテ、オロンガポ兩軍港を根據地とする海軍力はトーマス・ハート司令長官の下に旗艦ヒューストン(一萬噸巡洋艦)、輕巡一隻、驅逐艦十四隻、潜水艦十六隻、その他合計四十五隻、空軍約二百機である。但しマニラはホノル、から約九千杆の遠距離にある。

香港 全島要塞化は進行してゐるが、我が陸海軍の南支、海南島、佛印進駐によつて戰略的價値は失はれた。しかし種々の點からして可成りの役割を果してゐる。正規軍一萬五千(英、印)、義勇軍(英、支、印その他白人)約六千、海軍は驅逐艦數隻、河川用砲艦三隻、潜水母艦一隻その他が出入してゐる程度。マニラから一、一六七杆の海路。

新嘉坡 マニラから二、四八七杆の海路にあるが、言ふまでもなく對日包圍線の中心基地である。英、米、支間の軍事接觸がこゝで慌しく英國のポツパム極東軍司令官を中心に展開されて來た。前情報相ダフ・クーパーの來任活動も目覺しい。將軍將校十餘名は絶えず常駐してゐる新嘉坡の一大軍港としての價値は言ふまでもないが、現在の馬來方面海軍力は巡洋艦、驅逐艦



各六隻、高速魚雷艇その他小艦艇約七十隻、陸軍は正規軍七萬、義勇隊二萬が新嘉坡、ピナン(二萬五千)、コタベル(タイ灣國境一萬)、中部兩海岸(各一萬)に配置されてゐると言はれる。到る處に航空基地あり、第一線機二百五十、豫備機と合せて五百機。

#### 最南方線とビルマ・ルート

南太平洋の今一つの南方包圍線は、ハワイのホノル、からカントン島、ニューカレドニアの首都ヌメアを経て新西蘭、濠洲に至る航空路、ホノル、からフィジー島スヴァ港(四、三一五軒)を経て濠洲に及ぶ航路に沿ひ、濠洲西北のダーウィン軍港からスラバヤ、バタビアから新嘉坡に接続してゐる。

**カントン島** 英米共同支配の島であり、その西北ハウランド島(米領、同時に輕快艦艇の泊地)と共に飛行基地である。その南方にはサモア諸島中のローズ島(航空)、ツツイラ島(海軍根據地)が存在する。

**ポート・ダーウィン** 新嘉坡と呼應する濠洲海軍の基地、濠洲海軍力はオーストラリア、カンベラ甲級巡洋艦二隻、アデレード、ホバート、パース、シドニーの乙級巡洋艦四隻、驅逐艦四隻等であり、陸軍は海外派遣十萬、常備兵二萬、市民軍八萬。

**スラバヤ** 蘭印は乙級巡洋艦四隻、乙驅逐艦八隻、潜水艦十五隻、その他高速魚雷艇、警備艇を加へると約七十隻。スラバヤが軍港である。この外、アンボン、タラカン、バタビア外港が

海軍根據地となつてゐる。空軍の最大基地はバタビア東南方のバンドンで、陸海軍機五百機を用意してゐるが、特に到る處に建設しつゝある飛行場の役割は輕視し得ない。陸軍力は十萬と言はれる。

更に對日包圍線の今一つの重要部分は、西方抗戰支那を補給してゐるビルマ・ルートである。英國は泰の西北方國境に面するシャンステート、マンダレー、ラングーン、更に南下クラ地峽方面にかけ六萬の兵を集結してゐるが、重慶軍は西南へ兵を集結し一部ビルマ内に入りポツパム大將指揮に入つたと言はれる。またマレー、ビルマ防衛には抗日的な支那人のほか東亞諸民族中頼り得ないことから、英國は華僑に募兵し華僑の義勇軍編成に對しては非常な援助を與へてゐる。

他方、米國は軍用機を重慶に送りつゝあるのみならず、比律賓航空司令官クラゲット少將をして重慶に赴かしめ月餘に互り視察せしめたことは、ビルマ・ルートに沿ふ米人飛行機組立工場の新設、支那に於ける航空基地の開拓、ビルマ・ルート管理委員會の米人管理や技師派遣、或ひはマンダレー、ラングーン、モールメン、メルグイから馬來のコタベル、シンガポールに及ぶビルマ空軍基地の羅列(但し空軍は二百機)等と共に重大な兆候を示してゐる。

而して獨ソ開戦による米、英、ソの軍事同盟的關係化は、援蔣活動を北方より強化し、世界體系化せしめた感がある。それに危地に瀕し來つた英ソの無遠慮な強力政策はイラク、シリアに次いでイランへの侵入となり、嚴正中立を固執して屈しなかつたパーレヴィ國王は遂に退位せらる



の餘儀なきに至つた。その一方に於ては、米英の援ソルート（バスタラよりイラン高原を経てコーカサス乃至カスピ海に入るルート、印度ボンベイを経てカイベル峠越ソ聯タシケントへのルート）の開拓に對獨伊包圍線の完成を目指すと同時に、次の如く西南亞細亞一千五百萬噸を越える石油資源を確保せんとするものであつた。（單位千噸）

イラン	一〇、三八八	イラク	四、〇二一
ペーレン島	九三八	計	一五、三四七

殊にイラン石油の豊富なことはハフトケルの二十五油井が日産二萬噸、マスデツド・スライマンの三十油井が日産九千三百噸、ガツシユ・サラシ七油井で四百六十噸その他合計七十五油井で日産三萬噸を採油し得るのを見ても明かである。

#### 我が南洋領の存在とチモール島

しかし對日包圍線がかく形成強化されてゐるとしても、日本の地位もまたしかく脆弱であらう筈がない。大陸に於ける陸軍と並んで嚴然たる大海軍が存在することは到る處の基地と相俟つて恰も楔の如く陣容を整備しつゝある感がある。そして新嘉坡は横濱からこそ五、三七七軒を越える航程であるが、パラオからヤルイトに散開する南洋委任統治領、或ひは臺灣を有し、更に今日西支那海から海南島は固よりカムラン灣、サイゴン港を基地とし得るに至つた。従つてマニラは高雄から一、〇二二軒の直航路にも當り、新嘉坡は西貢から一、〇三〇軒に近接することになつ

た。それに航空路の發達も目覺ましい。横濱——サイパン——パラオ四、一八〇軒、南洋内線空路五、四〇〇軒に加へて淡水——パラオの二、八〇〇軒、パラオ——デリー（葡領チモール島）二、五〇〇軒が加はつたから、サンフランシスコ——香港間をも越える空路開拓となつた。このチモールは九州位の島でその中葡領は四國大で、人口は四十六、七萬、琲珈、コブラ、錫、銅、クロム、マンガン、砂金、石油を産するが、それは措いてもその位置は戰略的に重要である。濠洲のポートダーウィン軍港とマニラを結び新嘉坡を頂點とする三角形のダーウィンに直接する底邊上にあつて同軍港には僅かに三百八十六軒で蘭印への門戸を扼し、新嘉坡へは一千九百餘軒であるが、ニューギニアには六百四、五十軒、北ボルネオへ八百餘軒、比律賓へ約一千百六十軒といふ地點にあることは輕視し難い。

かく見來れば太平洋上大小無數の島嶼が重要な戰略的役割を演じてゐることに驚くのであるが、しかしそれはまた軍需資源的にも見逃し難い。米領ハワイ、グアム、サモア、英領フィジー、ソロモン、トンガ、ギルバート、濠洲ニューギニア委任統治領、同バプア、ナウル、新西蘭の西サモア委任領、クツク島、英佛共同統治のニューヘブライズ、佛領ニューカレドニア、その他佛領日本の南洋委任統治領、和蘭のニューギニア、智利のイースタン・アイランド、英米共同のカントン、エンダブリー等を總括した一報告によると面積三十九萬平方哩（日本本土の三倍）で、八割をニューギニアが占め他は何れも零細な島嶼乃至珊瑚礁である。人口は二百四十萬で原住民が



百八十萬と言はれるが、しかし一九三八年に至る九年平均に於て椰子實(大部分コブラ、二十萬噸)は世界生産の一三%、磷礦約八%(ナウル、パラオ、佛のマカテア、輸出量百萬噸以上)ニツケル一二%及クロム一〇・五%(ニューカレドニア等)、金一千二百萬米弗(ニューギニア及フィジー島)、甘蔗六千萬弗(ハワイ、フィジー、日本南洋委任領)その他珈琲、コ、ア、ゴム、木材、肉、皮革等を産出してゐる。そして一九二八年度の貿易は輸出一億四千七百萬米弗、輸入一億四千二百萬弗に上つたが、ハワイを除けば輸出四千九百萬米弗、輸入三千二百萬米弗であつて、その中濠洲、新西蘭は三六%、日本が二七%、英一三%、佛七・五%。米、加各六%といふ割合であつた。これは勿論、今次の大戦前年の形勢であつて、最近は對米への轉換が到る處で行はれ、それが不可能となつた地域では經濟困難に見舞はれそれがまた米英の政治的制覇への手段となつた。

#### 運命の島ニューカレドニア

かうした運命の島の中で最も悲劇的なものはフランス敗戦後のニューカレドニアであらう。昨年九月、ニューヘブリイズの副總督たるソートは濠洲巡洋艦に乗船させられ、ドゴール政府のためクレーターの表面の首謀者になつた。そして同年末には突如、大洋、オセアニア兩礦業會社に對し「ドゴール政府の命令により今回本島所産のニツケル及びクロム礦石は北米合衆國向全部賣却するを以て本日限り右の日本向輸出を禁止するものなり」と通告し來つたと言はれる。ニューカレドニアは一萬五千平方杆で四國ほどの大きさであり、濠洲シドニーの北東方約一千

運、即ち千八百五十二杆の海上にある。人口(昭和十一年)は五萬三千二百四十五人、二萬八千八百人が原住民、一萬五千餘人が佛人で日本人も一千四百三十人に達し有力な關係にあつた。周知の通りこの島は軍需礦産資源で有名である。先づニツケル礦は一九三七年二十四萬九千噸、一九三八年二十七萬五千噸を生産し、ドニアンボー工場の三基の熔鑪で七六——七七%のニツケル・マツトに精製されるが、その數量一九三八年八、〇三一噸、一九三九年九、三〇二噸、一九四〇年九、九〇〇噸に達してゐる。そして輸出は一九三八年に於て、ニツケル・マツト八、一九三噸(七七——八%)、ニツケル礦(四・五%以上の含有礦)、二三、三一九噸(主として獨、日)であつたが、その他にもクロム礦(六三%)、四二、二六三噸、磷礦石一、七五八噸を輸出してゐる。クロム礦の生産は一九三七年四八、〇二二噸(但し輸出は六九、七五三噸)、一九三八年五二、二一六噸(輸出四二、二六三噸)であつた。その他ニツケル鐵礦、コバルト、金、銅、石炭、石油等の未開發礦物が少くない。而して現在ドゴール派が米英の手に動いて、佛本國や日本との貿易を切斷してゐる不自然さは何れ修正されざるを得なくなるであらう。日本は佛本國と共同防衛關係に立ち、またこれまでニツケル、クロム、鐵礦を求め半面、配船や生産必需品の大部分を供給し、或ひは多くの移民を以てこの島の開發の基礎を成して來たからである。そしてこの島のニツケル、クロム、鐵礦、コバルトが確保される場合、東亞圈の自給體制は同時に確保されることを思へば、この佛領植民地の運命に對し無關心たり得ないであらう。



蘭印の軍需鑛産物

ところでニューカレドニアに限らず、我々の包圍線を形成する南方諸國は、同時に重要な軍需鑛物資源地帯であり、本來的に東亞的な自給單位を形成すべき豊富な物的基礎を持ち、それ故に東亞的結合を妨げられて不幸な地域でもあつた。

先づ蘭領東印度であるが、次表の如く石油約八百萬噸、錫四萬噸臺、ボーキサイト二十七萬噸以上、石炭二百萬噸、ニッケル鑛五萬六千噸、マンガン鑛一萬二千噸、磷鑛石三萬噸等東亞的に渴望してゐる各種の重要鑛物を産し、鐵鑛を含む多くの未開發富源(セレベスのクローム鐵鑛、ニッケル鑛砂層、ボルネオの鐵鑛等)も亦少くない。尙ほ軍需鑛産ではないが、ゴム、砂糖等の資源の存在も無視出來ないであらう。

蘭印の重要軍需鑛産

	昭和十五年	十四年	十三年
石 油(千噸)	七、九三九・〇	七、九四八・七	七、三九七・八
錫 鑛(千噸)	四三、八八六・〇	二八、三四二・〇	二七、七三四・〇
石 炭(千噸)	二、〇〇〇・七	一、七八〇・七	一、四五六・六
ボーキサイト(ク)	二七五・三	二三〇・七	二四五・三
マンガン鑛(ク)	一一・九	一一・〇	九・七
ニッケル鑛(ク)	五五・五	二三・五	二〇・〇

磷 酸 鹽(ク)	三四・一	一八・八	三三・一
硫 黃(ク)	一七・三	一七・六	一六・二

註 十五年度は暫定數字

蘭印は殆ど唯一の東亞に於ける石油資源であるが、その過半數の四百二十九萬噸はバレムベン、ジャンピの兩油田に集中されてゐる。この原油の中昭和十五年には九十三、四萬噸がそのまゝ輸出乃至燃料となり、その残りの原油から航空機用ガソリン三十六萬七千噸、潤滑油約三萬四千噸ガソリン百九十一萬噸、瓦斯油、ディーゼル油二百八十五萬噸、ケロシン油百萬餘噸を精製してゐる。

錫が又これらの油田地帯に面するベンカ島、ピリトン島、シンケブ島から殆ど全部産出されてゐること、貴重なボーキサイトがこのピリトン島、ピントン島と共にボーキサイト地帯を形成してゐること等はスマトラ島の東南海岸地域の重要性を示してゐる。

石炭はプキットアツサム、オムピリンの官營炭坑(七割を産す)を中心として産出され、一部過剩炭を東亞諸國に輸出してゐる。(千噸)

石 炭	十五年	十四年	十三年
生 産	二、〇〇〇・七	一、七八〇・六	一、四五六・六
輸 入	一四三・三	一九一・二	一八六・一
輸 出	七〇〇・六	五二二・八	三〇六・二



消費

一、四四三・四

一、四四九・〇

一、三三六・五

### 英領馬來の錫と鐵

これに續く英領馬來もまた鐵鑛百九十四萬噸、鐵合金用のタングステン五百噸乃至一千噸、マンガン鑛三萬噸、稀有なチタニウム含有鐵も一萬一千噸、これに錫五萬乃至八萬噸を産し、アルミニウム原料たるボーキサイト八萬噸以上も急速に増産されてゐる。それに石油、石炭、天然ガス等の燃料も産出されてゐる。

### 英領馬來の軍需鑛産

	十四年	十三年	十二年	九一十三年平均
錫 (噸)	五三、四八九	四三、三七四	七七、一九二	五九、八五一
X 鐵 (千噸)	一、九四〇・六	一、六一六・一	一、五六〇・八	一、四七五・八
石 油 (千軒)	九〇二・四	八一〇・七	六五三・六	五八〇・六
石 炭 (千噸)	四四一・〇	四七八・〇	六二九・〇	四六八・四
X 燐 鐵 (ク)	一七四・三	一五九・七	一六二・六	一五二・一
タングステン鑛 (噸)	五一四・〇	八九一・〇	一、〇九九・〇	一、三七三・〇
天然 ガス (百萬立方米)	一一一・二	一三六・一	一三五・〇	九九・一
X ボーキサイト (千噸)	八四・四	五五・八	一二・六	一三・七
X マンガン鑛 (ク)	三一・四	三二・〇	三二・八	二九・六
チタン鑛 (噸)	一一、〇九八・〇	六、四六二・〇	六、二五二・〇	五、〇九五・〇

註 X印は輸出高のみ。

第一は錫で十五年度は馬來聯邦諸州だけで九ヶ月間に既に五九、八五一噸を生産してゐるから、年換算約八萬噸の記録に達しさうであるが、泰、蘭印等からの輸入鑛と共に新嘉坡のストレーツ・トレーディング・カムパニー、彼南のイースタン・スマルチング・カムパニーによつて精煉され金屬として米英その他に輸出されるのである。

鐵鑛は非聯邦諸州のジョホール、泰國寄りのケランタン、トレンガヌから産出され、マンガン鑛(良質ならず)がまたトレンガヌ及びケランタンから、ジョホールからボーキサイトが産出されしかも何れも日本人の手で殆ど開發されてゐる。

タングステンは、これまでベラク州のクラマツト・プライにシートライト(灰重石)の大鑛床が發見されて昭和十三年まで平均一、三七三噸を産出してゐたが、これが廢坑になつたので十四年は五百噸に落ちた。ウォルフラム鑛がケダ、トレンガヌで増産される見込みがつくまで大きな期待はもたれない。

主たる世界的供給地を印度としてゐる稀有のチタニウムは鐵合金、超硬物切断用のチタニウム炭化物製造に必要であるが、馬來では錫鑛石の精選後の残渣からとれるアマング塊の中に含有されてゐる。十四年の輸出は約一千百噸であつたがアマングの各鑛山在高は三十萬噸にも上つてゐた。

磷礦はベタピア南方の洋上にあるクリスマス島から産し、これまで日本に輸入されてゐた。昨



年度は九ヶ月で二十一萬噸以上を生産した。

石油天然ガスは英領ボルネオのブルネイから産し、七十六萬八千噸に上るが、これはサラワクで精製される。このサラワクは新嘉坡から七百七十二軒にある。

石炭は高濕低カロリーであり、數量は昭和十五年九ヶ月に約六十萬噸に増産されてはゐるが少い。しかし馬來にとつては役立つてゐる。

### ビルマと比律賓

泰の西方に接續するビルマも亦種々の軍需鑛産に富む。石油は年産百萬噸を超え、鐵合金用のタングステンの五千噸前後は支那に次ぐ大産地であり、更にコバルトをも含むニッケル・スパイス三乃至四千噸、モリブデン、アンチモニー、鉛千噸以上を産する。また可溶性合金用の蒼鉛、馬來、泰につゞき豊富な錫六千噸、東亞に不足してゐる鉛鑛七、八萬噸、亞鉛鑛六、七萬噸あり、又銅マツト六乃至八千噸を産出してゐる。また北方のモゴクはルビー等の寶玉類の産地で、裝飾のみならず、金剛砂として研磨用に利用される。

	十四年	十三年	十二年	九—十三年平均	
石	油(百萬ガロン)	二七五・七	二六三・八	二七四・七	二六二・〇
鉛	鑛(噸)	七六、〇〇〇	七八、九〇〇	七六、五〇〇	七三、六八七
タングステン	(噸)	六、四九七	五、三四三	四、九九八	四、四一四
錫	鑛(噸)	七、二四八	六、二〇三	六、六二二	六、二一六

亞鉛選鑛	石(ク)	五九、三四七	六〇、七四四	七三、五五三	七一、七〇六
銅	マツト(ク)	七、九三五	五、九〇〇	七、七五〇	八、二〇〇
ニッケル	・スパイス(ク)	二、八九六	三、〇一五	四、〇二〇	四、〇三二
アンチモニー	鉛(ク)	一、一八〇	一、二〇〇	一、一五〇	一、二六九
鐵	鑛(ク)	二六、〇〇〇	一八、〇五〇	二五、四二六	二三、三六一
蒼	鉛(封度)	……	……	二四六	一一六
モリブデン	……	……	……	……	……

註 錫、タングステンの十四年度はマウチ鑛山の混合含有錫二、一五五噸、タングステン一、八〇七噸を加へて推算す。

第一の石油はビルマ石油會社により採油されてゐるが、ビルマ中部、イラワチ河東岸のエナン

ジョン油田は一昨年機械油井のみにて一億六百萬ガロンを産したが、最近はそのより北方のシンドグ油田が盛んになり一億四千萬ガロンの記録を作つた。この兩油田が八九%以上を占めてゐるが他にエナンジャ、ミンブドウビン、エナマの小油田がある。ビルマ石油はパラピン分多く輕質油分に富んでゐる。

鉛、亞鉛、銅、ニッケル、銀、金、鐵を産する世界有數の鑛山は北シヤン州ナムツウにあるポールドウキン鑛山である。ナムツウ(Namtu)はラングーン港から鐵道を三百八十哩北上するビルマ・ルートのマンガレーから更にラシオに向つて百六十七哩半北上したナムヤオから分岐する狹軌線で五十哩にて達する。英國系の半官半民會社ビルマ・コーポレイションが、之を經營し



てゐるが、この鑛石は重要金屬の混合鑛である。同鑛山は三大鑛脈からなり十四世紀に支那が開發し初めたことに因む。チャイナマン鑛脈は、銀、鉛、亞鉛の世界有數鑛脈であり、その北方にはシヤン鑛脈、南方にメインタ鑛脈が採掘されてゐる。前掲のニッケル・スバイスはニッケル三一%、銅八・六%、コバルト六・七%を、アンチモニー鉛は鉛八二%、アンチモニー一八%、銀一噸に付き三オンスを、銅マツトは鉛四二%、亞鉛二九%、銀一噸に付き七十二オンスを含有してゐる。従つてこれを一昨年度の産額に適用すると、亞鉛七萬九千噸、鉛七萬九千二百六十九噸、銅三千五百八十二噸、ニッケル九百噸、コバルト百九十四噸、アンチモニー二百十二噸といふことになる。今一つの重要鑛産物の錫とタングステンはタボイ、マグイが中心であつて、兩者で錫選鑛五千三百七十七噸、タングステン鑛三千七百十六噸を産出してゐる。その他カレンのマウチ鑛山から錫、タングステンの混合鑛五千五百六十四噸を生産する。

最後に比律賓に於ても、次表は輸出量であるが鐵鑛を初め銅、クロム鑛、或ひは鉛を産出してゐる。

比律賓の軍需鑛石輸出

	十五年	十四年	十三年
鐵(噸)	一、一九一・六	一、一五四・七	九一〇・九
精銅	一三、〇八六	一四、八五三	二四、二〇〇
選銅	六、二一一	五、五六五	一、〇四四

クロム鑛 一九、四〇四 一二五・八 六六・九  
 マンガン鑛 五八、〇三八 三五、九九八 四九、三五八

かくてこれら米英の支配下にある東亞諸國が日、滿、支にとつて重要な戰略的地位にあるのみならず、東亞自給體制の物的基礎として多彩且つ豊かなことが痛感されるのである。

(一六・一〇)

## 第六節 南方諸通貨の新課題

### 一 南方諸通貨の經濟的基礎

#### 現地通貨工作と南方開發金庫

大東亞戰爭が開始されると共に、東亞通貨の問題も全く新しい現實的角度から検討せざるを得なくなつた。上海舊法幣は日支の管理下に立ち、香港弗は流通禁止となる一方、軍票が流通し、一定期間を限り香港弗との引替に應ずることになつたと新聞は報道してゐる。また比律賓に於ては、現地舊通貨と同單位の軍票「ペソ」が發行せられ、その偽裝、受取、拒否等一切の流通妨害を嚴禁してゐる。米弗紙幣の流通も一時的に許容されてゐるらしいことは、軍票單位の現地ペソ



採用政策をも含めて、敵性勢力の完全掃蕩が皇軍の目標であつて、現地東亞民族は寧ろ協同者であり、その経済的・生活的地位は最大限度にまで之を保證せんとしてゐることを裏書きしてゐる。日本の通貨もまた新たな大性格の時代に入つたことを深く感ずる。

弗・磅に掩護せられた舊法幣との通貨戦争の経験は、以上の断片的事實にも明白なやうに、南方經營に於て特に慎重にして活動的な通貨金融工作を用意させる結果になつたが、それらの體系の重要部として早くも「南方開發金庫」が創立せられようとしてゐる。南方開發金庫案要綱によれば、南方地域に於ける資源の開發および利用に必要な資金を供給し、併せて通貨の調整に資する(一項)そのために必要な投資融資をなすのほか、預り金、通貨の交換、爲替の賣買等の業務を行ふ(五項)投資融資によりて受けたる損失を政府は補償することを得る(八項)ことになつてゐる。

そしてこの金庫は本金庫を東京に、必要な地に支金庫および出張所をおくことを得(二項)職員は公務員と見做す(四項)ことになつてゐる。一方、實際の運用に於ては、南方資源開發利用に要する資金は本金庫を通じて専ら供給し、現地現有金融機關たる正金、臺銀、鮮銀、その他は商業金融に専念せしめ、或ひはそれらの支店を支金庫や出張所として活用する關係にあるとも言はれてゐる。その金融力はいふに、資本金一億圓(第一回拂込は十分の一以上)を政府出資し、または政府の許可を受けて増資し得る一方、拂込資本金の十倍を限り債券を發行することが出来る。

のである。これはいよ／＼具體化し來る南方資源開發の根本理念として自由主義的理念に基く企業進出を一切否定し、高度の計畫性ある全國家的開發方式を堅守した努力の現れである。

この場合、通貨工作との關係に於て特に注目されることは、更に臨時軍事費特別會計がこの金庫に貸付を行ひ得るに至つたばかりでなく、その通貨として圓資金を利用せず、現地に於て臨時軍事費特別會計から現地通貨の貸付を仰ぐと傳へられてゐる事である。昭和十五年五月に創立されたドイツの信用金庫は、丁株、諸威進駐の軍隊に通貨を供給するためであつた(ライヒス信用金庫證券)が、其後一部改正せられ、以上の二國の外、白耳義、佛國、ルクセンブルグ、和蘭に於けるドイツ軍隊及び行政官廳に對する通貨供給並に當該地域に於ける支拂及び經濟維持のために信用金庫證券及び貨幣を發行すること、三十億ライヒス馬克に限り國家に貸付金をなし得るといふ一層、廣汎な性質のものになつた。わが南方開發金庫は勿論、以上の如くこれとは異なるものであるが、臨軍會計から現地通貨の貸付を受け、貨幣交換、爲替賣買その他の廣汎な通貨金融活動を行ひ得る點から見ても、將來の占據地經營に對し通貨工作上も頗る重要な前提となるであらうことは想像に難くない。

#### 圓基準の東亞通貨體系への發足

だが、その内容は未だ具體的には不明であるから、これ以上言及することは保留して、軍票が發行せられるにせよ、やがて現地民族政權が成立し、或ひは著しく立遅れた地域に於ける日本の



民政機構が生成し來るにつれて、新發券銀行乃至機關が建設される場合にせよ、何れにしても問題になる通貨制度の基礎的前提となる諸條件を概観しておかう。

大東亞戰爭は、東亞の諸通貨制度を根本から變化させようとしてゐるが、早くも日本は米英貨基準を一擲し、日本「圓」を中心とする通貨體系建設の決意を明かにした。本年一月一日を以て實施せられた新爲替政策は種々の點で劃期的な轉換であつた。(一)英米貨を基準とし裁定する方式を廢止し、各國通貨の本邦通貨に對する換算率を直接に決定し、相場表に圓貨をもつて行ふこと、(二)相場は賣買の區別をなさず一本建とし爲替銀行には一定の手數料徴收を認め、その相場の決定は大藏大臣がこれを行ふこと(従つて賣買による自然形成に委ねてゐた自由主義的な爲替相場は一掃されて公定制となり各國間の金融、通貨關係を逆に此の基準に従つて調整するなど全く管理制化せること、従つて爲替相場ではなく爲替換算率となり、爲替制度上、本質的な改革が加へられたのである)(三)敵性通貨の公定相場はこれを建てず等の爲替相場公定措置要綱が決定せられた。そして次表のやうな電信相場が公表せられるに至つた。

通貨の相場		公定相場
印度支那貨	一〇〇ピアストル	九七・六〇
タイ貨	一〇〇バート	一五五・七〇
ドイッ國貨	一〇〇マーク	一七〇・五〇
イタリヤ國貨	一〇〇リラ	二二・三五

右表には佛印のピアストル貨、泰國のバート貨を除く外は(澳門、チモール島はエスクード即ち葡國通貨)、東亞圏の諸通貨は未だこの公定爲替率表に登場してゐないが、東亞圏内には次のやうな通貨が流通してゐる。

國名	通貨	百萬元位	年月	爲替相場	換算
蘭	印(ギルダー)	二三・二〇	一六・五	四三%	五三〇・〇
泰	國(バート)	二三・九〇	一六・二	一五九%	三八〇・〇
比	律(實(ペソ))	一六・九・五	一五・二二	二一三	三六一・〇
佛	印(ピアストル)	二九〇・〇	一五・二二	九六%	二八〇・〇
馬	來(海峡ドル)	一六八・六	一五・二二	一五九%	二六八・五
香	港(香港ドル)	二六一・八	一六・一〇	一〇七%	二八二・一
同政府	紙幣	六・五	ク	ク	七・〇



計  
 ビルマ(ルービー) 一一〇・三 一五・一一 七七<sup>1/2</sup> 一四二・〇  
 二、二五〇・六

註 爲替相場は各年月の正金買値、佛印は、印度支那銀行副支配人アルノー氏が、ロゼニオン紙に發表せられし財務長官クーザン氏の發行高四億五千萬ピアストルを訂正せるものによる。ビルマは印度準備銀行勘定中のビルマの部分による。

南方通貨の出超の基礎

ところで、新たに東亞共榮圏に参加しつゝある南方地域に於て新通貨制度の建設は諸種の有利な條件を具備してゐる。先づ支那大陸と異り、何れも政治的統一が地域的に容易であり、且つ米英蘭的政治勢力が清算されるれば、自立してゐる泰、佛印は勿論、他の占據地域に於ても、ここに自ら現地民族の政治的結合が現出し、何れにしても最も自然な形に於て對日協力が行はれて来る。しかもその通貨既發行高は全地域を含めて前述の如く(香港を除く)約二十億圓に過ぎない。

次に入超國支那とは全く異り、何れも夥しい出超國であるから、管理通貨制度には何と言つても有利である。即ち蘭印出超十億四百萬圓、馬來約五億三千百萬圓、ビルマ三億三千三百萬圓、泰、佛印何れも一億圓を超え、比律賓も八千五百萬圓の出超であつた。そして六國合計輸出六十億二千四百萬圓、輸入三十八億四千六百萬圓、出超二十一億七千七百八百萬圓に上るのである。

	百萬單位		百萬圓	
	輸出	輸入	輸出	輸入
蘭 印(ギルダー)	八七・五	四四・三	四三・七	二、〇一〇・〇
馬 來(海峽ドル)	一、二六・二	八三〇・三	一、七二・六	二、〇〇九・九
ビ ル マ(ルービー)	二五・二	二八〇・〇	八・八三	三、四三・〇
比 律 賓(ペソ)	三〇九・六	二六九・七	二・三	六五九・四
佛 印(ピアストル)	三九・四	二二・二	六・九	三三・三
泰 國(バート)	二〇四・四	二九・六	七・八	三三・二

註 泰(十三年)、佛印(十四年)を除き何れも十五年度分、ピアストルはフランより換算

けれども、當面的には、これまで米英蘭に緊縛され、それへの依存を強要されてゐたのであるから、今それを再編自立せしめるまでには、諸種の困難が生起するものと思はれる。比律賓は輸出入ともに米國へ釘付にされてゐたし、ビルマは對印關係を通じ英國に利用されてゐた。泰國は英米依存が少いやうに見えるが、新嘉坡、彼南への輸出入を通じて米英に結合されてゐたから、歐米との貿易杜絶はその一半の貿易再編を必要としよう。しかしそれに伴ふ影響は東亞相互貿易への轉換によつて埋合される部分も多いし、一般に物資的基礎の豊富なことは、正に誤りない事態であるから、金融通貨面に對する影響も、入超國とは異り復興や再編を助成することは言ふまでもないであらう。



	米英	英自治領	歐洲ラ米	計
蘭印	三九.五	八.七二	一八.七九	五五.八六
馬來	一七.〇九	七.九八	一五.三六	二八.三三
比律賓	八四.七	五.四	二.三一	八七.八
ビルマ	二四.〇	六.五六(印度)	一.一三	八一.一
佛印	一五.七	七.五(ク)	三.二二(佛)	六.七九
泰國	一六.五	六.〇七	一.〇三	二六.三
支那	二九.八	一三.三	四.九五	四七.六
支那(輸出)	三.八	六.五	二.九	一三.二
支那(輸入)	二.六	六.五	二.九	一三.二

註 ビルマ佛印(十四年)、泰(十三年)を除き十五年度分。

従つて東亞諸國の對外貿易を再編成する方式や能力如何によつてこの物資及び生産力の最大効果の利用が同時に新たな通貨制度の基礎づけともなるのである。この場合、石油、鐵礦、石炭、ボーキサイト、銅礦、クロム礦、マンガン礦、ニッケル礦等の如き、東亞重工業に緊急なものは、勿論、東亞的轉換が求められるばかりか、一層の開発が必要であり、米の如き食糧は東亞的相互補給にとつて歐米的歪曲が切斷されることは、少しも問題ではない。しかし極端に過剰にな

る物資は、東亞的内需への振向けや新用途の工夫、一定のストック政策に努力するばかりでなく、一定の生産調節、それに伴ふ事業整理、失業勞力の他の緊急産業乃至不足物資産業への大規模の轉換を最大限に成功的に遂行しなければ、これまでの物的基礎を通貨金融活動に效果的に十分に利用することは出来ないであらう。

この種の過剰物資としては錫があるが、最も著しいものは農作物關係であらう。ゴム、砂糖、コーヒー、茶、胡椒、コブラ、パーム油等の如きは、何れにしても、そのまゝの數量に於て過剰となるのではなく、一部は生活確保、それによる勞力の動員に役立つであらうが、それにして生産調整は必至となるであらう。先づ錫は十五年度推定世界生産乃至輸出合計二十四萬噸と言はれるが、この中東亞は十六萬七千四百噸、馬來再輸出分を十四年並に四萬二千噸としても十二萬五千噸の輸出力を有つてゐるが、これに對し消費は米國五萬六千噸(その輸入先を前年並の比率とす)英國が十四年並の二萬七千噸とすれば、米英合計八萬四千噸、即ち東亞輸出の七割近くがこれらに向けられたと見られる。

また、ゴムは十五年度世界輸出実績は百四十萬噸を超えたが、その中東亞は約百二十六萬五千噸と推定される。これに對し世界消費は百五萬噸であるが、米國は八十二萬三千三百噸、東亞から前年並とすれば六十八萬二千五百噸、英國十五萬噸、加奈陀四萬五千八百噸(英加を八割とすれば約十六萬噸)合計約百二萬噸、その中東亞からは八十四萬噸を超えるがこれは東亞輸出の同



じく七割が米英向であつたことになる。従つて東亞の内需増加、計畫的ストックを行ふとしても、可成りの生産制限は断行されねばならない。

更に農作物中の砂糖は、ジャバ糖輸出(十四年)百三十七萬六千噸、その中歐洲向約五十三萬噸、印度、西南アジア、濠洲五十六萬噸合計百九萬噸であり、比律賓約八十七萬五千噸、その大部分は米國向であつたから、少くとも二百萬噸近くを措置することになる。しかしジャバ糖は十五年度には早くも印度及び歐洲の關係から八十一萬五千噸に減少し、従つて特に對策を要するものは五十萬噸足らずになつてゐたから、東亞内需關係を考慮して、生産費高く、且つ棉花適作地たる比律賓島の生産分の一部棉作への轉換が豫想される。しかし何れにしても南方地域の通貨と物資との關係は滿支とは異なる有利な事情にあることは否定し難い。

### 海外支拂ひの東亞的留保

第三に、全體としての國際收支に於て、これまでの海外支拂を停止すれば、商品出超分その他の受取分は東亞的に内部留保せられることになるから、通貨的基礎を有力ならしめることは言ふまでもない。植民地化された南方地域は、例へば蘭印に於て、商品出超九億五千三百萬圓も、利子配當、事業収益、海外役員俸給、外人恩給の支拂に四億三百萬圓を持去られ、投下資本償還四億四千三百萬圓に充當され、或ひは華僑送金三千六七百萬圓に利用されてゐた。佛印は出超一億六千百萬圓の中から利子配當、事業収益、恩給俸給の海外支拂ひ一億一千二百萬圓、比律賓は

同じく出超の大部分四千九百萬圓を支拂つてゐた、その上、決濟のために蘭印一千五百萬圓、佛印一千二百萬圓、比律賓二千三百萬圓以上の金を輸出してゐた。これらが今や、出超その他受取分を留保しうる限りに於て、そのまゝ東亞的に利用せられ得るのである。

	蘭印	佛印	泰國	比律賓
商品出超	(十) 九五三・二	(十) 一六一・六	(十) 一九・九	(十) 五四・〇
利子配當、事業収益	(二) 四〇三・三	(二) 一一二・一	不詳	(二) 四九・二
海外俸給、恩給	—	(十) 六一・三	〃	不詳
純投資増	(二) 四四三・八	—	〃	〃
資本純償還	(二) 三六・六	(二) 一四・八	(二) 五〇・〇	〃
華僑送金	(二) 八二・九	(二) 五・〇	不詳	〃
旅行メツカ巡禮	(十) 一五・四	(十) 一一・二	—	(十) 二二・六
金	—	(十) 二四・五	(二) 二四・三	不詳
政府收支	—	(二) 一〇六・九	不詳	〃
其他	—	—	—	〃
合計	二、〇五三・一	五一六・一	〃	〃

註 比律賓(九年)を除き何れも十二年度分の正金建値による換算、佛印の華僑送金は一般送金超過、泰の華僑送金三千乃至三千七百萬バートによる概數

更に南方地域に對する各國投資は、次表推定の如く百六十億圓に上るものと思はれるが、この中少くとも米英蘭合計百五億圓の大部分は敵性資産として管理を必要とするであらう。この事は



それを運営することによつて生ずる事業収益、或ひは敵性米英蘭人に代つて經營することに伴ふ東亞諸民族の收入、更に財政補強等として役立つ。従つて南方地域に於ける通貨工作、乃至新發券銀行の建設に大いに資益するものと思はれる。勿論、敵性發券銀行乃至諸金融機關の管理は預金、貸付、資産の整理の同時的進展を促すであらうが、一般的に言つて各國投資の内部保留と活用とは、嘗て英米蘭による東亞の一方的利用であつたものを、今は東亞圈經濟建設の廣汎な前提とすることが出来るのである。

各國の南方投資は、一貫した調査はなく、諸種の資料から不完全に推定する外はない。第一は和蘭であるが、殆ど蘭印に集中し、昭和四年の統計によればジャバの砂糖、ゴム、コーヒー、規那、スマトラのゴム、煙草、茶、椰子等に投資し、全外國投資の四分の三に上り、他方鑛業は石油を第一とし錫、金、銀、石炭等に於て六、七億圓に達し、全鑛業投資の六割を占める。この外に蘭印工業化の波に掉さした金屬、織物、化學工業投資は約六億圓に及ぶ。次は英國であつて、英領馬來の錫、ゴム等十八億圓を超える。蘭印投資はゴム(全蘭印の四割)、茶、コーヒー五億六千萬圓、石油(第二位)は二億四千八百萬圓に上る。石油に於ては米國の競争に對し和蘭資本と妥協しバターフェ石油會社を作り、その四割を出資して活躍してゐる。また泰國に於ては錫に約十一億九千萬圓、チーク材事業に三億五千七百萬圓を投資してゐる。

佛國は言ふまでもなく佛印を中心とし、所謂ホンゲイ炭、東京ラオスの錫、タングステン、亞

鉛等への投資二億五千萬圓、交址支那のゴムや米作、東京、安南の茶やコーヒー投資一億五千萬圓、産業道路、港灣施設三億五千萬圓等が行はれてゐるが、その他蘭印農業への投資が二億二千萬圓ある。

米國は比律賓が主で七億七百萬圓(圓は二七・二米弗で換算)その中昭和十四年の調査で砂糖、コ、ア、椰子、纖維工業、木材、鑛業に約七億圓を投下してゐる。その他に蘭印石油への投資(スタンダード系のネーデルランシエ・コロニアル社)は二億二千萬圓に達してゐる。

日本は十二年調査で農業一億七千萬圓、鑛業四千萬圓、林業千八百萬圓、水産一千二百萬圓である。地域的には比律賓の二億圓(ダバオに一億圓)が最大である。ゴム(八千萬圓)麻(六千萬圓)次いで椰子栽培である。鑛業ではマレーのマンガン鑛、水鉛、錫、ボーキサイト、英領ボルネオの石油、ジャバの銅、セレベスの雲母、比律賓のマンガン、佛印の鐵があるが、殊にマレーの鐵水鉛は邦人の獨占事業である。林業は比律賓、ボルネオのラワン材を主とし、更に南洋水産業は全くの邦人獨擅場であつて六千人が従事し、年一千八百萬圓の産額をあげてゐると言はれる。

而して華僑經濟のそれも含めて、かうした巨大な産業的再編成を指導すべき地位に、日本は益々前進しつゝあるのである。

各國の南方投資推定(百萬圓)

和蘭 英國 華僑 佛國 米國 日本 獨逸 合計 %



蘭印	五、三三〇	六三六	一、三二七	三九七	三〇	三	七	七、八七	四九・三
馬來	—	一、八三〇	九六〇	—	六	七	—	三、〇〇六	一八・七四
佛印	—	—	三〇五・〇	一、〇三〇	—	?	—	一、三三六	八・三三
比律賓	—	一、八〇	四一七	—	七	二〇〇	—	一、三六七	八・二七
泰	—	一、五〇〇	九九一	?	?	?	—	三、八四九・一	一五・三三
合計	五、三三〇	四、〇九六	三、九三〇・五	一、二六〇・七	一、〇三三	三三三	七〇	一六、〇三三・八	一〇〇・〇
%	三三・三	二五・三	二四・五	七・六	六・三	二・〇	〇・四	一〇〇・〇	

註 昭和十三、四兩年平均正金建値より蘭印(五〇盾)馬來(二〇〇圓)比律賓(二七・二米弗)佛印(一〇〇圓)泰(一五五・八圓強)にて換算、佛の對佛印投資は七五〇百萬圓、和蘭投資は七十億圓とも言はれる。華僑投資は福田省三著「華僑經濟論」より

以上の如く南方諸通貨は大東亞戦争と共に、一大歴史的變革を遂げんとしてゐるが、願ればこれまでには實に數奇なる運命の經過に於て、今通貨もまた民族的開放と東亞的統一との道程を辿り來つたものであることが知られる。近くは第二次歐洲大戰につれて馬克の擡頭、磅の敗退と封鎖化、金米弗の苦惱と金非貨幣化を招來し、その波動は既に東亞地域における通貨機構をも動搖せしめつゝあつた。(一七・二)

## 二 南方諸通貨の民族化と統一 磅の後退と米弗への轉換

先づ第一に起つた事實は磅からの逃避と米弗へのリンクであつた。英本國に於ける幾度かの爲替管理強化は南太平洋の英領にも及んだ。新嘉坡では十四年九月十三日國防(財政)條令が發布され爲替並に貿易管理が開始されたが、十五年二月一日はこれを廢止し、新たに國防(財政)條令を公布し、金、金融、爲替の管理は著しく強化せられた。渣打銀行、滙豐銀行、有利銀行、東方銀行、橫濱正金(但し圓爲替のみ)を指定銀行として爲替管理に乘出し、通貨輸出許可制(百海峽弗又は相當外貨以下の旅費提携は除外)、外貨(米弗、カナダ弗、アルゼンチン・ペソ、瑞典クローネ、ベルガ、諾威クローネ、ジャバ盾、フランス法、フリッツピン・ペソ、和蘭ギルダー、西貢弗)の手持禁止と指定銀行への讓渡、海峽弗貨輸出爲替取組禁止、資本逃避となるべき代金未回収商品輸出の沒收、外貨證券の移轉禁止と強制買上制、金、外國爲替の強制買上制、内國勘定の外國在住者への振替支拂制限等精細に互つてゐるが、興味あることは華商を中心とする兩替商を許可制とし、海峽貨五千弗相當以内の外貨手持は許されるが、それ以上は銀行への賣却を義務づけられ、處分は銀行に限られる外に一旅行者につき百弗相當額を賣却し得るに過ぎない。かくてアーライスの批評してゐるやうに海峽植民地(馬來諸州、英領ボルネオ、サラワクも同様の管理措置が行はれる)に於ける爲替管理は磅忌避——米弗への轉換それが延びてロンドン經由取引から、對米直接取引へと南太平洋を移動させ始めたのである。そして一九三九年十一月六日以降英帝國以外の地に仕向けられる輸出品は(五百弗以下除外)は全額外貨を以て取組みたることの證明



せられれば許可せずとし、例外として米國向ゴム及錫の取引に限りロンドン宛英貨拂の從來の商習慣はこれを許可することになつてゐたが、これも三月二日の英本國の第二次管理強化によつて米弗によることに改正せられるや、磅さへも米弗へ轉換したと言へるやうな状態を現出した。今日それは再び廢止されたが、それも磅の封鎖と米英支拂協定に基くもので磅の復興を物語るものでは勿論ない。

それは兎に角としてシンガポールの爲替封鎖はマニラ、香港への資金逃避と貿易ルートの轉換を惹起したが、それ故に香港に於てはシンガポールと同一の管理方式を適用することが出来なかつた。爲替、金融上の利益が全く失はれるからである。かくて香港は「磅領域外」になつた。一九三九年九月七日爲替統制規則が公布されたが、それによつて外國爲替取扱指定銀行(香上、渣打、有利以上英、花旗、大通米、中國、交通、東亞支那、臺灣、橫濱正金日本、印度支那佛、和蘭、蘭印商業和蘭、後に華僑、廣東兩行追加)が設けられ、外貨取引制限が加へられるに至つてゐる。ところで外貨資金(米弗、カナダ弗、ベルガ、瑞典フラン、フランス法、ギルダ、アルゼンチン・ペソ、瑞典クローネ、挪威クローネ)及び外貨證券に對する制限に於ては英人に限り適用せられ、外國人所有のものは自由であり、香港弗貨銀行券の輸出も自由であり、爲替調整に必要な指定銀行間の爲替賣買、海外本支店並に取引先との取引各種の出合の執行、海外向出合の注文は自由であつた。しかし磅の崩落、政治的不安、通貨封鎖の危険等は結局、マニラ、

上海への華商資金の逃避となり、米弗への轉換を完成して行つた。そしてそれがまた貿易の對米集中と同時的であることも構造的變化の深刻さを暗示するものがある。

日本が此の間に磅リンクから米弗リンクへ轉換したことは、北中支爲替裁定に際し弗を介したと、磅、弗兩建の困難の中に對磅領域への輸出入調整(輸出統制)或ひは米弗建が考へられ或は行はれたこと、貿易、特に輸入に於て對米貿易が比率を増加して行くこと等は既に周知の事實である。その他フリッピン・ペソは勿論、米弗に結合された貨幣であつた。

#### 蘭印の新爲替管理と日本國の地位

なほ残る問題は蘭領東印度のギルダ貨であるが、これとても少しも例外であり得なかつた。五月二十二日蘭印新爲替管理法が實施されたが、同時に英佛との通貨協定に加入し、磅(七盾六〇仙)、弗(一八七盾五〇仙)の二本建に移り、通貨協定外の諸國には米弗によらしめることになつた。勿論、蘭印は英國を同盟國として、七月十二日の蘭印國民參議會に於けるファン・モーク經濟長官の演説の如く「六月十四日の通貨協定は英蘭印相互間の貿易を促進するのみならず、スターリングブロックへの輸出増大に伴ひ、同ブロック内に生ずる我が磅バランスを以て同盟國を援助することを得しめ、又和蘭商船隊を同盟國の用に供することを容易ならしめる効果がある」と言ひ、或ひは自由磅取引を禁止して、磅とギルダとの連帶を強調してゐるが、それにも拘らず、弗磅二本建に移行し、また次のやうに米弗建支拂區域を擴大しつゝあることは、實際貿易に



現れた對米關係の擴大の事實(他方對日關係の増進)と共に蘭印の東方轉換を裏書きしてゐることは蔽ひ難い。

蘭印輸出代金の支拂方法

仕向地	信用状	支拂方法
海峽植民地	信用状	蘭印ギルダ
佛領印度支那	信用状	米弗
比律賓	信用状	米弗又はペソ
支那(香港を含む)	信用状	米弗
日本	信用状	圓(又は米弗)
イタリヤ	現金支拂渡し	米弗
北米、加奈陀、南米	信用状	米弗
地中海諸國其他歐洲	現金支拂渡し	米弗
英、佛、南阿	支拂渡し	磅スターリング
歐洲、新西蘭	信用状	磅スターリング又は滙洲磅
英領印度	支拂渡し	英磅又はルーピー
パレスチナ、シリア、埃及、イラーク	信用状	英磅スターリング

以上は蘭印の爲替管理のみであるが、一般に東亞生活圏が磅から離脱し、殆ど米弗へ轉換した事實の争はれない反映を見るのである。

ところで、南方地域に於て興味あることは、日本圓の比重の大きいことである。前述の蘭印フアン・モーク經濟長官は「歐洲向け輸出の減少と蘭印の生産餘力を考へれば、米國其他の國(例へば日本)の買付増進に應じ得ることは疑ひがないのみならず、吾々が從來和蘭から輸入し得たものは、今後主として日本に仰がなければならぬ」と言つてゐるが、それは單なる對日ゼスチニアではない。事實、商習慣として南方地域に於て圓決済が存続して來たことでもそれが察せられる。海峽植民地に於てさへ正金が圓爲替の故に指定銀行化されてゐるのも亦同様の事實であらう。然るに弗への轉換の成行は輸入元からも一部邦商側からも米弗への轉換が要求されるのを耳にするに至つた。周知の如く經濟的に優越せる先進國の通貨的活動は自國通貨を國際通貨化せしめることを伴つてゐたし、それによつて各種の經濟領域を實質上、自國領經濟へ包括して來た觀があつた。この意味に於て圓取引の存続は重大な意味を有つたばかりでなく、若し米弗へ轉換したとしたら、爲替業務は對日決済に於てさへ他國爲替銀行に向つて集中されてしまふ危惧が存在する。この點、東亞生活圏の新たな通貨的基礎の方向として一考を要する。單純な外貨獲得主義は外貨獲得にさへならないことも忘れてはならない。六月十七、八日の英領馬來爲替管理強化は一方に於て磅ブロック以外の土地に對する「外國人勘定」よりの振替を禁止して、磅及び同系通貨を封鎖せざるを得ない事態でありながら、猶も根強く米國、スイス、支拂協定國(アルゼンチン、瑞典)を除くその他の諸國(日本は圓建と認めらる)よりの輸入は當該國の通貨又は磅で決済する



ことを要求してゐる。貿易外(送金爲替等)の支拂ひに至つては日本をも含むその他の諸國に對しては海峽弗、又は磅貨に據らしめようとしてゐるのである。

しかし前述の如き米弗への轉換、或ひはそれを通じての金との結合で以てして問題が解決されたのではなかつた。アメリカ側から起つた政治的、經濟的意味を有つ各種輸出入制限乃至禁止等は米弗をして完全且つ自由な商品化を遂げ得ざらしめてゐるのだ。アメリカの實質的參戰ともなれば、米弗も亦國際的一般等價たる性質を殆ど失ふことになり、政治的に規正されたる協定貿易が個々の地域、個々の國の間に結成され、輻輳することになるであらうし、それと共に各國の通貨は個々にそれらの協定によつて價值づけられ、も早や「自由」通貨たり得なくなるであらう。米弗への轉換によつて一應の安定を求めようとした東亞諸國地域の貨幣はかくして直ちにより根本的な課題——世界自由貿易を前提にしてゐた世界經濟體系の終焉と、世界計畫的貿易に對する自國體系の相應、有力なる一大單位への結合の必要等に當面してゐるものと思はれる。この事は貿易面に於て對米貿易への過度の集中と並んで、東亞經濟圈内諸國間の貿易増進が、歐洲市場との交流杜絶、次には對米貿易の不安定を通じて、新傾向として勢ひ現出され來つてゐることでも明白であらう。日本貿易の急變もまたかゝる事例の重大なる一つである。

#### 南方諸通貨の民族運動

東亞に於ける新なる通貨現象、従つて今日の機構の下では經濟體系を示す根本現象の今一つ興

味ある事實は、從屬國或ひは植民地の諸通貨のヨーロッパの支配的諸國からの遠心的傾向、本質的には獨立的、自立的傾向の出現である。前述した事によつても一見せられる通り、英佛蘭の敗退は國際的な爲替管理強化と共に植民地乃至從屬國通貨を本國から遠心的方向に分離せしめつゝある。例へば蘭印は本國へ從屬的に操縦されてゐた通貨金融體系を次第に蘭印自體を中心に再建設せざるを得なくなつた。これは勿論和蘭人の利己的な欲求から起りその支配の維持の努力ではあり、未だ通貨の民族化ではないが、しかも尙その新傾向の發露とそれが今後發展して行く可能性を客觀的に看取し得る。蘭印ギルダーと並んで佛領印度支那も亦實際的にピヤスター、即ち十フランではなくピヤスター化或ひはサイゴン弗化されざるを得ないであらう。泰國への磅支配は勿論脆弱化するであらうし、英領マレー、香港も亦、かゝる環境の下にローカライズされざるを得ないであらう。この場合、磅通貨體系崩壞の具體的形相は特に興味がある。自由磅は廢止され、磅は殆ど封鎖されてしまつたが、この事は英帝國諸自治領その他屬領と外國との貿易決濟に於て、外國は磅受取りを忌避し、更にたとひ磅系諸通貨決濟によるとしても、ロンドン決濟を回避し、自治領との個々の支拂協定、通貨協定の傾向が發生する。それは同時に貿易自體のベーター制化と並行的に進展する。磅の崩落或は磅の封鎖は日本にとつて例へば南阿聯邦その他への市場輸出が不利になつたに對し、印度との貿易は消極的な意味に於ては、棉花、綿布のベーター制の存在によつて一種の安定があつた等。若し英本土がドイツ軍の占據地化するなれば、いよゝゝ決定的



に諸自治領や植民地の分離と自立傾向は急速に進展するであらうと思はれる。最近濠洲の對日公使交換はこれと同一の政治傾向である。そして最後に我々が苦心した支那に於ける通貨工作も、自由なる通貨及び貿易市場の残存を前提としてゐた立場から、急速にこの新たな世界經濟的條件の發生に伴ふ角度へ移行して再検討すべき地位にあることが考へられる。

ところで通貨の「民族化」は實に重大な歴史的内容を有つてゐるのだ。例へば佛領印度支那は十九世紀の前半まで貨幣の實際單位は貫、それが亞鉛錢六百枚、銅錢百枚（以上小單位は厘錢サベーク）に相當し、これらの穴を通して一束、十束と呼ばれる一方、兩建ての大、小判の金銀貨が流通してゐたし、泰國では十九世紀までは圓筒形の金銀條の環が通貨として使用され、ルービに當るタムルン以下の銀貨があり、次いで銀本位に統一されてからも、フアン以下の小單位には子安貝が利用されてゐる有様であつた。それに次ぐ時代はポルトガル、スペインの世界貿易支配を象徴するスペイン弗（Carolus Dollar）、メキシコ弗の時期であつて、それに倣つて各種の弗銀貨が發生した。日本圓銀、アメリカ貿易弗（兩者とも一時は海峽植民地の無制限法貨ともなつたことがあるが、アメリカの鑄造禁止、日本の金本位への移行によつて廢貨となつた）香港弗が生れた。南方諸地域に於ても蘭印は長い通貨混亂の後一八五四年五月、和蘭ギルダー銀貨を單位とすることになり、佛領印度支那は他國の銀弗利用から一八八五年フランス・ピヤストル銀貨單位に決定し、一八九八年泰國はバート銀貨單位となつた。又、一九〇二年比律賓も新貨幣法の制

定によりフリッツピン・ペソ銀貨に統一され、一九〇三年六月には海峽植民地鑄貨條令によつて海峽弗銀貨が成立した。これらは或る意味で一元化する土着通貨の成立といふ側面を有つてゐたが、歐米諸國の金本位への移行、紙幣の發達等と共に植民地乃至從屬國に對する本國の支配は金爲替本位を案出せしむるに至つた。金爲替本位は周知の如く金貨乃至金の流通準備すらも必要とせず、金本位國の通貨と一定の比率に於て結合することによつて可能であつた。従つて本位鑄貨としては何れも銀貨が存在してゐるに過ぎなかつた。かくて銀貨の存在は長く東亞諸民族の被支配の象徴ともなつて來たが、しかし今や銀は勿論、金さへも貨幣性を喪失しつゝあり、かくて本來の經濟活動や資源がそのまゝ、發言權を有つに至りつゝある以上、久しい隸屬の羈絆を脱して今始めて力強い諸民族復興の可能性が與へられつゝあるものとも考へられるのである。

ところで先の金爲替本位であるが、その發展を見ると先づ一八七七年蘭印ギルダーは和蘭のギルダー金貨を本位貨としたが、市場流通はなかつた。一九一二年財政獨立と共に貨幣制度の形式的獨立はあつたが、それとても飽くまで實質的には和蘭本國の支配を體現してゐた。一九〇二年泰國のバート銀貨は金價格を與へられ一英鎊十七バートと規定されて金爲替を本位とし、後に一九〇八年金本位法を發布し一英鎊十三バートとしたが、本來の金本位ではなく、後に金本位を停止せる英國に對しては磅爲替本位として追隨することによつて實質を露出した。比律賓は一九〇三年金爲替本位となり、一九二二年金本位條例を實施したが、アメリカと共に一九三三年金本位



を停止し、そのまゝ今日に及んでゐる。佛印は一九三〇年になつて漸く金塊本位を形式的に形成したが、それも實質はフランス法爲替本位に過ぎなかつた。海峽植民地は一九〇六年海峽弗を金價値二志四片とし(英の七〇ソヴァレン金貨に對し六〇海峽弗)金爲替本位制になつた。

こゝで注目すべきは金爲替本位が可能ならぬには周知の如くその國が輸出超過國であることが必要であつたが、事實南方の諸國は、殊に今日大きな出超國であり、また金準備を要しないことによつてその金を本國へ集中しその利用に任する一方、商品貿易のバランスは本國の通貨價値の支持を助けたのである。だが、これらは東亞諸國にとつては實にはてしない隷屬の通貨的機構であつたのである。

こゝに通貨の民族運動が早くから起つてゐた。例へば一九二五年八月エドワード、ヒルトン、ヤングを委員長とする印度貨幣財政委員會は印度貨幣法の改正を目的として成立したものであるが、英人委員會は金爲替本位と高爲替の一志六片を主張し、印度人委員は金本位と一志四片を固執し、その論争の中に他の印度人委員は別の案を提出したが、それは金塊本位、ソヴァレン(英磅金貨)の法貨廢止、ルービーの比率の一志六片、インド帝國銀行の外にインド中央銀行によるインドの自律的な通貨金融財政統制を要求した。インドのルービー貨は今日も英本國側の高爲替政策とインド側の低爲替要求(輸出促進、輸入統制)との間に苦んでゐる。一九二七年三月の貨幣法は結局、ソヴァレン金貨の法貨制は廢止し金の買上、拂下の義務制を規定したが、一ルービー

は一志六片に維持されることになつた。そして一九三一年金本位放棄後は實質上磅爲替制となり、一九三四年二月前述の中央銀行要求はインド準備銀行の成立となり、英蘭銀行同様の發行部銀行部の二部制を有つに至つたが、最近の紙幣發行高二十五億四千五百六十萬ルービーに對し、その準備は磅證券が四割五分の十一億三千五百萬ルービーを占める一方、在印金準備は一六%餘に過ぎない。残りはルービー銀貨と印度政廳證券であり、政治に於けるインドの苦惱は依然として通貨の面にも同じ形相を刻印づけるのである。いま一つ興味ある史實を南方にとると、一九二七年泰國は通貨法を公布し、ベイト銀貨及び紙幣を無制限法貨として一磅につき一ベイトの基準を以てロンドン支拂ひを行つたが英國の金本位停止と共に早くも紐育を支拂場所として一金米弗二・二ニベイト乃至二・三ベイトとしてゐた。然るにその翌年金本位を停止し、再び英磅スターリングに連繫することになつた。この年急進人民黨は所謂ルアン・ブラディット經濟改革案を提出し、英磅貨との連繫を排し、英國の財政金融的支配から獨立するために國立銀行の設立を主張したところ當時の親英的なブラザーマン政府はその保有にかゝる米弗、佛フラン資金までも急遽磅資金に替へ、金弗や金法が國立銀行の準備金に利用されるのを先手を打つて防止したので、當時「金を紙に換へた」との反政府の聲が波及したのであつた。しかし以上は先驅的現象に過ぎない。今は前述の如く大規模に東亞諸通貨が自立化し、民族化せざるを得ない時代に入つたのだ。日本は何等のクレヂットを與へられることなく三ヶ年間の戰爭を賄ひ、諸種の困難の中に日本圓



擁護のために戦つて来たばかりか、滿洲、北支、中南支にわたる圓系通貨の維持の爲にも戦つて来た。法幣は諸種の困難の中に暴落しつゝ、頑強な抵抗を示して来たが、これを支持して来た磅スターリングは次第に後退し、金に重武装された米幣が法幣を積極的に救援することが現實より遠いとすれば法幣も亦遂に自己へ歸らねばならぬ。通貨戦は今後も激甚と複雑を極めようが、大觀して東亞の諸通貨は今やそれぞれ新たな轉換點に立ち、新たに東亞的通貨體系の基礎を用意しつゝあるかの如く見える。而して通貨に於ける自國並に東亞への復歸とは勿論、分裂せる東亞諸經濟地域の自立と東亞を單位とする共同の大經濟圏結成と同義語なのである。日本圓は高い性格と力の上に領導的役割を擔當する用意がなければならぬ。

### 通貨「民族化」の經濟的基礎

ところで南方諸民族經濟は通貨の「民族化」を完成する基礎を有つてあらうか。金爲替本位制が維持されて来たことによつても知られる通り、この點に於てこれらの地域が豊富な資源による出超國であり、長年に亘つて投下された資本が土着民族に對して低い生活水準を強制したまゝ、その結實を收獲しつゝあるのである。従つて金準備金保有に於てジャバ銀行が一億弗、その他の國の保有を合計しても僅かであり、また金生産に於て濠洲、新西蘭まで合計しても七萬二千五百四十九疋(一九三七年)約八千六百六十餘萬弗であり、それを除けば比律賓の一九三七年約二萬七百五十三疋、一九三八年の二萬八千三百八十六疋の産出が大部分を占め一九三七年度に蘭印一千七百三

十疋、馬來千六十八疋、サラワク五百九十八疋、佛印三百十二疋に止り合計二萬四千四百六十一疋即ち二千七百五十二萬五千弗であるとしても、通貨を基礎づけこれを管理し得る力は此等の地域に存在するのである。一例として商品貿易に於ける連年の出超を見ると、五ヶ年平均出超年額十億四千萬圓に及び、日滿支の五ヶ年平均入超年額八億八千九百餘萬圓を補つて餘りあることも興味が深い。

	一九三九年	一九三八年	一九三七年	一九三六年	一九三五年	一九三四年
南洋						
蘭領東印度	(+) 五九・二	(+) 三六・二	(+) 八七・二	(+) 五三・八	(+) 四三・一	(+) 五三・四
馬來	(+) 二七・五	(+) 四八・三	(+) 三三・六	(+) 三〇・七	(+) 一九・五	(+) 一四・五
佛領印度支那	(+) 二〇・九	(+) 九四・二	(+) 四四・四	(+) 二五・八	(+) 六七・四	(+) 三六・八
比律賓	(-) 五・九	(+) 五九・〇	(+) 一四・九	(+) 二二・六	(+) 三〇・三	(+) 九〇・六
泰	(+) 二七・五	(+) 二六・六	(+) 八九・九	(+) 二五・八	(+) 九・九	(+) 二〇・四
英北ボルネオ	(+) 一四・一	(+) 三・九	(+) 七・八	(+) 八・四	(+) 六・一	(+) 一〇・五
サラワク	(+) 一六・四	(+) 七・五	(+) 一九・六	(+) 三・六	(+) 九・三	(+) 一五・〇
蘭領チモール	.....	(-) 〇・七	(-) 〇・二	(+) 〇・七	—	(+) —
出超合計	(+) 九九・〇	(+) 五四・三	(+) 一七三・八	(+) 一八九・二	(+) 八五・八	(+) 九八・四
輸入合計	三、三三・一	二、九三・七	三、一六・一	二、四三・七	二、三三・七	二、二八・二
輸出合計	四、三六・一	三、四八・〇	四、八九・九	三、六三・九	三、一三・六	三、二〇・六
日滿支						



輸入合計	六、九〇・九	五、六三・二	六、四七・六	五、〇六・九	五、〇四・二	四、七五四・四
輸出合計	五、七九・一	四、七五・七	五、三三・〇	四、五三・三	四、三三・六	三、七五・九
入超合計	一、一一・八	九四七・五	一一、一四・六	五二・六	八〇九・六	九五八・五

そして之等の出超による受取超過は言ふまでもなく投下資本其他の政治経済活動に對する果實として毎年本國へ持出されてゐるのであつて、アーサー・ケラーの推計によると毎年オランダは三億二千萬フロリンざつと七億五千萬圓を蘭印から得てゐた勘定になつてゐる。その中事業投資利益から一億五千六百萬フロリン、利子受取三千五百萬フロリン、俸給恩給その他収益で一億二千八百萬フロリンがあつたと推定されてゐる。また蘭印、佛印の國際收支を見ても夥しい出超は利子、配當、資本償還を四億ドル以上やつても、僅かに八百萬ドルの金流出で済み、十三年度の如く輸出激減の際でも純資本流入約一億ドルの二倍以上の利子配當を支拂つても、金決済は千九百萬ドルに止つてゐる。佛印とても同様で不完全な資本移動を除いて見ると、出超を以て全輸出の三割に及ぶ巨額の利子配當を濟ませ、金流失は僅かに邦貨九百萬圓に過ぎなかつた。事業収益が國內に保留されるならば、輸入能力の増大と資源開發の急テンポ、通貨の安定等を支持して餘りあることが知られる。けれども事業經營の根幹が歐米人に獨占され、通貨金融力がその手に集中されてゐる限り、南洋地域の開發は畸形的經濟膨脹となつても土着民族、東亞諸民族の生存と繁榮を意味するものではない。事實、この地域の植民地化政策は十九世紀的原始

性を依然として存続せしめ、腐敗や愚民化が基調となつてゐたのである。そして貿易、運輸と共に通貨金融の大部分は次のやうに外國人銀行乃至本國資本の代理機關の手に集中され、その下に華僑商業資本が存在し、印度人高利貸(馬來、泰國のチェツテイ Chetty)が活躍し、土着民族そのものは、更にその一段下に立つて低い生活と金融力とに喘いでゐるのである。實に底知れぬ植民地化の深刻さである。

蘭領東印度	英領馬來	比律賓	佛領印度支那	泰
シヤツ銀行(中央銀行)	中央銀行なし	比律賓國立銀行	印度支那銀行	中央銀行なし
蘭印引銀行	蘭印商業	比律賓銀行	佛支商工銀行	シヤム商業
蘭印商業銀行	和蘭商業	比律賓信託	佛及植民地銀行	香 上
オランダ貿易會社	香 上(英)	比律賓商業	金 融	チャータード
香 上(英)	有 利(英)	蘭印商業	サイゴン	有 利
チャータード(英)	麥加利(英)	香 上	香 上	
花旗(米)	P & O 銀行	チャータード	チャータード	正 金
正 金	イースタン	花旗	ゴム金融	印度支那
臺灣	花旗	正 金	印度支那	印度支那不動産
三 井	正 金	臺灣	不動産	華 商
	臺灣		土地都市土地	華 僑
	印度支那(佛)		中法實業	
	義品放記(白)		富 漢	



## 南方通貨の植民地性と東亞の新通貨

従つて歐米諸銀行に代つて民族資本、或ひは東亞的な金融機構を築き上げることは容易ならぬ仕事である。この事は華やかな貿易金融面を離れ、或ひは大規模の植民地農業金融を離れて土着民族経済と金融の發達程度に目を注ぐとあまり隔絶せる状態に驚かざるを得ない。十四年春、泰國に於て泰國中央銀行の設立論が再び擡頭した時、大藏省顧問はこれに反對して「シヤムには爲替銀行はあるが、見るべき銀行は存在しない。信用市場もなければ、商品市場も株式市場もない米穀市場でさへも無く、米の市場は全くのところシンガポールと香港とにしかない。こんな幼稚な状態で中央銀行の設立は尙早である」といふ理由を擧げてゐる。これは勿論、植民地政策の代辯であるが、一半の眞實は代表してゐる。同じく十四年九月一日から外國貨幣輸入取締法が公布されたが、その理由は外國紙幣を投機的な民衆が買入れるのを防止するといふのであつた。即ち支那法幣が飛行機で香港等から輸入され大規模に賣買され(大口輸入五十萬弗)てゐることを示すが、南支方面の爲替取組困難のため故國送金を現金で行はざるを得ない等のためである。また南部馬來、北部ビルマ接壤地帯ではシンガポール弗やルービー貨が流通し、ゴム、錫、チーク材の取引をやつてゐるのを防止するためでもあつて、泰國貨幣流通は未だ統一も完成もされてゐない

譯である。かうした程度の状態であるから、一般土着民の金融には印度人のチエツテイ(高利貸)、華商の當舖(質屋)、信局(送金)——馬來に華商小銀行、信局、當舖、チエツテイ——泰國、或ひは農民を搾取する(半季元金の五倍に利子が及ぶ)こともある(高利貸カシケ(Cacique)が存在するだけである。この土着民を中心とする庶民金融機關として和蘭人が築き上げた組織は南方開發、民族復興が如何なる困難を意味するかを明示してあまりがある。原始的な現住民協同部落を單位に形成されてゐる零細金融機關たる六千七百四十一の群や村落銀行は貸出一千六百四十五萬ギルダーで貸付口数は九十九萬三千人に及ぶ、一人當り平均十七盾の貸付である。今一つの金融機關は一層興味がある。即ち米穀銀行(デッサ・ラムボン)は五千五百五十一行に及ぶが、貸付高は糶百六萬八千七十艘で借手は百十一萬一千人に達し一人當り二艘の糶を借りてゐるのである。従つて資産も糶百三十一萬一千五百五十艘、現金九百四十一萬五千五百ギルダーと報告されてゐるが、播種期に糶を貸付け、出來秋に利子の附いた糶の返済を受けるのであるが、殆ど一切が現物糶金融なのである。これらの夥しい庶民金融單位を統制支持してゐるものが中央庶民銀行であつて、純資産九百五十七萬ギルダー、投資二百八十萬ギルダー、預金四千四百九十六萬ギルダー、計五千七百三十三萬ギルダー(一九三七年)を活動資金として有つてゐる。その目的は(一)蘭印住民或ひは團體への金融(他の機關の引受けぬ場合)(二)現住民村落、レヘント州自治區域、共同組合、庶民金融機關よりの預金受入、(三)郵便貯金銀行と協力し貯金獎勵、(四)庶民金融機關の



共同組合、現住民部落金融機關の監督、統制、指導である。そして中央、地方に監督助成委員會有るが、社會經濟、技術、財政の部に別れ、地方機關の構成は歐人官吏一、現住民官吏一、農業指導者一名となつてゐる。本店にある經濟統計部は現住民農民負擔の債務調査を主要任務としてゐる等、一面オランダ人の努力が認められるが、これを更に開放的なものたらしめ、同時に經濟開發を大規模に遂行する方式は次代に残された任務であらう。日本南進はかゝる種の困難と努力とを是れはしてしなく強要される覺悟を要する。

東亞の新通貨體系建設はかく見れば容易ならぬ諸問題のみである。しかし豊富な資源と無限に近い人間の存在と、例へば日本の如き東亞近代國家の現存とは力強い希望を與へてゐることを確認することが出来る。

南太平洋の諸通貨表

通貨	流通地域	爲替相場	發券制度	通貨種類及び發行高
海峽弗 1 S. S. Dollar @ 100 Cent	海峽植民地、マレ 聯邦、マレ諸州、 英領北ボルネオ、 サラワク、ブルネ イ	七磅〇六十弗 二志四片 時價(六月) 一弗〇一八三三圓	マレ一通貨委員 會	政府紙幣(一萬、一千、百、五十、 十、五、一弗) 流通一〇五、三〇〇、四六九 弗(一九三八年末) 銀貨(一弗、五十仙) 約三、〇〇〇、〇〇〇弗
蘭印 ギルダー 1 Guilder (Florin) @ 100 Cents	蘭領東印度	一盾〇一盾(和) 時價三・七盾 一盾〇二・二六五七圓	ジャワ銀行	銀行券(千、五百、三百、二百、 百、五十、四十、三十、二十五、 二十、十、五ギルダー) 一九四、六五〇、〇〇〇 (一九三八年) 本國の金貨十ギルダーを本位 とせしが現在流通せず 銀貨(法貨二、一、半ギルダ 補助貨として銀、白銅、銅貨 存在す) 政府紙幣あり(二、一、一ギルダ
ペソ 1 Philippine Peso @ 100 Cents	比律賓	(米)五十仙 一比〇二・三圓	國庫 比律賓國立銀行 比律賓銀行	國庫兌換券 一六二、八九二、 六〇七ペソ 比律賓國立銀行券 五、三八 五、九一三ペソ 比律賓國立銀行券 一、八〇 〇、〇〇〇ペソ 計 一七〇、〇七八、五二〇 ペソ(一九四〇、五月) 一ペソ銀貨 補助貨(銀、銅) 四〇五、四〇〇 二、三五二、四四七
バート (銖) 1 Baht (Tical)	泰 國	(英)一磅〇 十一バート	政 府	紙幣(千、百、二十、十五、一、 一四、五、六、三、二、四、九、八) 銀貨(一九三九、三月) 銀貨(一バート五〇、二五サ



備考	② 100 Satang ピアストル 1 Piastre ③ 100 Cents	佛領印度支那 支那 太平洋佛領諸島 佛領印度諸州 佛領ソマリ諸州	二銖一、四三二圓 (佛)一ピアストル 十フラン 一一・六二五法 一ピアストル 〇・八六二一圓	佛領印度支那 銀行	白銅、青銅貨 佛印銀行券(百、二十、五、一ピアストル) 一八六、二〇〇、〇〇〇ピアストル(一九三九、八) 鑄貨 代表貨幣「ピアストル銀貨」 其他、銀、銅貨 三三、七六一、八三三ピアストル (一九三四年)
			時價は横濱正金 銀行六月平均建 値		鑄貨中総額は代表鑄貨 正金六月建値による紙幣換算 金額合計 紙幣合計 一、三六〇、五〇〇・五千圓

(一五、九)

## 第四章 南方諸民族の擡頭と諸課題

### 第一節 泰國の國民主義的勃興と諸課題

#### 對佛戰爭と泰國の復興

昭和十六年三月十二日、泰、佛印停戦を慶祝して泰國政府は、この日から三日間、日泰兩國旗の掲揚を發令してゐたので、盤谷は賑やかな旗の都市に化しつゝあつた。それは流石に快い感激の對象であつた。思へば泰國が公然と「日の丸」を掲げたのは實に「有史以來の事實」なのである。そして日本といふもの、存在を知つてゐても、泰國民が日本の世界的存在と力とを實感したのは、しかも運命を共にすべき兄弟國であることを意識したのは、先づこゝ、數ヶ日來のことであると言つても過言ではない。換言すれば、日泰兩國間の國家的民族的關係は今、歴史的な大轉換を開始したばかりなのである。一切はこれから、しかも急速に建設されねばならないのだ。

ところで泰國が今、日本を知り初めたとすれば、同様のことは日本にとつても言へよう。泰國は將に復興しつゝある。而して對佛戰爭の成功的終結は或る意味に於て日清戰爭に匹敵し、來るべき世界危局に對する泰國の嚴然たる態度はやがて日露戰爭の確立を齎すものであらう。實に失地の部分的回復は昭和七年の革命以來、擡頭しつゝあつた泰國ナショナルリズムの第一段階を確保すべき重大な岐路に於ける成功であつて、泰國にとつて、更に東亞にとつてその意義は豫想以上に大きいことが痛感される。

回顧すれば今日の泰國の盤谷王朝(チャクリー王朝)は本年で百六十九年であるが、恰も明治維新の年、即位された第五世ラマ王ヂュラロンコン大帝は英邁にして英佛挾撃の間に能く泰國を維



持されたが、明治四十四年以來在位された第六世王は遊惰であり、やがて大正十四年第七世（王異母弟ブラチャティボク親王）が即位されたが、健康の爲に政治を王族の最高諮問院に専委されてゐたこと、偶々世界恐慌に伴ふ泰國經濟の動搖とは、恰も盤谷朝百五十年に當る昭和七年六月十四日パホン、リツテイ、ソン三大佐とブラディットの代表する少壯官吏とを聯合騒起せしむるに至り、結局、同年十二月十日の恒久憲法發布、ピヤ・マノーを首相とする國務院の設立を見るに至つたが、翌年ブラディット（土地産業勢力の國有案を主張）等が議會工作により國務院不信任、官吏政黨加入禁止即憲法違反を可決せしむるに至つたことを機會に、反動化しつゝあつたマノーは四月一日緊急勅令を以て議會を閉鎖してしまつたが（昭和八年の四月政變）やがてパホン、ピブン、スーブに代表される軍人團の再騒起となり六月二十一日パホン内閣が成立した。その後は十月の亂（前陸軍大將ポラデット殿下等を中心とす）あり、翌九年の八月事變あり、十年三月第七世王の退位、現アナンダ皇帝の即位等、種々の曲折を経て、十二年十二月今日のピブン政權の成立を見るに至つたのである。従つてピブンの指導する今回の失地回復の成功は内政的に反對派的潮流の最終的清算を促し、ピブン政權を決定的に確立することになるべきものであつた。而してピブン政權とは昭和七年の革新の傳統の繼承者であり、形式的には極端な民主主義、議會主義を完成しながら、いつか世界歴史的变化に伴ひ、民族主義、全體主義の傾向を完成しつゝある一方、經濟主義や自由主義や文治派の代表たるブラディット（共產主義に關聯し査問され

たこともあつたが、本質は自由主義であつた）を最終的に後退させ、延いて親英的潮流の清算となるべきものである。最近の通信によれば米英派をなしてゐた藏相ブラディットが退き、親日派と目されるワニット（商務局長）を經濟相に起用、或ひはルアン・プロム（國防副大臣）を外相たらしめる内閣改造が近く完成されるとの事であるが、それは自然の歸結であらう。

#### 泰ナシヨナリズムの東亞的意義

而してこの泰國ナシヨナリズムは幾つかの點において特異な性格を有つてゐる。優れた指導者ルアン・ピブン首相は年若く意志果斷、温容なれども眼は鋭く革命運動やテロの下を潜つて鍛鍊されたことを示してゐる上に、知識は佛國留學の経験もあつて近代的、進歩的であつて若き泰國を代表するに適した存在であるが、この指導者ピブンの下にある泰國ナシヨナリズムは對英、對支關係に於て日本の方向と一致し、今回の對佛印紛争に於て日本が泰國に對して東亞的誠實を實現し得た事は、兩國の東亞的結合に力強い礎石を興へた感がある。所でかく泰國を指導しつゝある政治力は政黨の形をとらず、人的にピブン首相とその軍人を中心とせる同志、機構的には大藏、外務、經濟の諸省に對し國防省を中心とし、根氣強く鍛へられ、結成されてゐる。國防省の下へ各種の國營的經濟機關や施設が集中されて來たのは、一つは戰時經濟の必然的要請によるものであるが、他の一面に於て泰國ナシヨナリズムの既存の國家的機構に對する周到なる用意と根氣強い努力とを表明してゐるものであらう。



ところでこの泰國ナショナリズムは對外的、東亞的に重要な意義を有つてゐる。泰國が復興するにも、一般に南方諸民族が開放的生活に入るにも、ナショナリズムのみが前進の衝動力たり得ることが痛感される。而して泰國ナショナリズムが確立強化されるならば、自ら東亞的結合は駁々たる實力的影響の下に急速に促進される地政學的地位に泰國が存在してゐる。泰國にせよ、佛印にせよ、資源的にも農業的にも礦業的にも有望なものではあるが、近代の國家群に東亞諸國が成長する爲には、インドネシア人をも含めて、結局、スマトラ、セレベス、ボルネオ、ニューギニア等の廣大な未開發資源の開拓に協力する外はない點から見て、日本の泰國及び印度支那との結合は兩地域に於ける經濟的利益が終局の目標であり得るものではなく、兩國が寧ろ東亞的結合の前進基地化することに重大な意義が伏在してゐる。従つて當面の局部的經濟的利益のために兩國との國家的關係の發展が阻止されるならば、それは償ひ難き損失であらう。之に反し例へば日本との協力の熱情に於て泰ナショナリズムが急速に且つ廣汎に擡頭するなれば、自ら英米的勢力に對し自主防衛の機運が動き、泰國の軍事的、政治的、經濟的自立化が進展すれば期せずして印度支那の動搖が防止され、馬來半島、ビルマは勿論蘭領東印度に對する壓力は、東亞諸民族のナショナリズムの昂揚と東亞への糾合の結節點ともなるであらう。この意味に於て泰國が軍事的、政治的に強化され自立化することは泰國の米、ゴム、錫そのものよりも日本にとつても東亞にとつても高價なものであることに着目すべきであらう。況んや國際危局が緊迫してゐる今日、

日本にとつても泰國は單なる遠方の東洋國ではなく、その國境は或る意味に於て東亞的防衛の共通の國境であるとも言へるのである。それには泰國自ら強大となり獨立的な國家として完成されねばならないし、これを援助する所に日本の東亞的使命と繁榮とが約束されてゐる。

#### 泰ナショナリズムの諸相と課題

けれども泰ナショナリズムの強化、完全なる自立的國家の完成は決して容易な道行きではない。一九三二年の政變は憲法議會を生み、男女の選舉、被選舉權、男女共學、等にも現はれてゐるやうに形式的、或ひは精神的な意味に於ては世界に於て最も徹底せる民主主義（佛教哲學にも淵色せられた）の國である。勿論、新たな世界歴史の轉換は泰國にも全體主義、國民主義的成長をこの基礎の下に急速に進めてゐるが、この民主主義は國民的擡頭を導く役割を演じて來た。而して軍備擴張、新生活運動にも比すべきラタニヨム（State convention 國家信條）運動、ヒトラ・ニューゲントにインスパイヤされ、且つ泰人を父、獨逸人を母とせるブライエン大佐の指導するユワチヨン運動（青年運動）さては今次の失地回復を目指す對佛國民戰爭等、何れも泰國ナショナリズムの擡頭を表明するものである。

のみならず泰國ナショナリズムは經濟の中にも急速に進展しつゝある。北緯十二度半以北の鑛業權保留（外國人の權益化する位なれば開發せざるに如かずと言つた寮國氣である）チーク材伐採權等外國人權益の回收、華僑への壓迫、二百バーツに及ぶ入國稅の賦課、或ひは外國文字看板の



重税、各社商店の會計の泰文字報告(そのために事實上泰人をクラークに雇はねばならぬ)等に氣づく。また、企業的には泰の私的企業及び資本が未發達の爲に、明治初年の國營工場時代を現出してゐる。各種の專賣、燃料廠の設立による石油精製及び拂下げの獨占、政府需品納入を目標とするタイニヨム會社(Thai niyom)の成立、屠殺、セメント、綿布の諸工場等企業化し得るものは先づ國營事業として着手して行く感である。有名な精米會社たる泰ライスカムパニーは既に十四工場を有ち盤谷の精米能力の四割を集中するに至つてゐるし、華僑仲買人の中間搾取を排し、泰農民の生活上とそれによる國民的構成の改善を計るための協同組合運動、サムイ島の政府による錫の開發、沿岸航路に於ける泰航業會社、遠洋航路のための泰遠洋航業會社の設立、華僑銀行の買収と泰商業銀行、國立銀行局の設立と資本金一千萬ベーツの中央銀行開業準備、灌溉事業、大盤谷港の建造、首都に於ける泰人街の建設工作、ドムムアンの大飛行場、殆ど軍服に近い小學生の服裝、等々到る處に泰ナシヨナリズムの若い息吹きを感じる。そして議事堂、憲法記念塔、近代美のメモリアル・ブリッジ、格納庫を以てした盤谷停車場等は、唯一の藝術的芳香の高いものと言つてよいワットアルン(曉の寺)、ワットポー等の數多い佛教寺院に對し近代泰國ナシヨナリズムの象徴をなしてゐる。古代泰民族はワット・アルンのこの文化を遺産として傳へた。ヤング泰は一層高い文化を創造すべきだ。この意味に於て今後の泰青年の使命と覺悟とは愈々重大となつた。

けれども泰ナシヨナリズムの完成は凡て今後にかゝつてゐる。ピブン等の如き少數の優れた先覺的個人の存在にも拘らず、一般泰國民の間に於ける立遅れは必しも短時日に克服し得るものではない。安南人に見られぬ毅然たる獨立國家人らしい自負は十分に存在し、面子に就いて或ひは支那人以上であるが、體位の劣れること、一般に生活水準を急速に引上げべきこと、暑熱が計畫性、組織性、能率に關して阻止的に作用してゐること、その上に人口が少く獨逸本國に匹敵すべき面積に人口僅かに一千二、三百萬に止り、泰人は一千万前後に過ぎないこと(兵力、勞力の不足となつて現れて来る)しかも盤谷(六十萬)及び附近に集中されてゐること(北方ビルマ國境近くのチェンマイは第二の都會であるに拘らず僅に數萬)従つて、諸種の意味からして殆ど泰國、即盤谷であるといふ未開發状態であること等の事情を考慮しておかねばならぬ。

殊に華僑問題は深刻なる事實である。泰國民は大部分は農民であり、その他は軍人、官吏、貴族、僧侶といふ上層を形成し、商工業に於ては殆ど微力と言ふに足りないのである。そしてこの經濟面こそは壓倒的に華僑の手に握られてゐる。都市に於けるばかりでなく田舎の隅に至るまで配給機關が殆ど華僑の組織であることは驚く外はない。泰國では外國人としての華僑が多數存在してゐるといふのではなく、泰國民構成化され、それを蠶食し寄生してゐると言へる程に深刻な形相である。泰米の買付、輸送のライター、精米、香港、新嘉坡への輸出等は殆ど華僑の手にある。タイライスカムパニーも完全に買収したのではく華僑からの賃借の形式である。航業に於け



る五福公司、三郊公司、錫、ゴム、タングステンに於ける葉賢才、珍寶、瑞興、震源等の壓倒的勢力も亦同様の事實を示す。泰國政府は泰人を商工業に急速に訓練せんと努力してゐるが、商工業にしても銀行にしても單に資金資材の問題ばかりでなく、技術及び經營能力をこれから獲得しなければならぬ實狀である。泰人化し得る華僑の同化への努力、新渡航者の制限（入國稅二百ペーヅ）泰國策に一致せざる華僑への壓力等の諸傾向は今後強化されて行くであらう。

#### 經濟面に於ける英國勢力

しかし華僑問題は結局東亞的内部構成の問題であるが、英國的勢力の浸潤は外的な重大の意味を有つ存在である。勿論特に政治面から英國の勢力は急速に後退しつつあるが、經濟的には最も有力であつて、泰國に於ける華僑經濟も實は支那本土に於けるが如く英國の買辦的地位にあることを否定し得ない。そして泰國が政治に於けるが如くに經濟に於てもナシヨナリズムと獨立性を完成せんとすれば、泰國經濟は根本的の一大變革を覺悟しなければならぬ。こゝに泰ナシヨナリズムの苦惱がある。

第一に米は日本が大きな買手となり始めた十五年度でも、五五・六%、金額にしても七千七百五十萬ペーヅ以上は新嘉坡、馬來、香港、英本國、セイロン向輸出であつた。錫に於て月生産額一千五百噸の中、六割までは英國系會社の手に残り、四割の半分はそれと密接な關係ある華僑の手にあると言つた程度であるし、投下資本は約八〇%まで英國系資本であり、金融網、資材

供給、買辦契約を通じて華僑の分まで支配してゐる。その錫の大部分は盤谷に北上するのではなくブケット島から船で（八、九時間）或ひはハヂヤイから鐵道（五、六時間）でピナン（またシンガポール）に送られ精鍊、輸出される機構になつてゐる。この意味に於て、西南泰は馬來即ち英領へ一體化されてゐると言つてもよいのである。ゴムは殆ど土着民栽培で年五十噸、十噸といふ小規模生産であるが、その過半は華僑の手にあり、それを又英國系會社が金融網、取引網を通じて蒐集し、南下させてゐることは錫同様である。第四の重要産物たるチーク材は北方ビルマ國境、チエンマイを中心として伐採集荷されてゐるが、これまた英國系會社を中心とする外人資本の手に握られて來た。

又、貿易に於ては輸入三七%、輸出七二・七%まで英國及び植民地に依存してゐるばかりでなく、それを輸送すべき航業に於ける英國の地位は特異である。即ち泰國貿易は殆ど新嘉坡、香港を仲繼港として行はれて居り、それへの航路は太古洋行（香港）スツレーツ・スチーマー・カムパニ（新嘉坡航路青筒系）ブリツチツシュ・インデア（ブケット、ピナン、新嘉坡）等が經營し、諾威に次ぎ英國が壓倒的（二〇%）である。

而してこれらの經濟活動を賄ふべき金融面に於て泰國が未だ中央銀行や有力なる商業銀行を有せざるに對し、香港上海銀行、チャータード銀行の如き英國系銀行が存在し、恰もそれを代位してゐる觀がある。それどころか泰國財政、通貨制度に對する英國的影響の強力さは驚くべきもの



がある。泰國財政は一九三九年度を見ても普通歳出一億一千四百萬ベイツ、資本支出二千四百萬ベイツ、合計一億三千八百萬ベイツ、即ち二億二千萬圓強に止るが、その財源は關稅（三分の一）を筆頭に鐵道收入、灌溉納付金、これに營業稅、入國稅、印紙稅、所得稅の順位で約五百萬ベイツから二百萬ベイツの租稅收入が見られ、不足は國庫金剩餘から補足されてゐる。これに對し英人顧問は極端な「健全財政」主義をおしつけ、積極的財政政策を許さない。

然るに一方、通貨の面に於ては、一九三九年度に於ける流通高一六九、八五四、三一五ベイツに對し、英磅の證券準備一〇〇、四〇九、六八四ベイツ、金準備九七、二七九、〇〇〇ベイツ、銀五一四、一七七ベイツ、合計一九八、二〇二、八八一ベイツ、即ち一一六・六九%の準備を要求してゐる驚くべき事態である。従つて泰國政府はロンドンに動員せられてゐるこれらの資金の喪失を招くが如き事態については重大な決意を要する譯である。勿論ポンド外債五、三六〇、四三九ポンド、即ち一一ベイツ替に換算して約六千萬ベイツ（内債は一千萬ベイツ）を有するが、それと差引きにならぬ流動的な巨額であつて泰國の苦痛は察するに難くない。尤も英國の投資は錫を初め相當存在してゐるから、そのまゝ、差引くとすれば泰國には不利ではない。それにしても實にポンドのために利用されてゐることも夥しいと言はねばならぬ。貿易に於て英帝國に多くを送り出し乍ら輸入は可成りに多く日米その他弗系諸國に依存してゐるが、それを決濟しようとしても、英國は國際通貨性を失つた磅を與へるのみだから泰國はこれを自由市場で米弗に換へて決

濟する他はない。この特異性は、そのまゝ、又英國の金融的支配を複雑にしてゐる。

以上の如き經濟的基底に泰國政治の對英的纏綿がその東亞的主觀を越えて存在し、自らの手により、或ひは日本の援助を得てこの缺陷を補足し得ない限り、泰國を東亞的に強化し、泰國ナシヨナリズムを開花させることは不可能であらう。泰國は今や政治的にも、經濟的にも、將又、文化的にも、眞實の獨立性を克ちうる爲に嵐の岐路に立つてゐると言はねばならぬ。幸にして泰國ナシヨナリズムの代表的指導者達が日本との協同に果斷であることは、日本の希望であると共に日本の責任も亦大なることを用意してかゝらねばならぬ。（一六・五）

## 第二節 印度支那の新生

### 日佛協力への轉換

印度支那はいま歴史の十字路に立つてゐる。先づフランス人の運命であるが、若しも敗戦後、佛印が相變らず援蔭、抗日、反樞軸のコースを固執し、カトルー前總督が逸早くドゴール派であつたとすれば、事態は今日と全く異つた悲劇を生んだであらうが、他の一面、日本人もフランス人も安南人も夫々に自己の歴史的地位を確認し、その運命に果斷であり、それ故に問題の解決が簡明であつたらうにも思はれる程に、佛印の政情は多角的で且つ微妙を極めてゐる。



それは兎に角、幸ひにして現實として複合され來つたものは、日本軍の佛印進駐を初めとして泰佛印媾和、日佛印經濟協定等、日本に對する、一般に東亞圈に對するフランスの協力といふコースであつた。新聞紙の傳ふるが如く若しも獨佛協定がフランスの參戰を結果するならば、その時こそ東亞に於ける日佛協力も飛躍的發展を促されるであらう。けれどもこのフランスの協力がフランス人の日本の力に對する「屈服」であり、無力に起因する「餘儀なき事態」に過ぎず、何等內在的な能動的な性格を有たなかつたならば、日佛協力は安定性を有せず、況んや日佛にとつて積極的效果を招來することは無いであらうと、今後とも悲劇に向つて破綻しないとは言へないのである。

事實、我々は佛印に關しドゴール政権が殊に植民地に存在し、印度支那にも不斷に影響を與へてゐることを耳にするのであるが、どのフランス人がドゴール派であるか、この派がどれ丈の力を有つかを檢索することが問題なのではない。それよりも全體としてのフランス人が如何に感じ如何に新生せんとして、あるか、或ひはそうでないかの歴史的認識こそ基本であらう。思ふに佛印問題は河内のドクー派に對して、西貢のドゴール派が有力に對立してゐるのではない。何れも本質はフランス人である。たゞ後者が徹頭徹尾、フランスを敗北せしめた英國的舊秩序、その勢力、その性格を固執する舊きフランスを代表するに對し、前者は少くとも新たな歴史的事態に即應する必要を意識せる新生せんとするフランスを代表してゐるが、その根柢に於て、善かれ悪か

れフランス國民そのものから發してゐるのだ。従つてドゴール派の人的連絡が危険であるといふよりも、フランス人の動搖そのものがドゴール派さへ大きく見せるのである。ドゴール派が有力に存在し、ドクー政権がこれと死活の戦ひをやらねばならぬ位なれば、日佛協力は却て果斷、確乎たるコースを以て進展する可能性あることを考へて見ても、佛印に於ける錯綜はフランス人の日本人に對する基本關係そのものに問題が存在することが明白であらう。

### フランスの新生

ところで日佛協力は、意識的にせよ無意識的にせよ、東亞に於ても諸民族、諸國家が一大生活圈に結合せられるべき自然の勢ひにあること、その場合に日本が指導的役割を果すべき地位にあること、この東亞の大勢に抗して、圈外にあるフランスがひとへにヨーロッパ本國的角度からかかる結合を阻止し、分割支配せんとするのは絶対に不可能になつたこと等を少くとも承認したことこの政治的表明である。

勿論、舊き現状維持的なるフランスは、事ここに至つても猶、歴史の啓示を曉らず、或ひはそれを意識しても、目前、狹義の利益に囚はれて、如何にして少く日泰に讓歩すべきかを考へ、却て日泰兩東亞民族の不信を買つてゐる。或ひは又樞軸國家對米英國家群の世界的對立に於て、後者の勝利に萬一の望みをかけ首鼠兩端を持しつゝ、敗北せる自國の朽廢に就き内省し革新するの氣運なく、徒に東亞諸民族に常にその敵性を疑惑されるの危険を冒してゐる。そして日本の進出に



對しては、「不快」を感じ、安南人その他原住民に對しては「威嚴」をいかに繕ふかに腐心してゐるが、これではフランスをして東亞に打ちこまれた分割の楔として印象せしめつゝ、ひたすら清算に導き、結局狹義の利益すら維持し得なくなるのであらう。

現佛印政權はヴィシー政府の方向を代表して反日が一切を喪失せしめるのみであることを實際的感覺を以て理解し、日本への協力の方向へ轉換はしたが、佛本國と同様に、或ひはそれ以上に新生フランスの達成には未しであつて、その基底は頗る現状維持的である。佛本國の新生フランス政權の確立がなほ渾沌たる以上、これも亦已むを得ないことも知れないが、フランスの爲に悲しまれて来る。フランスは終に革新し復興されないものであらうかと。しかし、進駐當時、挺身交渉決裂の危機を個人的に救はうとし、今は連絡將校として活躍してゐるといふフランス青年たちを思ふと、フランスの新生を疑ふことは性急に過ぎるであらう。

而してフランスの新生を妨げるものはユダヤ的な銀行、商社の商業主義と高給保身の殖民地官僚的精神とであり、舊い十八、九世紀的殖民地支配の觀念であるが、東亞の情勢推移はフランス人に自己の運命を根本的に考ふることを要請してゐる。日・泰の東亞的な要求には常に考慮を加へて行かねばならないし、歐洲との貿易の杜絶に近い状態は對米關係（今後はこれも保證されない）を深めると同時に東亞諸國へ補給を求め、延いて佛印自體の工業化を考へねばならない。既に泰との國境紛争がさうであつたが、今後の世界的危機に對應するためには軍事的にも佛印自體

防衛力を強化し、益々自給圏、少くとも東亞的範圍に於ての自給圏化への努力を強行せねばならない。最近の關稅改正が原糸の無稅に對し織物の高率稅を對置したり、印度支那に關稅自治を賦與する法律と之を呼んでゐるのも、政治的に自治領化せしめ、延いて自立的國家たらしめる過渡的傾向を暗示してゐる。それはフランス人自體の聰明なる利害意識から出發して、印度支那そのものを本位として考へるに至ることである。かく佛印が印度支那として自治權を有ち、その大部である安南人が東京、安南、交趾支那に互る王國に、クメル族が自治制的カンボヂヤ王國にラオスが同様の王國に、即ち現在、形式的には存續してゐるそれが實現せられ、眞實の印度支那聯邦への發展を日佛協力の下に完成して行くならば、印度支那は益々東亞化への基礎と熱情とを帯びて来るし、そこにゐるフランス人もその觀點に立つて感情し行動することが出來、それを正義とも愉快とも感ずるに至るであらう。和蘭人は別の角度から、蘭印の自立化を必要と考へその熱情を有ちつゝあるが、その結果は今日彼等の考へてゐるのとは異つた東亞的方式へ進展してしまふことであらう。佛印はその點に於て直接、今日から建設的たり得る。何れにしても暗示に富める時代を印度支那も經過してゐるのだ。

かく考へ來れば、日佛間に新に進行しつゝあるものは、夫々の立場や利害から出發しながら客觀的に合成されて行くものは、之を翻然直視すれば當事國双方にとつて遙かに深刻なる東亞新秩序建設といふ世界的な共通課題であつて、結局、そこにはも早や勝敗、優劣、榮辱は存在し得な



い。こゝに深い歴史の啓示を見ると共に、その實現を拒否する限り何れも安定を得ることが出来ないし、フランスは結局、東亞から閉出される外はなくなるであらう。この場合、フランス人の新生を助け得るものは、東亞に於ては日本たるべきであるが、かくして現實の必要から日本は立遅れた東亞諸民族は固より先進のヨーロッパの運命まで負擔し、之を啓發すべき使命さへ負ふに至つたのである。實に日本は獨、伊、等と共に世界の新秩序を再建しつゝあるのだ。而してかゝる視角と方式とに於てのみ支那事變そのものも佛印問題そのものをも解決し得ることを今更の如く痛感せしめられる。これが歴史といふものであつたのだ。

#### 佛印機構のクラシズム

それにしても近代的な世界の中にあつて印度支那ほど鎖國政策（フランス本位のそれではあるが）を維持し得たものは稀であらう。日本との交渉を人爲的に禁壓し得たばかりでなく、英國に對しても米國に對しても殆ど閉鎖してゐたと言つてよい。その點からすれば印度支那に關する限り、日佛間だけの諒解を以てして大部分の解決が付き得ることは、第三國權益の錯綜し支配せる支那とは著しく異つてゐる。

そして此の閉鎖された門戸の裡に存在するものは、近代的裝備は持つが、本質的には善惡ともに絶對や權威の中世的、古典的原理と機構である。これまでは印度支那は何と言つてもフランス領であつた。海防も河内も西貢も印度支那の中心都市はフランス人の市街、否都城である。支那

の租界に見られる美しさと静けさと生活をエンジョイせんとするフランスタウンと同じ構成の都市である。繁華な通り、ホテル、シネマ到る處に動いてゐるものは都市の限り大部分フランス人である。そしてこれらを連ねる自動車路もまたフランス人のため近代的整備を盡してゐる。それに強烈な熱帯の太陽の下でもフランス人たちのみは健康と美しさと文化とを満喫してゐるやうに見受けられる。印度支那に於て、我々との新しい交流に加はつて來たアジアの一地域を見ることを豫期したのに、我々の日常接するものはフランスであつた。これではフランス本國に「洋行」した思ひである。

このフランス人（家族とも四萬餘）が一萬は軍人、五千は官吏、五千は商社その他の經濟方面の各上層に分布し、この千分の二の少數で以て、千六百六十七萬（七十二％）の安南人、二百九十餘萬（二二・七％）のクメール人、約百八十萬（六％）のタイ族、等を支配し、これに三十二、三萬の華僑（一・四％）を土着住民及び土着經濟に對する買辦的役割に利用してゐる。しかもフランス自身の中でも極く少數が佛印の全國的内情に通じ且つ之を動してゐるのであつて、例へば印度支那銀行のマネジャーたるガネーの如きは不在の場合、之を代理し得るものがない程に萬端について裁決する財界獨裁者の感がある。しかも佛印の政治經濟に於ける極端な祕密閉鎖主義はこの傾向を一段と強化、集中せしめてゐる。

かうした機構的特徴からして種々重大な暗示が與へられる。佛印に於ては、政治は前資本主義



的に經濟に優越してゐる。高い關稅壁や租稅、獨占的な佛商品の輸入、商工業經營に於ける獨占保護、過度の高給と利潤の保護、等は政治によつて保護されたギルドと獨占の感がある。印度支那銀行が特定の舊い取引先商社に獨占的に融資し積極的金融的政策をとらず、爲替許可も客觀的基準は明示されず主觀的なること、爲替業務及び同利益の佛印銀行への集中機構、一般に佛印の經濟統制主義等は以上の佛印機構の實態を指して考へられぬ。

それに西貢の對外貿易に於ける壓倒的地位からして、西貢財界こそ佛印政治の實質的支配者であり地域であるかの如く想像されるのであるが、事實は西貢財界の少數者のみが全國的に考へ且つ河内の總督、官僚、軍人と共に單一の貴族的指導層を形成してゐるのであつて、固有の西貢派ではあり得ない。西貢は如何に經濟的比重に於て大きくとも、佛印を全國的綜合的に經營することを考へることさへ思ひもよらぬ、自然のままのローカルな經濟都市であつて、恰も封建治下の大阪或ひはそれ以下であるかも知れない。一切は總督政治の動きに餘りにも依存し、自立的な政治性を獨立に持つものとは考へられない。この事は世界經濟機構の新傾向に伴ひ、佛印經濟の統制機構化を急進展せしめる一半の理由をなすと共に、佛印經濟こそは政治が第一義的であることを示すものであらう。我々は月並にかうしたフランス人の植民地統治機構を封建的なものとは非するよりも、六十餘年の經驗と努力の蓄積とは言へかくも少數のフランス人がかくもクラシカルな均整美に於て政治、經濟機構を完成し安定せしめて來たことに驚きを感じる。而してこの中に

ある能力と經驗とを輕視することなく、之を一段高い角度から再検討し體得しつゝ、印度支那の防衛と開發とを考ふべきであらう。

#### 運命の安南人

だが、これまで國際政治經濟の主流から比較的片隅におかれることによつて一種の安定を保つた佛印の政治經濟機構もその外的諸條件によつて一種の均衡は破られ、鎖國の時代は終つた。歐洲大戰の勃發からフランスの敗戦、日本軍進駐、泰國との國境戰爭等は嘗てなき深刻な波動を惹起して佛印はそれ自體としての確立並に開發の方向へ次第に轉換せざるを得なくなつたのである。

以上はまた、内部的條件たる安南人その他の土着民族の地位及び運動に新たな實現性と東亞性とを附加することになつた。佛印當局はソ聯、重慶、特に日本の安南人に對する影響に對應するために自治權附與の名目を以てフランス的な安南人民族運動を組織しようとしてゐるが、これまでも既に良心的なフランス官吏の苦惱は舊きフランス人と安南人との間に横はる深溝に處して何れを基調とするかといふ根本問題であつた。まして日本は東亞民族としての安南人開放の問題に無關心たり得ない。それに安南人は容貌から家屋、船、魚網、食物に於ける米と魚に至るまで實によく日本人に似てゐる。この事と歴史の思ひ出と、開放への意慾とは複合して日本及び日本人への憧憬は心理的に深い。日本軍隊の軍票を喜んで受取つたことにしても、佛印進駐、或ひは



サイゴンへの日本軍艦の入港等の豫想の下に北部佛印に於ける獨立暴動、南部佛印の大暴動（高台教の反亂と言ふも寧ろ一般的な反佛蜂起）が起つたのである。佛印當局は安南人の日本人との接觸を極度に警戒し、日本人には偵察、前者へは壓迫の傾向が見られるが、かうしたフランス側の不自然な遮断や、政治的犠牲者たる安南人の運命を兩國とも問題にしないといふことは、却て印度支那に於ける日佛協力の所以ではない。

かく安南人が東亞的であることは、佛印の轉換や印度支那に對する日本の經濟工作を有利に導く條件であらうが、この安南人が農村地域に於ては固有の社會を保持してゐることが、更にこの條件を有利にする。例へば村といふ原始協同體は立派に維持され、ディン（殿）は神を祭り村政をやり寺子屋的な役を果す中心である。この村の周圍は主として竹籬で圍まれ、外部の人を容易に入れないほど封鎖的である。従つてフランス人は村役場乃至駐在所の如きものをその外部に持つて監視するに止つてゐるから、この點からすれば佛印社會の上層が如何にならうと、この村といふ基礎單位はそのまゝ堅實に残り、新たな組織の基礎となるばかりでなく、その素朴な生活は熱帶的果實も米も二毛作たり得るから、いはゞ五ヶ月を以て經濟的にも回復して來ると言へるのである。

#### 性格の南方的缺陷

けれども安南人の民族復興は必しも容易な問題ではない。現在の消極面のみを見る者は（抽象

的な安南獨立論者を含めて）、いつか否定的見解に陥ることが少くない。先づ肉體は一般に貧弱である。二十五仙、三十仙といふ低賃銀の安南人は食ふだけには事を缺かない自然の恩恵や熱帶の嚴酷な暑氣等にも促され、働く意志が薄弱であり、低能率である。また北方の自然に恵まれぬ民族に發達した計畫性、組織性、協働性に乏しい。河内北方八十軒の太原鐵山で鑛山を採取してゐる安南人鑛夫や、ホンゲイ西方のバカムインの入江で硅砂の荷役をやつてゐる安南人苦力の勞働を見るならば、それは北方の勞働では律せられないほど緩漫なものである。南方の資源はいかに豊富であつても、之を開發すべき豊富な勞力、頑健で能率的な勞働力が存在しなければ問題にならないが、この點こそ正に缺如してゐる。かくて新しい生活の欲望を與へ、勞働への熱情を喚起し、技術的勞働にも對應せしめて行くことが、經濟開發の實際的必要からも切實になつて來る。安南人に接する毎にその哀史的存在に憫々の同情を感じつゝ、民族復興を考へるのであるが、安南人の子供たちは日本のそれに似て豊かで潑刺としてをり、人爲的拘束から斷たれるなら、民族復興は可能であることに希望を有つ。けれども老人がフランス侵入に反抗した體驗を有ち、三十年代はフランス化する安南人への過渡期であり、それ以下の年代は全くフランス化する安南人であることを思へば、この復興は少くとも數十年にして初めて新安南人を生み得ることを勘定に入れておかねばならない。

#### 華僑の動向



更に運命の岐路に立つものに華僑がある。それは三十二、三萬乃至四十二萬で全人口の二%に達しないけれども、都市はシヨロンの如く半分乃至以上、ブノムベン三割、西貢二七・八%、海防一五%を占め、且つ全土にわたる商業網をこの華僑が左右してゐる點から見ると、華僑を措けば全佛印の經濟組織は殆ど解體すると言つてもよい位に、全體的性質を帯びてゐる。殊に佛印産業の根幹たる米の經濟に於て、シヨロン、サイゴンを中心として支配的であることは驚くべき事實である。靱の仲買人、杼、荷役は固より精米所にしても、例へば提岸、西貢精米所五四、一日四、四四〇吨の精米能力中、華僑は三九、一日三、三三五吨、即ち全能力の七六%を占め、佛商社の印度支那醸造所(デイスチルリ)四五〇吨、南豐成(極東精米所)三〇〇吨、鄰耳(西貢精米所)一五〇吨を除けば源豐成三〇〇吨、萬昌源三工場四五〇吨、廣正興二〇〇吨、義昌盛二工場二五〇吨、廣源棧、同茂、同興、恒泰、萬益源、通成、光東、西南何れも一五〇吨の大精米所が華僑の手中にある。對外公定輸出業者には印度支那佛商社、ダヴィド商會(英國系猶太人)、ルイ・ドレフス商會(佛系猶太人)、印度支那米穀(デニフレ)、ロンドン商會(援蔣物資で有名な)等の白人輸出業者も結局、以上の華僑を買辦化して活動してゐる存在に過ぎないことを見ても、華僑が如何に重大な要素であるか明白である。

この華僑は勿論、表面こそ佛印當局の取締りと共に鳴りを鎮めてゐるが、内實は抗日的な氛圍氣を構成し、三井なども米の買付は佛人を経て行ふ外はなかつた。

けれども此の抗日も日佛協力の壓力に對しては一定の限界と轉換性を有つことが考へられる。それは米に於ける華僑の決定的役割は、一方華僑に於ける米の重要性乃至生活的基礎でもあるから、容易に放棄し得るものでない。傳統的にも現實的にもフランス人に對する政治的服従の代償として經濟活動の自由を得て來た性格を有つてゐることは、これに生活乃至經濟の活動餘地を認むれば政治的適應性は強靱であること、一般に、上海、香港の如く遊資の形に於て資産は存在せず、あれば不動産が産業化してゐるから海外逃避は即資産放棄であること、租界的經濟が存在しないこと等は華僑、即ち海外支那人の性格を特殊づけるのである。従つて此等の條件を利用しつゝ政治的、軍事的力を意識せしめる一方、それを生活的、經濟的に生かす方向を與へさへすれば統制に順應し來る條件をも多分に有つてゐる。何れにしても華僑もまた、日佛協力の展開につれ重大な轉換點に追ひやられつゝあるのである。

#### 密貿易のルート

以上を見ても氣づくことは佛印が綜合的經營に當つてまとも易い有利な點を有つことである。政治や軍事の經濟に對する優位は認められるし、國際收支に於ても、商品貿易は約一億ピアストル前後の出超を續け、輸出總額の三割―四割はそのまゝ、他の決済に利用し得るといふ有利な状態で、大入超國たる支那とは全く異なる。更に立遅れてゐるとは言へ、佛印經濟の統制を助成する經濟地理的條件を有つてゐる。例へば、支那に於て密貿易は殆ど不可抗的な作用であり、それ



は經濟統制を瓦解せしめる程の有力な力を有つて居るが、佛印はこの點極めて有利である。例へば、北方では老開、河楊、高半、諒山、海寧、毛街等が南支へのメインルートであつて、これを抑へれば封鎖は可能であり、現に遮断されてゐる。南支沿岸からのジャンクも存在するが結局、海防、西貢に持ち來らざる限り揚陸後不便でもあれば佛印へ齎らす根據が無い。また安南人の購買力の缺如は密輸入や奥地逃避を反覆繁榮せしめるやうな基礎を與へないから、杜絶する可能性が多い。西部國境、ラオスの密林地帯は今回の戦争さへ空中戦だけで主戰場としてカンボチャが選ばれたのを見ても分るやうに交通不便である。結局、メコン下流及び泰佛印國境が残る。縦横に發達した運河網は統制忌避のルートたり得るが、遠洋に出て行くことは困難であり、租界なきことは仲繼地を失はしめる。勿論、蘭印からジャバ糖をカンボチャ海岸に密輸するルートも存在してゐる。また泰の國境町ウボンに密輸で知られてゐるが、これは佛印の高物價を窺ふ税關網買収である。かくて佛印の統制は支那とは異り浸潤し得る基礎を有つてゐる。従つて一定の統制忌避ルートの發生を注意しつゝ、特に價格、蒐荷政策に於て、農民の失望や生産放棄、或ひは怠惰化、配給網の混亂等、特に國內經濟的要因に注目すれば比較的に經濟指導は有利であると言へよう。

#### 輸出入貿易の轉換

ところで印度支那の經濟は、政治と同様に對外關係から再編成を開始し、今その過渡期の課題

解決に腐心してゐると言つてよい。一九三九年に至る三ヶ年間平均輸入總額は約二億ピアストルであるが、その中佛本國は過半の一億ピアストル以上を獨占的に供給し、綿織物、鐵鋼、人絹織物、葡萄酒、藥品、自轉車及び部分品、衣類、石鹼及び化粧品、人絹絲、毛織物、窓硝子は九割乃至十割まで、機械器具、自動車、紙及同製品、ゴム製品、染料は七割乃至八割九分まで、その他化學製品、ベター、陶磁器は五割乃至六割餘（以上十九品目輸出總額八百萬ピアストル、四五%）まで佛本國といふ有様であつたから、歐洲との貿易ルートの杜絶は印度支那經濟にとつて重大なものであつた。その結果は物資豊かな米國依存への傾向を發展せしめたことは察するに難くない。これまでもジュート袋（輸出米用——新嘉坡、香港）、石油（蘭印、米）、棉花（印度、米）、自動車（米）、綿織物、綿糸（英、印度）、煙草（米、英）、ゴム製品（米）、小麥粉（香港、濠洲）等英米が有力であつたから、印度支那の米、英依存關係は戦争を通じて海上交通に於ける休戦後の英米の對佛印諒解と共に高まつたであらう（これまでも香港、新嘉坡を第一とする英米蘭及び主要植民地からの輸入は約五千二百萬ピアストル、一五—一六%であつた）。にも拘らず、印度支那の物資不足は、今急速に進展し、恐らく店頭に出されたものが賣り盡された後を補充すべきストックは存在しないものと見られる。こゝに印度支那の東亞圈への轉換が必要となり、日本の要求と對應して日佛印經濟協定の素地をなしたのである（日支泰からの輸入は三年平均二千萬ピアストル、一〇%餘）。勿論、日本がそれを補給するとしても、鐵鋼、機械器具、石油、棉花、自動



車或ひは化學製品、藥品等に就いては同一方向への解決を求めるとか(石油)、一部を補給し得るに止るものがある。こゝに對米英への纏綿は餘儀なく持續するが、結局、萬一の危機の發展を豫想するとすれば、印度支那經濟への打撃を阻止する爲に戰時經濟への再編の問題が緊急になる。印度支那は輸入に比べれば輸出に於ては一層、米英關係に深く結合されてゐる。一九三九年には一段と著しくなつたのだが、佛本國及び植民地への約一億三千万ピアストル(四〇%弱)に對し、對米・英直接輸出だけでも五千五百萬ピアストル(一五・六%)、仲繼的な新嘉坡・香港が六千六百六十萬ピアストル(二二・三%)、これに英米蘭植民地を加へると一億六千万ピアストル(四六%)に上つた。三年平均では一億一千万ピアストル、三六%、佛國の一億三千万ピアストル、四六%に及ばないが、この傾向は今日では一段進行して居る。之に對し日泰支は二千六百萬ピアストル、八・七%であつた。このうち佛本國への輸出困難が米(五ヶ年平均六十萬噸)、玉蜀黍(四十萬噸前後)、石炭(二十五萬噸)、ゴム(一萬五千噸)、亞鉛、採油用種實等々の大部分を過剩ならしめても、對日輸出の活路を見出すことが出来るし、事實最近の日、佛印經濟協定も米以外の重要物資、石炭、鐵礦、マンガン、燐灰石、亞鉛、タングステン、硅砂、玉蜀黍、生漆、牛皮、鹽、松脂、胡椒等につき七、八千萬圓を輸入することが報道されてゐる。にも拘らずまだ米英とその勢力圏に、例へばゴム(六萬六千噸、その中米英六一七割)、錫及錫礦(計四千三、四百噸)、チーク材(一萬噸餘)、コブラ(一萬噸)、その他の重要物資市場を求めねばならない。

かうした事情は國際貿易並に金融を通じて米英の影響が維持されてゐることを示してゐるが、國際的危機の進展と共に印度支那も東亞圈内に於て、自給を圖らざるを得なくなるとすれば、一層の根本的な貿易再編成、就中、積極的な佛印開發を急速に實行して行かねばならぬ。この場合日本は最も能率的且つ道義的な開發機構を以て之を助成し、或ひは貿易機構に於ても、米の如く重大な東亞的食糧品に關しては、單に佛印等の諸國から應急的に買付けるばかりでなく、それが不要になつた場合にも、東亞的需給計畫と東亞的貿易機構の確立を以て之を仲繼し、その運命に責任を持たねばならない。日佛交渉は佛印統制經濟の急進展を結果したことは前報の通りであるが(米の取引及び輸出管理委員會、ゴム販賣所、十種の輸入組合、太湖の魚類輸出組合等々に日本人、安南人の延いて支那人の積極的な導入が必要である)、この國家民族間の經濟關係の機構的變化は單なる商業主義、貿易主義を越えた經濟協同の關係でなければならぬことを要求し、日本に於ける國家的精神を基調とする經濟新機構、新たな經營原理と利害意識とが育成されねば、大規模の開發、或ひは交易は成立を求めても不可能であらう。

#### 計畫的決濟の問題

更に對外貿易の變化は當然に決濟機構の變化を喚起してゐる。對本國貿易の後退、英磅の封鎖輸出力の喪失等は佛印にも米ドル資金需要を緊切ならしめた。十四年度、英國、特に新嘉坡、香港、印度との貿易收支は六千万ピアストル以上の出超であつたが、日、米との貿易尻は出超三千



一、二百萬ピアストル、蘭印へは入超六百四十萬ピアストル、日泰支を米弗建としたとしても出超千五百萬ピアストルであつて、結局以上では米弗資金四千百萬ピアストルで以て、對佛貿易入超代金一千一百萬ピアストル(三年平均では出超二千五百萬ピアストル)と貿易外の利子、配當、利潤、移民送金、海外役員給與を決済して來たのだから、この磅、法が國際通貨性を失つた上に印度支那銀行の通貨準備たる金及び外國爲替も或ひはフランス銀行と犠牲を共にした部分も多いと考へられる一方、輸入は對米乃至ドル仲介をより多く必要とするとなると、米弗資金乃至國際的決済資金は勢ひ窮屈となり、緊急なる資材輸入代金は決して自由ではないであらう。

この點、最近に於て協定せられた圓ピアストルによる清算制度、三ヶ月の清算等、五百萬圓までの据置は伸縮性ある支拂協定であり、前述の貿易協定による物の交流に即應して之を計畫的に規正する一方、爲替資金を能率的に運営することにならう。けれどもこの清算機構が相互補足の發展による貿易量増大或ひは米代金延拂ひの順調なる進行といふ條件に恵まれなかつたりするところがあれば、佛印經濟の物資不足やインフレ濺化の問題も提出されるであらう。

既に佛印通貨ピアストル發行も急速な膨脹を見せ、昭和十一年の一億一千三百萬から十五年三月は二億四千八百萬、十五年末二億八千五百萬乃至二億九千九百萬ピアストル(四億五千萬との發表もあり)と二倍半乃至三倍化してゐるし、物價も大戦勃發來騰貴し始め、十六年一月と前年四月を比較しても九ヶ月間に染料は四九%、砂糖四八%、セメント五九%、メリケン粉四〇%、ホング

イ炭三八%、ガソリン小賣二九%、粗二六%、煙草二三%の昂騰ぶりを示し、他方輸出困難に當面した土産品は殆ど騰貴しないが、胡椒、コブラの如く六五%、三三%といふ慘落すら見せてゐるから輸出入品の價格の喰違ひは一般的な戰時經濟的諸相の進展と共に佛印經濟をも試練するところが豫想される。況んやかゝる條件に日本が印度支那の經濟を支持しつゝ開發を急行するとなれば、勞力、物資、輸送その他の凡ゆる面にわたつて総合的な能率的經濟體制を有たねばならぬ。この事は日、佛印間に從來の商業的關係を越えた經濟協同の原理と機構とを樹立することであるが、金融通貨關係に於ても一層徹底した計畫的決済及び信用供與制を案出し實現しなければならぬ。勿論、以上で問題は終つたのではない。政治的にも經濟的にも今一層、深刻な歴史課題が伏在してゐるけれども、機微に互るからこゝでは措くが、印度支那も東亞的轉換の動搖の裡にあり、日本の印度支那への政策も實に微妙であつて、最後に我々が心すべきことはだらしのない政治は一切を不毛ならしめ、單なる強力で破壊に終るといふことである。(一六・六)

### 第三節 ビルマ民族運動の東方化

#### アジア的意識の復興

新聞紙ラングーン特電によれば、ビルマのソー首相は、ビルマを自治領たらしむべしとの要求



が英國によつて確約を與へられざることに對し忿懣の意を表明し、その際、日本の植民地政策を稱揚する如き言葉を洩らしたと言はれ、ビルマ問題は所謂援蔣ビルマ・ルートの問題と複合されて最も緊張せる國際危局裡に擡頭しつゝある。また同じ報道によれば、ビルマの指導的な新聞サン紙は次の如き社説を掲げビルマの對日感情を表白してゐる。「日本のいはゆる東亞の新秩序とはいかなる意味であるか。日本の目的はアジア諸國を外國の支配から解放しようとするものであるか。日本はアジア諸國を歐洲諸國同様の水準にまで高め上げて獨立させようと企圖してゐるか。もしさうだとすればアジア諸國は日本の指導を喜んでうけるべきである」と。我々はこゝに又しても「東亞共榮圈」なる抽象的な言葉をおしつけ困惑させるのではなく、明確な原理と具體的政策とを以てこれを内容づけ、或ひは包括的な言葉よりも實際的な關係を設定しつゝ、具體の方策を明かにした實行を先行せしめねばならぬことを痛感するのである。それにしても我々はあまりにビルマが今日英國の支配下にあるといふ事實に拘束され、一般には關心と信念とに於て著しく消極的であつたが、いまは明確にビルマを再認識しなければならぬであらう。

ビルマは總面積二十六萬平方哩強で我國にほゞ近く、人口は一千四百六十六萬餘（一九三一年調、一九四二年の發表一千六百八十二萬）で、その中約一千三百二十四萬が土着諸族（ビルマ族は六割二分弱、カレン族九分四厘、シャン族七分一厘、その他）であり、約百四十三萬の在ビルマ外國人中印度人が百一萬餘、支那人十八九萬、印度系ビルマ人十八萬、歐洲人及英系印度人約三

萬人等がある。ビルマ族その他の土着民族は蒙古族で北方より南下し、一つは佛印、一つは泰、一つはビルマに至つたものであり、従つて容貌並に生活意識も日本人に類似し且つ慍悍である。これを通じてのアジア的意識、佛敎國であること、英國の羈絆から脱する據點を求めること等からビルマ人の對日感は自然の親近的感情に溢れてゐる。

#### ビルマ人のビルマ建設へ

しかもそれは歴史的であつた。日露戦争はビルマ人を衝擊し、ビルマ最高の聖僧ウオツタマは戦後日本に来て、ビルマに歸國後「日本」なる書を頒布して日本の實情、勝利の原因、ビルマ人の日本に倣つた團結による解放を説き、特に青年僧侶を痛く感激せしめ、ビルマ佛敎青年會を組織して獨立運動を開始したのであつた。この佛敎青年會の後身たるビルマ人聯合協議會(G.C.B.A)は今日も存続し、同系統五派を以て聯合五黨に結合されてゐる。またベ・モイ黨の指導者ベ・モイは「我々は餘りに西方ばかり見てゐた、將來は東方を見ねばならぬ」と言ひ、日本を學ぶべきことを主張してゐる（ビルマ分離を標榜し第二黨となる、ベ・モイ博士の指導下にあり、ビルマ大衆の直面する政治的經濟的目標としてプロレタリア運動によつて、農村自治制度、國庫による義務教育制、貧農への耕地附與、土地抵當、銀行による農民高利負債からの解放、地租法改正による貧農負擔の軽減を政策として掲げてゐる、分離直後首相ともなる）。その他にチー・ライン黨、獨立黨、農民黨、フェビアン聯盟（英のフェビアン協會に倣ふ）タキン黨、ビルマ獨立を主張する



ポイコットG・C・B・Aがある。またベ・モー博士を指導者として今次大戦勃發後、ビルマ自由聯盟(フロック)が組織され獨立を標榜してゐる。この中タキン黨(別名自由闘争聯盟)は一九三八年の反英暴動にも大活動を行ひ、共產主義的とさへ言はれてゐるが、ビルマの諸黨が何れも民族主義から反英、反資本の傾向を有ち社會主義的な傾向のあるのと同様でアイルランドのシンフェン黨的なものと言はれ、寧ろ急進的な民族主義黨といふのが本質のやうであり、活潑な活動からビルマ獨立について期待されてゐる。一般に立遅れた諸國の民族運動は表面的には各種のイデオロギーに紛淆されてゐるから、我々は寧ろ言葉よりもその本質と實際的方向を鋭く把へて領導し延いて原理的變化を遂げしめる程の政治的思想的用意がなければ東亞圏の急速な實現は不可能となり、ビルマの根柢にある親日的なものが正しく發展せしめられることを期待し得ないであらう。

けれども今一層、視野を大にすれば、これらの諸黨分立はビルマ民族主義の脆弱性を示して居り、或ひは實質的に信頼しがたき要素も發生してゐるのであつて、今後の期待は民衆を背景にした新興學生群乃至インテリゲンチヤによつて再建されることであらう。然るに學生群は一般民衆が日本に一途に期待し、英國による佛教破壊に脅威を感じる僧侶が更に親日的であるのに對して白紙の状態で日本を學ぼうとし、或ひは懷疑的分子もあると言はれる。また官吏層は生活的地位から英國的であつても、日本に近い感情はあるが、行動に於て、感情に於て、氣力を失つてゐる

ものが多いと言はれる。何れにしてもビルマは英國の凡ゆる工作にも拘らず根柢には深い東亞的感情を有つてゐるのであるから、日本の正しい政策と遅れた諸民族への援助とは深く期待される。ビルマ人議員が英國人席を指し我々を征服した海賊の子孫と言つて痛烈に攻撃しても聞き流す英國人に劣らぬ根氣強さを以て、ドバマ(我等のビルマ)、ビルマ化を叫ぶビルマ民族主義の東亞的結合を援助する用意が無ければならないであらう。昭和十四年史上空前の反英反印運動が勃發し、今次大戦勃發するや共同戦線を以て闘争すべき好機來れり、ビルマ自身の自由の爲に戦ひ目的を貫徹せよと一層拍車をかけられてゐる。ビルマを繞る米英支の基底にはかうした民族主義が鬱然として醗酵してゐることを忘れてはならない。

#### 經濟的實權を握るカラ

ビルマ民族はその他の點に於てもかくタイ國に似てゐるが、昭和十四年九月印度軍司令官ロバート・カツセルスは「東方を見よ、マレを失ふことはビルマが脅かされることを意味し、ビルマが敵の手にあることはベンゴール(印度の中心)の心臓に拳銃を擬せられることである。この地域(ビルマ)は印度の前哨である」と訴へてゐるが、英國は英國の國防及び經濟の足場として極端にビルマ利用政策を強行してゐる。従つて政治に於て經濟開發に於て全くビルマの植民地化を遂行し來つたから、ビルマ民族主義がこれを最高目標としてゐることは言ふまでもないが、泰國に於ける華僑的存在として印度人を持ち、併せて華僑を持つてゐる。即ち大部分は農民或ひは勞働者



である。他は經濟的には實權を英國資本と結合した印度人高利金融業者（マドラスを本據とするチエツテイヤー）その他の手に握られてゐる。商業貿易の九七%、印度ビルマ海運の三分の二土地所有の九〇%（一九三七年現在の米作地十三地方不良地主所有地の四分の一は印度人チエツテイヤー所有）を占めて居り一九二九年の調査によるチエツテイヤーの對ビルマ投資は七億五千ルーピー（内農業五億ルーピー）と言はれる。これは代理人に對し一割二分乃至四分を以て貸付け代理人は農民に一割五分乃至三割（甚しきは三割以上）を以て貸付け容赦なく取立てると同時に不能の場合は土地を奪ふのである。他方印度人クローリーを伴ひ上下からビルマを動かしてゐる。昭和四年前の五年平均ビルマへの移民は流入四十萬餘、流出三十五萬で五萬五千が残り、昭和十二年前の五年平均では流入二十五萬、流出二十三萬で落付くものは二萬二千餘であつたが、大部分は印度人クローリーであつた。

華僑は二十萬餘になつてゐるが、その過半はビルマ生れの所謂僑生であり、穆かであるが他の半數近くは支那生れの移民で新客であり、本國的意識が強く抗日的である。雲南人が壓倒的であり、次に次ぎ福建人、廣東人が多い。精米、米商（輸出米の一割）農民への金貸、雜貨、金物、料理店、茶店、寶石、錫、鐵、製材、毛皮、その他各方面に活動し、苦力も鑛山、精米所等に流入してゐる。

従つて經濟的には外來者（カラと呼び蔑視す）の手に實權を奪はれ搾取されてゐる。ビルマ人の

民族主義は反英に次ぎ反印度的であり、更に華僑はジューより悪い、ジューは儲けた所で費消するが華僑は本國へ持ち去ると見てゐる點は、泰國に於けると同様である。しかも支那文化的影響が生活にあつてもそれを認めるのを不快視するにも拘らず、例へば支那人の血液が廣く混血してゐることは泰國と同様である。かうした點に於て、南方民族主義は特殊の構造を有ち、買辦的支那との不一致に於ては、正に日本と立場を一つにしてゐることはビルマとても亦同様であり、ビルマ民族の對日感情は生活的基礎を有つてゐるのである。かくてビルマに於ても日本は民族問題と農業農民問題についての深い理解と達識とが要請せられてゐるのである。

#### ビルマ資源の東亞的地位

ビルマが外來者のかく目標になつたのは資源的に豊富であるからである。第一は地理的條件に伴ひ佛印、泰と共に米その他の熱帯、亞熱帶的農業資源である。栽培七百五十萬ヘクタールの中六七%までは米であり、油種子（落花生、胡麻）が一四%、雜穀五%、棉花二%、ゴム、その他五%の割合である。殊に東亞第一の輸出力を有つ米に於ては一九三七——九年度に至る三年平均に於て約五百萬ヘクタール、七百六萬噸を産し輸出約三百三十萬噸、生産の四六・七五%といふ有様で、印度の食糧補給地として重要であり、民族主義からしてビルマと同じく反印的なセイロンも亦ビルマ米輸入に専ら頼つてゐるのである。



輸出生産	千トン	%
生 産	四、九九五・五	
輸出	七、〇六四	
印度	三、二九八・七	一〇〇・〇
歐洲	一、五九六・六	四八・四
セイロン	六〇三・七	一八・三
馬來	三七二・四	一一・三
その他	二六〇・一	七・九
	四六五・九	一四・一

  

面積	千ヘクタール	生産	千トン	輸出	千トン
落花	三三七・〇	生 産	一七四・〇	輸 出	
胡椒	五五九・五		四八・〇		
ゴム	四三・八		一〇・四		八・一
豆類	五四一・八		...		一一七・四
棉花	二〇二・〇		二二・〇		一九・六
烟草	四〇〇・〇		四三・九		不足
南 穀	三三		三九・二		

註 豆類ハ一九三六―八年平均

米は下ビルマに八割まで集中し、同地帯の耕作地の九割まで占めてゐるが、上ビルマでは全耕作の三分の一で同地方は油種子、豆、棉花、ゴム等が作られてゐる。他の作物に於ては次表の如き生産が擧げられてゐる。(一九三七―九九年に至る三年平均)

更にビルマは「チークの家郷」と言はれる程にチーク材(年二十五萬トン輸出殆ど印度、英國へ)其他の林産資源に富み、五箇の英人製材所が製材を獨占してゐる。アラカン地方の竹林は世界第一と言はれ、英人が利用してゐるが、これに對し全アラカン青年會議は日本が竹・パルプの利用を開始したから、日本にこれを供給しうると言つて反英決議を行つてゐることは産業開發に於けるビルマ民族主義の方向を語るものとして注目される。ビルマ人は佛教のため自ら殺生を好まぬから、ビルマ漁業の開發は今後に屬する。

ビルマはまた鑛産資源に於ても重要視される。石油、鉛、亜鉛、タングステン、錫、銅、ニツケル、アンチモニー、蒼鉛、モリブデン、鐵或ひは寶石等各種のものに互つて居る。

石 油	千トン	千トン
タングステン	二七一・四百萬ガロン	×鉛
錫	五・六千噸	錫
鉛	六四・五	×銅
ニッケル	七・二	×アンチモニー
亜鉛	二二・二	×鉛
ニツケル	一・〇	銅
アンチモニー	〇・二	鉛
亜鉛	六六・六	コバルト

註 左欄は×字の換算、一九三八―四〇年三年間平均

三・三  
七八・〇  
〇・二



貿易構成に現はれた對英極格

更に以上を輸出餘力といふ方面から見ると、次表の如く、米を筆頭として三百十萬噸、二億四千四百ルーピー(四五%)、これにその他農作物を加へると輸出の半額を超える。

次は礦油及びパラフィンの九十三萬五千噸、一億四千三百萬ルーピー(二六・七%)がタンクス、鉛、錫等の五千萬ルーピー約一割であり、チーク材その他の三千三百萬ルーピーで六分である。この中礦油全部、米の六割餘(百九十萬噸)木材の八割、雜穀、豆類の九割強、漆の九割近くは何れも印度向輸出せられ、印度がビルマに依存してゐることの甚しいことが明かである。(全ビルマ輸出の六割は對印)

品名	一九三九年 (千噸)	一九四〇年 (百萬ルーピー)
米	三、一〇〇	二、四四一
雜穀及豆類	二五〇	六・三
油	一四九	一二七
馬鈴薯	五〇	三〇
ゴム	一	二九
棉花	六・六	五〇
煙草	一七	一〇・二
木材	〇・八	〇・六
合計	二五八	三五〇

品名	一九三九年 (百萬ルーピー)	一九四〇年 (百萬ルーピー)
漆	一・七	〇・四
皮革	五・六	二・五
礦油	八七八	一一七・七
パラフィン蠟等	五七・三	二六・〇
ウアルフラム	一一・〇	二三・八
鉛塊	六三・〇	二〇・五
錫塊	三・四	七・〇
硬玉	〇・〇二	〇・〇七
合計	二	一・四
合計	五四〇・五	五五三・四

註 何れも財政年度。

その反面に於て二億五千百六十萬ルーピーの中印度よりの輸入は一億三千九百萬餘ルーピー、五割六分を占めてゐる。商品別には綿製品の六割七分の一億一千九百萬碼三千七百五十萬ルーピー、ガンニー・ベツグ四萬五千餘噸約一千八百七十五萬ルーピー、金屬鑛石、煙草、棉花、植物油類、石炭、豆及粉を輸入してゐる。更にその他を含めて個別に貿易關係を見ると次の如く、英帝國への輸出四億八千二百萬ルーピー約九割、輸入一億九千五百萬ルーピー、七割八分を占め壓倒的である。

一九三九年のビルマ個別貿易



輸出	輸入
印度	百萬元
英國	三三〇・六
セイロン	七二・七
馬來	三〇・五
香港	三〇・七
英帝國	一・三
獨逸	四八一・九
日本	七・二
日蘭	二一・九
蘭印	四・二
米國	五・四
合計	五五〇・六
	二五一・六

ビルマ・ルート貿易とビルマ人の動き

ところで問題のビルマ・ルート貿易であるが、ラングン||マンダレ(三百八十六哩の鐵道中二百哩複線、他は單線)マンダレ||ラシオ(百十四哩鐵道)を経て重慶に至る二千百哩の中、昆明・ラシオ間七百二十一哩(ビルマ側百哩)が滇緬公路であるが、ラシオ、昆明二週間行程で毎時十九哩の速度で三トントラックが動いてゐると言はれる。ビルマ人は支那移民の流入、英支による武器輸送路利用に反對してゐるのであつて、英國は對支援助を口にせず、北ビルマの開發として工

作してゐるのである。貿易統計(海路のみ)によれば支那向輸出は綿糸布を第一として鉄鋼、石油、諸金屬に及んで居り、支那からの輸入は大部分生糸で少量の銀が出てゐる。しかし海路貿易は數量的に極めて少いのであるが、これに反し陸路によるビルマ路線貿易は通過品として従價一分を課し別の統計になり、且つ武器彈藥は秘密にされてゐるが、一九三九年四月から一九四〇年三月の一年間に總價額一億一千九百五十萬ルーピーに及んでゐることは注目される。

機械用品	一〇、六八三	寶石及貴金屬	三、四四一
發熱用品	二、二八六	衣服	一、七七四
ゴム製品	一、〇六六	卑金屬	一、三〇一
化學藥品	六五七	木材コルク同製品	一五四
織物	二四〇	雜品	六二七
其他	九七、二八〇	計	一一九、五〇〇

右の中九千七百餘萬ルーピーが武器類に該當するであらうが、更に十六年の通過貿易品も一一三九一四、八八四ルーピーに上つてゐる。ビルマの動きは何れにしても注目される。そしてそれが本質に於て東亞共榮圈への精神並に具體的努力の急進展を求めてゐることについては日本は深く責任を痛感すべきであらう。(二六・一一)



#### 第四節 作戰下馬來・比島の民族と經濟

##### 皇軍南攻の新嘉坡

ハワイに對する皇軍作戰空前の勝利と並行して、シンガポール作戰も既に大戰果を進捗せしめつゝある。大本營陸軍部(第二日目たる九日午後十時發表)によれば、英軍の頑強に死守せんとせし英領馬來北部の要衝ポバム・ラインを攻略した。一方、泰國通過に關する日泰協定がヒボン首相の英斷によつて承認せられ、皇軍主力はベンコック及び郊外に進駐するに至り、日泰何れも米英に對するアジア解放の大戦争を開始した。他方ビルマより南泰へ進入し或ひは錫及びゴムのブケット島(泰領西海岸)を占領し來れる英軍を撃攘しつゝあること、それと同時に、この北部英領馬來ケランタン州及びシンガポールへの大爆撃が繰返されたとの他の報道も傳へられる。我々は一度決すれば何者をも恐れる事を知らざる祖先の血が急速に蘇りつゝあることに、大なる信念と歡喜とを感じるのである。(執筆中早くも第三日目の號外は英極東艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェルス(最近代式三萬五千トン)、戦艦レパルス(三萬二千トン)がクアンタン沖にて撃沈、轟沈せられ極東艦隊主力の潰滅せしことを報道す)

シンガポールは、英人が難攻不落を誇る軍港であるが、一方極東總司令官ポバム大將は英空軍

の權威で多數の飛行場に戦闘機スピットファイヤー、ハリケーン、爆撃機ブレンハイム、ロツケヒード(米)、ハドソン哨戒機、或ひは雷撃機サンダーランド大飛行艇を配置し、陸兵また急速の増強を見たにも拘らず、我が空軍の「シンガポール附近テンガー、セレタ兩空軍基地及び空軍司令部その他重要軍事施設に對し夜間爆撃を敢行せり」(大本營海軍部九日午前)や陸海の敵前上陸等眼中敵無しとの慨ある活躍を見せてゐる。

ところでシンガポールは英本國から八、二〇〇哩の遠距離にあるが、ジブラルタル以上の要塞港として次の如き重要な地位にある。

サイゴンから	六四〇哩	香	港から	一、四三五
バンコックから	八〇五	マニ	ラまで	一、三四五
ダーウィン(濠)まで	一、九〇〇	ラングーンまで		一、一五〇
セイロン島まで	一、五六五	カルカッタまで		一、六六五
日	本まで	二、五〇〇		

これでも明白な通り日本からの遠距離は、日佛共同防衛によつて抗日的に脆弱化し、泰との協力による平和進駐によつて一層無力化しつゝあるのである。しかし今日までに五千萬ポンド(八億五千萬圓)を投下して築いた軍港だけに、例へば主力艦數隻を横付けにし得る二千二百呎の大埠頭、世界第三の浮ドック(五萬噸の大軍艦を修理し得、全長八五五呎、幅二〇〇呎、建造費二千百餘萬圓)世界第二の乾ドック(全長一〇〇〇呎、幅一三〇呎、干潮時盤木上の水深三十五呎、



建造費一千七百萬圓) スエズ以東最大の起重機その他の機械工場、發電所、倉庫などの施設が結合されてゐる。それにまた、兵站基地としては一年間大艦隊を補給し得る二百萬噸の貯油タンクの群島があり、全島の要塞化は四飛行場と共に夥しい要塞が施設されて、その中には長さ六十呎、射程三十哩に及ぶといふ十八吋砲(約一噸半の巨彈發射)も裝備されてゐる。

しかし、優秀な日本艦隊がカムラン灣を根據地としてゐることが事情を一變せしめたこと、軍港の港口狹少のため攻撃を受けた場合、迅速に反撃し得ず、機雷を敷設すれば閉鎖され、また港口附近暗礁が多く潜水艦の行動を不便にすること、馬來半島とはジョホールベル市と陸橋で連絡しそれが遮断され、ば封鎖状態に陥るが、陸路からの進撃はシンガポールの死命を制するであらうこと等淡路島より稍小さい長さ二十六哩、幅十四哩のこの要塞島は脆弱點が少くない。それに守備する兵に英國兵以外のマレー人兵も印度人兵も、白色英人とは異つた感情を持ち、最後まで英兵たり得ぬこと等の政治的民族的原因も伏在してゐる。

#### 馬來の民族的復合

前節にても示唆されてゐるやうに、作戰時乃至作戰後の經營に於て、直ちに問題になるものは民族及び經濟經營工作である。然るに馬來は民族乃至人種的に見れば、華僑が二百三十五萬八千人、總人口五百五十萬の四二・八%を占め、それに次いで馬來人が二百二十八萬以上四一・五%に達してゐる。それに次ぐ者は、印度人の七十四萬九千人一三・六%である。これからすれば

三萬を越える植民地搾取者たる英國人は別として、馬來人の運命を特に考へなければならぬであらう。馬來人の民族主義的傾向も亦、泰、ビルマと同様に經濟的實權を有つてゐる華僑及印度人に反對して起り、自尊心が強いにも拘らず、植民地經營となると土着民族の風俗習慣に干與せず、慎重を期する英國人の巧妙さによつて、他面權力的彈壓によつて、直接反英運動を形成してゐないが、馬來民族主義の反華反印的傾向は日本の東亞政策への協力の基礎ともなるであらう。皇軍が作戰しつゝある泰國境のケラントン州その他の非聯邦馬來諸州に馬來人が壓倒的であり、南のジョホール州は、海峡植民地が華僑の壓倒的なるに對し、ほゞ兩者匹敵してゐる。それにイブラヒム王は親日的で日本へ來遊し勳一等の拜綬者である。

けれども他の一方、新たな東亞的自覺へ動く場合、華僑及印度移民、殊に前者の生活力及び經濟力は日本にとつても、東亞にとつても他の積極的力となることを心得ておかねばならない。だが、こゝで注意を要することは、六千を越える在住日本人は鐵礦、或ひはゴムの經營等、馬來の産業開發力としては力強い存在であることである。これらの實體からすれば馬來は正に東亞民族の複合體の感がある。これに今や日本への協力に明確に轉換した泰國が嘗て英國にケダー、ケラントン、トレンガヌ等の諸州を奪はれてゐることを想起するならば、英領馬來の解決は益々東亞的問題として合成されてゐることに氣付くのである。

#### 英領馬來の資源と封鎖



民族問題と同時的に重要な經濟經營が問題になつて來るが、その資源的狀態を貿易面から見ると、昭和十四年輸出七億五千萬海峽弗、輸入六億二千八百萬海峽弗、出超一億二千二百萬海峽弗であつたが、十五年はゴム、錫等の重要品の價格數量の同時的增加は輸出十一億二千七百萬海峽弗といふ未曾有の軍擴景氣を現出し、輸入も八億三千三百萬海峽弗に増加したけれども、出超は實に二億九千四百萬海峽弗に上つた。同年の輸出十一月累計中、對米五億三千三百萬海峽弗五・九%と飛躍的に増加し、對英帝國二億九千六百萬海峽弗二八・八%、對日五千六百萬海峽弗五・四%の割合であつた。従つて英領馬來の封鎖が米英にとつて大打撃たることは勿論である。従つて米國は對日危機を豫想し、ゴム、錫の貯藏に全力を挙げたが、その結果は例へば同年ゴム輸出七十七萬噸、六億三千百萬海峽弗（隣接國からの輸入を除く馬來の純輸出五十三萬八千噸、約四億五千萬海峽弗）に上り、前年に比し數量約四割の増加であつた。（純輸出増數量四三%、金額七〇%）

馬來の鑛產資源については、昭和十四年に於て、錫五萬三千五百噸、鐵鑛百九十四萬噸、石油九十萬噸、石炭四十四萬噸、燐礦石十七萬噸、タングステン鑛五百十四噸、天然ガス一億二千百萬立方米、ボーキサイト八萬四千噸（輸出のみ）マンガニ鑛三萬噸、チタン鐵鑛一萬一千噸に及んでゐる。詳細は他の項に譲るが、これを同年の貿易面から見れば、著しい輸出餘力を有つものは錫八萬二千噸、一億五千八百萬海峽弗（但し錫鑛及コンセトレート四萬一千六百餘噸を輸入）、そ

の中五萬六千八百噸即ち六九%まで米國にその輸出を依存してゐる。その他は對日本の關係深かつた鐵鑛百九十四萬五千噸が目立つ。これに反しガソリン純輸入十三萬二千餘噸、重油輸入七十六萬六千噸、燈油三萬四千餘噸、石炭六十一萬八千餘噸（國內生産の一・四倍）が不足資源である。

これに對し不足農産品は別表の如く米、肉、ミルク、バター、煙草、砂糖、飼料、野菜、果實、卵、コーヒ、茶等の食糧品であつて、これは經濟封鎖に對し脆弱點を成してゐる。これに反しゴム、コ、ナッツ及製品、パイナップル、オイルパーム及製品、檳榔樹實、ガムビア（染料）、デリス等の工業原料とタバコカ、サゴ、胡椒、肉豆蔻等の食料品は輸出品である。今、輸入すべき農産品の純輸入と、輸出品の純輸出を挙げれば（ 그리스ト作成）次表の如く、數量に於ては入超、四十一萬五千噸、五十一萬七千噸、三十九萬九千噸、金額は優に出超一億二千九百萬海峽弗、一億九千萬海峽弗、二億四千八百萬海峽弗である。

昭和十三年	輸入品純輸入		ゴム純輸出		其他純輸出	
	千トン	百萬弗	千トン	百萬弗	千トン	百萬弗
十四年	一、一一一	三二五・三	三七一	一九八・七	三二五	三三・七
十五年	一、二二二	三一九・一	三七六	二六一・〇	三一九	三六・九
	一、一七一	二二三・二	五三九	四四九・八	二三三	三二・八

次に十五年度の統計によつて商品別にこれを示せば次の通りである。



品名	輸 入		純 輸 入	
	千ト	千弗	千ト	千弗
足不農産品	七八八・七	六二・四	六五三・二	五一・九
米 及 穀	五七・四	二一・三	五三・五	一九・二
家畜、肉、ミルク、バター	六・七	二二・三	五・六	一九・六
煙草	一三五・五	一六・〇	一一五・三	一三・七
砂糖	二二〇・八	六・二	二〇五・二	五・七
飼料	八五・二	九・〇	六九・〇	七・二
野菜	二八・一	六・四	二三・七	五・五
果 實	二一・三	三・七	一七・四	三・一
落花生及油	七・一	二・八	六・三	二・五
家禽及卵	一一・六	二・九	七・七	二・一
茶	二・八	二・一	二・二	一・四
過剩農産品				
ゴム	七七二・八	六三一・二	五三八・五	四四九・八
ココナツツ及製品	一七九・四	一五・二	六七・七	九・六
パイナツプル	四〇・二	八・四	四〇・二	八・四
オイルパーム及製品	六五・三	六・七	六五・二	六・七
檳榔樹實	九四・三	八・九	四三・九	四・三
胡椒	二一・三	二・三	一五・一	一・六

品名	輸 入	純 輸 入
サゴ	六七・二	二・六
ガム	四・四	〇・八
アガ	一・四	一・三
胡椒	九・八	三・四
豆	一・三	〇・三
肉	〇・六	〇・三

註 十五年平均建値は百海峽弗=一七八・一五八圓

英軍侵入と泰國資源

英軍の南泰への侵入は、馬來よりと前後して北ビルマ(シヤンステート)からチエンライ附近へ、並びに南東ビルマからブラチャアア附近へ侵入し來つた。泰國軍は前者には應戦すべく北上しつゝ、あると同時に南泰では既に撃退したとベンコック電報は報道してゐる。この附近には泰第一の都市たるチェンマイ(人口五萬日本領事館新設)やランパンがあり、これら諸都市はビルマへの要衝であるが、此のチェンマイ附近は米、豆、棉花、ステツクラツクを産する外、特にチーク材の伐採集散を以て知られ、ボルネオ商會、ボンベイ・ペーマ商會等の英國資本の北方據點である(他に英米煙草トラストの煙草園あり)。

しかし經濟資源的に見て重要なのは、勿論、南泰であつて一昨年泰輸出三億三、四千萬圓中、米の一億八千萬圓(五五%)に次ぐ錫及錫鑛六千五、六百萬圓(二〇%)とゴム四千六百萬圓(二三・九%)の二大商品は殆ど全部、馬來に接続せるこの南泰の所産であつて、これが又英國資本の支



配下にあり、例へば錫(金屬分二萬噸)の六割は英系會社であり、二割華僑、その他の小經營者二割も結局、英國資本の買辦であるか、殆ど隸屬してゐるかする状態であつた。ゴムの生産五萬噸は比較的小栽培者が多いが、結局、華僑(泰國籍化を含む)その他原住民にして英國の經營以外であつても、金融網、取引網を通して英國の支配下にある。そして錫、ゴム何れもベンコックより北上する代りに、ヤラ、ヘヂヤイを経て或ひはブケット島を経てピナンへ南下する經濟機構が出來上つてゐる。この場合、注目されるのは買辦的なる華僑財閥が形成せられてゐることであつて、例へば南泰は葉賢才、珍美、瑞典、震源の四人が動かしてゐると言つてよい程である。葉賢才は中國籍のまゝの福建人でヘヂヤイを中心とする地域の西半に勢力を有ち百萬ベーツの資産で以て、錫、タングステンの仲買輸出に優勢である。これと並ぶ珍は五十萬の資産でタングステン錫、ゴムに於て活動し、ヘヂヤイ東半の代表で泰國籍化してゐる。

英軍が占領したとも傳へられるブケット島はピナンへ九時間を以て航行し定期船があるが、この島の有力者たる瑞典(泰國籍)は五百萬ベーツの資産を有ち、島内及び對岸地域の錫、タングステン、ゴムは固より家作に大規模に投資してゐる。これに次ぐ震源(泰國籍)は十一の鑛山に投資し、發電所を有つてゐる(資産百萬ベーツ)。皇軍の南泰進駐はこれら華僑を日泰へ向け、ブケットは兎に角、ピナンへの南下流出は或ひは既に日本領事館の新設を見たシンゴラ港から盤谷へ北上乃至日本へ輸出される新コースが成長しさうである。しかし今後の英領馬來の地位轉換はシン

ガポール、ピナン等をして東亞的體制下のアジアの要衝、物資集散の基地たらしめるであらうことが今日では最早や現實の課題となつたのである。

#### 我が空爆下の戰略的諸島

**香港攻勢開始** 我が陸海軍の海南島、南部佛印確保によつて、軍事的意義を失つた香港が更に最後の關頭に迫ひやられてゐる。皇軍の激しい空を蔽ふ大爆撃、九龍租借地と廣東省との國境近くの粉嶺への皇軍進出、哨戒艇セラト・モナンス型の撃沈、陸鷲による砲艦航行不能等、風前の燈火の感がある、だがこれまで敵性の限りを盡してゐた香港も、一度皇軍の手に歸するや貿易、交通ルートの東亞的基地として逆に寄與するであらうことは、新嘉坡の運命と同様である。アジア復興の光は戦火のたゞ中に萌し、我々を激勵するの思ひがある。我々の思想も經綸も飛躍點に立ちつゝあるのだ。(十二日、九龍全市皇軍の手に歸す)

**グアム島占領** ところで米國の東亞侵入の南方包圍線は次々に爆破されつゝある。米國の前哨たる比律賓のマニラ(一六〇〇哩)、後方ウエーキ島(一、五七〇哩、但しハワイへは三、〇〇〇哩の遠方)目標横濱(一、六六〇哩)等へのほゞ重點に當るグアム島は、開戦と同時に空爆され、燃料タンク、ホテルは燃焼したが、十日未明に早くもわが陸戦隊の手によつてアブラ要港、(第二流軍港、大貯油庫、大軍需工場、強力無線電信所、兵五百名)を占領され、少佐以下三十名を捕虜とし三千トンの油槽船を拿捕するに至つた。(十一日午後四時半の發表によると遂に首都アガ



ニヤを占領、總督以下を捕虜とし次いで完全占領成る。グアム島は南北三二哩、幅四乃至十哩、面積二〇六平方哩で新嘉坡島と同じ大きさの小島(珊瑚礁ならず)である。土人は二萬一千が農業に従事しその他に守備隊一千人、警備艦が配置されてゐた。

**ウエーキ島爆撃** 海鷲は九日午前ウエーキ島を再攻撃し、敵戦闘機五臺を撃墜、兵舎、倉庫群の半數を炎上せしめたと言はれるが、ピール、ウイルクス兩島とコの字形を成す島で汎米航空會社の航空基地であり、潜水艦基地として設備されてゐる。

**ミッドウエー島** これも我が海軍航空隊の爆撃下にある。ウエーキ島より八百哩、二つの島より成り大は南北一哩半、東西八分の七哩、小島は南北四分の一哩、東西八分の三哩内外である。珊瑚礁に包圍され天然の良港である。

**ナウル島** これは米國の中央南方線ではないが英濠新の共同委任統治領であり、オーシヤン島と並んで燐石の産出で名高い(年産昭和十四年九十三萬二千百噸の大量に及ぶ)住民はミクロネシヤ人一、七〇〇、支那人一、二六〇人、英人一九四人である。こゝも亦、皇軍の爆撃するところとなつた。

#### 我が南洋群島の重要性

西太平洋の大作戦と共に、ハッキリ重要性が我々の眼に映じて來たものに我が南洋群島がある。それは沈むことのなき航空母艦であり軍艦であるからである。グアム島の北に位するサイパン島

を中心とするマリアナ群島、ウエーク島の南方我が群島の東端をなすマーシャル群島(支廳ヤルト島)、ボナベ支廳下の諸島(ボナベ島あり)、トラツク支廳下の諸島、ヤツブ支廳下の群島、その西方にパラオ諸島が横たはつてゐる。南洋廳のあるコロール島は良港を附屬せしめてゐる。パラオ支廳内の住民は一萬三千六百人、そのうち邦人七千五百人である。それから三、四時間を経て航行し得るアンガウル島は全山燐礦で南拓の手により開發、埋藏三百萬トン、邦人は五百、チャモロ百五十、カナカ六百人が住民である。アンガウルの東北ベリリウ島(埋藏十五萬トン)、南西の遠方に浮ぶトコベ島(埋藏十二萬トン)でも燐礦が南洋興發によつて開拓されてゐる。このパラオ島はミンダナオ島のダバオ空襲やパラオ侵入の米潜水艦の撃沈等を以てその重要な地位が鮮明となつた感がある。戦況公表につれて、我が南洋群島はいよゝゝその緊要な姿を現出しさうである。

#### 比島の戦略的重要性

他方、比律賓に於ても、十日、十二日と陸海軍新鋭部隊は緊密な協同の下にルソン島北部と南部に上陸し南北からするルソン島挾撃攻勢を完成するに至つた。この比律賓に對しランドル・エリオットは次の如くその重要性を強調してゐる。『比島は米本土から遠く離れた極東(約六千哩)に孤立した根據地であるから、これを戦略的に見るならば米國にとつては資産でなく、寧ろ負債であるとの議論が多いが、併し米國海軍が英、蘭、濠及びニュージールランド等南太平洋の



諸根據地を利用することになればこれあるが爲に米國の南太平洋上に於ける勢力は増大する」と述べて「比島は西太平洋における米國の作戰基地として最強となるべきものである。比島の各地點は基地として利用するに適し攻撃に對して不敗である」と言つてゐる。マニラ灣はコレヒドル島の要塞によつて守られ、灣内のガヴィテ軍港には燃料貯藏所と武器庫とがある。しかしこの造船所は大型軍艦の修理をなすに充分でなく、その補助としてマニラ北方六十哩のスビック灣のオロングボ(ウイントン砲臺に防らる)には一萬トンの巡洋艦を碇泊せしめるに足る修理施設がある。一方、マニラ灣はコレヒドル島のミルス砲臺、カペロ島のヒューズ砲臺、エル・フレイル島のドム砲臺により守られ、米駐屯軍の大多數はマニラ東南九哩のマツキンレー要塞およびマニラから五十七哩離れたストツツエンバーグ要塞にある。

マニラ灣に本據を持つアジア艦隊はハート司令長官の指揮下に甲級巡洋艦二隻を中心に水上航母一隻、輕巡一隻、驅逐艦十數隻、潜水艦二十隻、飛行艇三十數隻、掃海艇六隻、砲艦七、八隻その他であるが、水上機母艦ラングレーおよび潜水艦一隻は既に海底の藻屑と化し去つてゐる。陸軍はアメリカ兵一萬を基幹として比島防衛米國總司令官マツカーサー少將の下に米比聯合軍を三區(ルソン北部地區、司令部フォート・ストツツエンバーグ、ルソン南部地區、司令部フォート・ウイリアム、ミンダナオ島地區、司令部ヴィサヤ)に分ちその總兵力は正規軍一萬八千その他二萬であるが、最近急遽徴集した二十數萬のフィリッピン兵の外、本月初頭上海、天津、北京等

から引揚げて來たアメリカ・マリソン三千名が加はつてゐる。

#### 比島の資源と民族構成

ところでこのフィリッピンは大小七千八百四十四を數へる群島から成り、人口千六百萬、南北一千哩、東西七百哩に亘つてその全面積は日本の約半分十一萬四千方哩を擁する農業國である。

米比島人約七五%は米を常食とし、従つて米は最も重要な作物であり、耕地の約二分の一に當る二百萬陌が之にあてられ、一九三八年の産額は五千五百三十四萬カベンであつた。ルソン島の中央平原が全生産の五分の二を占めてゐるがアメリカ奉仕のための砂糖その他の栽培に耕地勞力をとられ毎年多額の米を輸入せざるを得ず、假に戦争が持久に入つたとすれば食糧不安から來る内部崩壊をさへ危惧されるであらう。(一カベン=三〇匁)

砂糖キユーベの砂糖と共に比島の砂糖はアメリカへの朝貢的産物であつて年産約百萬匁の九割以上が對米輸出である。かくて對米砂糖輸出について比島はタ・マ法その他の關稅法規による様々な制約を受けてゐる。この關稅法によつてアメリカは經濟的にも比島を抑へ比島獨立を永久に延ばさんと努力しつゝあつた。

椰子一九三八年度に於ける植付反別は六四三千陌、收果數三四億個、總收入九二百萬比と發表され、椰子油生産は三、一七六千リットル、コブラ輸出二四、三一二千比等となつてゐる。

マニラ麻産地はルソン島の中部および南部レイテ島、サマール島、ミンダナオ島であるが、